798-167
1200501607595
798
167

E/5

讀杜全集

卷之八

東京帝國大學圖書之印

798
167

目次

風流線（明治三十六年十月）……一
續風流線（明治三十七年六月）……三三
紅雪錄（明治三十七年三月）……六二九
續紅雪錄（明治三十七年四月）……六八一

風流線

祝使　山駕籠　ふれ狀　橋の袂　急先鋒　芙蓉館　鞍ヶ嶽
異形のもの　緣の旗　手取川　邂逅　田舍酒　綾の鼓　妖
靈星　鶯籠　紫しらべ　革鞄の中　空薫　馬之部　みだれ
髮　うたがひ　浪裡白跳　寄手　禮ごころ

祝使

「あれ失禮、どうぞ此方へ。」

と座を讓つて、旅姿の身を片寄せた娘は、道中の風に亂れた、ばさ〳〵の銀杏返。たとへば青柳の絲を洗はず、簪の花に露置かぬ狀ながら、耳許の清らかな、目の涼しい、細面の、年紀の頃九か二十、類なく目に立つのが、赤毛布でくるりと身を、草鞋穿、脚絆掛、帶の端さへ露さないけれども、包み果てぬ色は洩れて、長き旅路を來たらしく、肩にも裾にも埃を置いたが、もみぢに霜の紅冴えて、視は濃な風情である。

床几にかけた腰とともに、小な風呂敷包と、蝙蝠傘を傍へずらした、店前に憩ふものは、唯此の一脚より多からぬ、田舍路の御休所。

老猫と痩せた犬、鷄も居るけれども、客を待つ土間は凸凹の一坪半のみ。娘は先刻から憩つて

居たが、後れて入つて來た十五六の美少年。髪黑く、面白く、唇朱きが、おなじく草鞋穿、紺足袋に紺の脚絆、身輕に効々しく裝ふに、肩から斜懸に革鞄の、何を納れたのか一杯に膨らんだ胴中を、淺黄の紐で緊乎と結へた、重さうなのを腰下り。杖にもあらぬ手まさぐり、途すがら手折つたらしい、二葉三葉しをらしく殘つた柳の枝の、長くしなふのを、すら〳〵と纏れるやうに足を引摺り、草臥れた狀して鶴來(地名)の方から迦々と此の處へ。

敷居を越すにも疲れたらしい。重い歩を休めようとして見ると、一つの外はない床几に、先客があつたので、大人しく先づ挨拶をしたのであつた。

「私の方から申します處を、つい、うつかり傍見をして居たもんですから。」

あとは目でいつて向き直る、土間の前の土手下は、船もあらず人も無き、渺々たる一大河、礫原赤く洲は黃也。水は蒼く、瀨は白く、彼方此方に分流して、近きは龍の臥す如く、遠きは虎の躍るに似て、目も遙なる對岸は、恰も國が違つたやう、日中も黃昏の趣あり、一帶の靄の中を、人と馬とちらほらして、森低く、屋根小く、山仄に、描ける海市に異ならず。

然れば川幅約一里、鶴來といふ村は其處に。旅の娘が動かした瞳は、——恁る景色に見惚れたため、我にもあらず、聲を懸けらるゝまで氣が付かなかつた——心を示して、

「何うぞ、御遠慮なさらないで、お廣く在らつしやいましな。」と草鞋の上へ草鞋を半ば、底をか

へして、しなやかに足を重ねる。

「澤山です、澤山です。」

少年は妙齡の美人と、膝を交へるのを極り惡げに、づッと片端。

此方は人馴れた風采で、

「お婆さん、お客樣にお茶を上げて下さいな。」

「はい、はい。」

古板敷の筵の上、茶釜を前に、明りとりを逆に、故と暗い方に蹲つて、目に近々と覺束ない針の運び、夏のはじめから山國は、繼物に忙しい白髮の嫗、はじめて知つたか新來の客に、しよぼしよぼとした目を注ぎ、

「おや、入らつしやいまし。」

と又つくづく、床几に並んだ二人の姿、コリヤ何うぢや、傍の納戸の古襖に、先祖から貼つてある、大津繪から拔け出した、お若衆と藤娘か、七夕樣か、雛一對。

二

「難有う存じます。」と少年は茶碗を取つて、嫗よりは、美人の方に會釋する。

「どういたしまして、御挨拶で痛入りますこと。」
娘も又自分のものでも與へたやうに、故といつて、吻々、吻々々、眞珠を揃へた齒の皓さ、冷く燃ゆる唇の花は、一たび戰ぐ時祕曲を傳へて、上手の手が樂器の線に觸れたやう、人をして神往かしむるものであつた。何の祕密もなく輕い調子で、
「一寸、植物の採集にでもお出かけなさいましたの？」
まさに埃だらけの赤毛布を絡うた、其の風采を以てすれば、革鞄を肩に草鞋穿の姿を見れば、賣藥が賣れますかと問ふべきに、植物云々と尋ねられて、少年は思はず顏を視めたが、露も玉に、水も綠に映りさうな、無量の美なる意味の籠つた美人の瞳を一目見ると、何事を思ふ暇もなく、
「何、家から使者に來ました。」
「お使者に？」
世馴れぬ狀はいふまでもない。其の草臥れた樣子だけでも、餘り長途の使者である。
「だつて御遠方からぢやござんせんかね。」
少年は川向を、優しい目で見遣りながら、
「今朝から五里ばかり歩行いたんです。纔の途なんですが、草臥れて了つたんです。」
時に思ひついたやうに、背後を振向き、

「お婆さん、湖の處まで最う何のくらゐあるだらうね。」
嫗は目とともに口を開け、
「芙蓉潟でござりやすかの。」
「あゝ、然うさ。」
「はあ、あと最う二里半さござりやす。」
「や、二里半、未だそんなにあるのか。」
「もし、貴方樣は御城下かね。」
「あゝ、」
「それは御大儀ぢや、路が惡いで培增し難儀しまするで、ゆつくり休んでござりませ。」
「お婆さん、何ぞ此の方が召食るやうなものはありませんか。」
「否、今橋向うの往還で、並木へ休んで辨當を食べました。何にも欲しくはないんだけれど、咽喉が渴いてしやうがなかつたから、お邪魔をしたんです。難有う。」
年紀にも似ない、いたいけさ、唯二つ三つの弟と思ふにさへ、抱いても遣りたいほど愛らしさうに、
「まあねえ、そんな遠くまで、何のお使者に行らつしやるの。」

少年は行儀よく膝に手を置き、
「御婚禮の祝儀に、つかひものを持つて行くんです。」
案外かな。
「おゝ！　御婚禮の。おめでたいのでございますね。それぢや御城下から、田舍の御親類へでも御遣はし？」
「親類ぢやありません、ともだちの方が緣附きました、其の人の許へ、姉さんが送るんです。」
「お姉樣のおともだち、其の方がお嫁さん、あの、奧樣なんですか。」
「えゝ、其處へ使者に參ります。」
「お嫁入のお祝ひに、貴郎のお使者。私もお姉樣の、其のおともだちになりたいねえ、可羨いこと。」
と艶麗に打微笑む。

三

聊も隔てのない、打解けた美人の擧動、唯問はるゝにのみ纔に答へた少年も、此方より、ものいひかくる便を得たが、貴女とも姉さんとも申しかねた口ぶりで、

「ですが、あの、何處へ行らつしやるんですか。」
「私。」
「えゝ。」
「私は當なしの旅烏。」
娘は頤を襟につけて、打傾き、片袖を靜に拂ふと雪のやうな、指尖で、左の肩を細りと、赤毛布を輕く彈いて、
「妙な色の烏だこと、お國には、こんなのは居ないでせう。これは天竺の烏なの。」
「嘘を、天竺にだつて、阿蘭陀にだつて、烏の赤いのが居るもんですか。」
「だつて、こんな邊鄙にも、貴郎のやうな可愛らしい方が居るんですもの。然うすりや百里も離れた、私の方へ來て御覽なさい、赤い烏はいくらでも飛んで居ますよ。」
餘の事に笑ひ出して、
「嘘つこは止して、お國は何方。」
「眞個はね、東京。」
「東京？」少年は目を睜つた。此の邊の恁る年紀ごろでは、東都は十萬八千里、一種神聖なる天上界と思惟するので、さしむかひに居る自分は如何、五里の路に疲れたのに、年紀は上でもかよ

わい女が、何うして此處までと怪むなりけり。
夢見るやうに、
「大變ですなあ。」
「些とも大變なことはないの。最う二十里ばかりさきからは、汽車がありますからね。あとは目を瞑つて居ても行かれるんですよ。連れて行つて上げませうかね。」
「否、もつと修行をして、立派なものにならなければ不可ませんが、お嬢さん。」
少年は旅烏といふものを稱するに、今や令嬢を以てした。
「これから其の東京へ歸るんですか。」
「まるで、西東なの！　私は貴郎とは行違ひにお城下の方角でせう、向うへ行きます。鞍ケ嶽といふ山がありませう。」
「鞍ケ嶽。」
睫に近き一座の山、其の空ばかり雲暗き、五月晴の空を指して、
「あれ、あの山の續きで、此の川の水上ですつて。行つたことはありませんが、地理の本で習ひました。それでは鞍ケ嶽へ上るんですか、女ぢやありませんか。」
「何故ですえ。」

「だつて、此地方のものだつて、めつたに上るものはないんです。」
「でも、おともだちの御祝儀にさへ、貴郎は其の芙蓉の湖とやらへ、お使者においでなさるんでせう。私は良夫を尋ねて行くんですもの、何でもないの。」
「やれ、はあ、お前様、御亭主さ、天狗様か、魔物か。」
と嫗は唐突に頓興聲、目は疎いが、耳は然までにないらしい。
娘は背方へ手をついた、仰ぐやうにして、悠然と嫗を見遣り、
「ほゝゝ、烏の亭主に天狗は可いねえ。でも此方の色が赤いのだから、對手の鼻は低いかも知れないよ。」
「いや、鼻高様より可恐しい事がある。なか〳〵行かれるものではないが。」
納戸の破襖を半ば開いて、咳びた聲して言ふものあり。

四

二人が休んだ床几とは、左手に狹い、朽ちた緣側を隔てたばかりの、襖越に人の氣勢、お若衆と藤娘が其處を抜けて出たらしい、大津繪の古襖の破目に、ちら〳〵衣服が見えたのを、大方内の嫗に對する、尉殿であらうと思つたが、恁くて形を露したのは、非ず、年配四十有餘、商とも

見えず、工とも見えず、農とも見えない、面に大人の風あつて、身裝は山家を其まゝの、雜と是村夫子。

膝の前に、塗の禿げた茶盆を控へて、煙管を手に、胡坐、片手で撫でて居た百日紅の根をくりぬきの、煙草盆を押遣つて、緣側へ體を捻向け、

「はい、誰方も。これから唐突に御無禮しました。唯今鞍ケ嶽へ上らるゝといふを、襖越に承つたに就いて、お心づけ申します。はい、此の邊はな、見らるゝ通り、都に遠い山里で、峰は高し、樹林は深し、川は大いな。

此の手取川の淵一ツに、一ツづゝにしてからが十や二十の主は居ます。魔の棲まぬ處はないが、殊に其の鞍ケ嶽は總本家ともいふべきぢや。御婦人の身一ツで、なか〳〵行かれる場所ではない。けれども、天狗に許嫁があるやうに言はれるからには、其を恐れはなさるまい。其の事だけなら留めませぬが、能く聞かれえ。」

村夫子は煙管を差置き、

「今さしあたり草木も動かず、五月晴の上天氣、澄切つて秋日和見たやうぢやが、何と其の底に黑い雲が徐々と頭を出して、はや此の界隈、漁るものも耕すものも、寐心が穩でない。先々月あたりから、毎晩惡い夢に魘されて居るではないか。

それがといふとの、北から南へ三十里ばかり、間が切れて居る鐵道が繋がるで、工事が去年から始まつた處、いや其の工夫といふのがよ、大概つもつても知れること、今時そんな理窟はない筈ぢやが、百が九十九人までは、どれも無宿もの同然で、殺人に放火をかねた、夜叉羅刹ぢやと思はれい、はあ。

山は崩す、水は濁す、犬猫は取つて喰ふ、草は枯す、樹は倒す、石は飛ばす、取分けて目指されるのが、眉目形の勝れた婦人ぢや。

殺されたのもあり、死んだものもあり、好い衣服を着て帶をゞめたのが、草の中に倒れて居たり、裸體で野原に曝されたり、何がさて、出來た鐵道の三里居まはり、手足な、髮な、ばら〳〵にして暴れ居つたわ。

何と可恐い、二條の鐵の線は、ずる〳〵と這ひ込んで、最うそれ、昨日一昨日あたりから此の川上で舌なめづり、丁ど貴女が行かれるといふ、鞍ケ嶽の麓は、鎌首を擡げる處ぢや、私の留めるのは此の事だで、はい。」

煙管を取上げ、流を斜に遠山の頂かけ、殺勢を示してぴたりと構へ、陰鬱な顏色して、

「見られい、今日のお天氣も、鶴來といふのに五位鷺が鳴きさうな空合ぢや、太陽樣はちやんと照らしてござるが、日中も蔭には闇があります。都と違うて邊土ぢやで、警察の手が屆かねば是

非もない。危きには近寄らずぢや、遠く退いて居るに越したことはないに因つて貴女、悪いことは言はぬ。まづ私の相談に乗らつしやい。」

懇な言につれて、煙管が宙に動くのを、瞳を流して熟と見たが、傍に憂慮しげな少年より、當の娘は事ともしないで、

「いろ〳〵難有う存じますが、まあ、兎も角も參ります。」と判然いひ切る、眉宇に一點の懸念もなささう。

五

村夫子はフンといつて歎息した、半ば眼を閉ぢ、打傾き、

「はあ、其では斷つてお出かけかな。」

美人は些も意に介せず、晴々しい面色で、少年に瞳を返した。

「私はまあ、こんな旅烏だから、人の目にもつかないでせうが、貴下が其の御祝儀を持つて行らつしやる、お姉様のおともだちなぞは、もし今のお話のやうだと、御心配なことですね。」

少年は頭を掉り、

「内の都合がありましたから、私どもの祝は後れて居ますが、其の婚禮は最う疾くに濟んだあと

なんです。途中何處を通るといふのでもありません、其の奥様は、湖の別莊に居るんですから。」

「それぢや別條はありませんかね、そして其處らは、可恐い工夫たちの、近寄らない處ですか。」

村夫子引取つて目を睜き、仰山に頷いて、

「まるでかけ離れた極樂淨土、工夫どもが鶴の觜で突壞す、埃一ッ來ぬ清らかな湖で、然も大船に乘つたやうな安心な處ぢやが、何うだらうな、貴女料簡を變へて、私がいふ事を肯いて、一先づ湖の方へ來られぬか。

私は其の邊の田舍のものぢや、好い宿を世話して進ぜう。其處へ落着いてから、人を雇ふなり、連を見計ふなり、それとも逢ひたいといはつしやる人を、都合に因つたら此方へ呼ぶなり、何とか相談の仕方もあらうで、悪い事は申さぬが。」

「ですが、あの私は少々急ぐんですから。」

「そ、そ、それがお若い。」

とじりゝ乘出し、

「其の鞍ケ嶽に居さつしやるは、人か鬼か存ぜぬけれど、途中、貴女の身體に又然うでもない、もしもの事があつたら何うされる。先方へおいでなすつて、却つて泣きを見られるぢやらう、しばらくの辛抱ぢや、逢はぬが增かも知れませぬ。」

村夫子は大聲に、
「なあ、此家のお婆さん。」
「然よおや、然よおや。」と嫗は背屈みをして、針仕事とともに身を入れた。
少年は左右を顧み、いづれが是とも定めかねた、頼りない目遣で、人事ながら心細げに、旅のあはれは是よりぞ知ンぬる風情。
疾くも見て取り、
「あゝ、其の少人、姉さんは、御思案中ぢやがの、何は兎も角、貴下は私が案内します。城下から此處の湖へおいでなさる、此處までは然までにないが、これから先は川について難澁な傍路へ入ります。見受けた處、くたびれて居られる、又土地のものは、馴れて近道も知つて居るで、幸ぢや、一所に來られえ。」
「可い都合でございますね、貴下、伯父さんをお願ひなすつて、ぢや、然うして行らつしやいね、」
と頷かせるやうにいつた。
少年は一議に及ばず、
「何うぞお願ひ申します、飛んだ御厄介でございます。」

村夫子は我が深切の届いたのを、然も心底から喜ばしげに、飲込み顔、飲込み顔。
「一所においでかな、然うか。いや安心して來られい、田圃道に水溜があつてからが、華奢な身體、抱いて越すに仔細はない、又な。フトすると此處へ、渡船ぢやないが、村方へ魚を廻す漁船が、芙蓉湖へ歸路に通ることがある。あれば徐々來る時分、實は休みながら私も心待にして居ます。其の少人、船が嫌でなくば、景色を見ながら乘るも可かろ。何うぢやな、姉さん、貴女も相談に乘る氣はないかの。」
「私は乘つても山駕籠です。」と屹として、まともに川、遠山を仰いだ眉は、青柳の霞を拂つて、曇りなき月の顏や。

山駕籠

六

「へい〳〵煙草が名物でございますで、家並刻みます、鶴來煙草と申しますると、聞えたものでございやすよ。」と後棒を扛いだのが、土地自慢で得意に語る。東海道の雲助は、音の響きと心持で、蜘蛛、と可恐しく聞えるが、此の邊のは、草色筒袖の褞袍に、膝切の緩んだ股引、芋蟲ころ

ころとした形、先棒もこれに同一、それ信州の駕籠舁は、畑主なり蕎麥の花、土地が土地だけ、煙草に附く、蟲のやうなものかも知れぬ。

山駕籠の中で旅の女、莟は堅いが葉のすら〳〵とある菖蒲一本、荷物は上へ、屋根裏に挾んだのを、涼しさうに視めながら、溪川の流のふち。

「あゝ、然う。道理で一軒々々、店も、土間も、屋根の上まで煙草の葉だつたね。まるでもみぢの中を通つて來たやうな心持がして、薄ら寒いよ。」と彼の赤毛布を被たまゝであつた。

前を扛いだは無口な男で、話は後棒が却つて先棒。

「へい〳〵、實に最う時候違ひでございます。つい前の白山は、これから眞夏になりましても、谷々の雪が解けませぬで、此の界隈は大した暑さといふことを存じませぬ。」

「おや、あの白山は直き其處なの。」

「纔かばかしでございますが、山又山で、道はなか〳〵難澁でございます。えゝ、私どもをお雇ひ下さりました、今の煙草の鶴來から、金劍宮と申すのを拜みまして、白山、小白山、吉岡、吉野、木滑村、それから中宮の溫泉に成りまする。其間ずツと峰續きで、三方岳、奥三方、千丈平、笈岳、山廻りの天狗樣も、一息ついて休まつしやります。御腰かけと申す頂から、妙法山でやがて、白山でございます。背後は早や飛驒の國で、ものの十里とはないのでございますが、つひ

に昔から越したものはございませぬ。

其の中宮の溫泉に參りますと、もし、お孃樣え。」

「おう。」と先棒が聲をかけた。

「そらよ。」

と肩を入れかへる。流が颯と、駕籠は巖摺に石高路、水の激するに異ならず、一搖れ搖れて、ずツと出た。

美人は靜に、

「あゝ、何だね。」

「貴女さま、鶴來へおいでなさります前に、お越しなされたでございましよ。あの手取川の上を挾んで、中宮と白山下と、向ひ合つて居るのでございます。」

「皆、度々行くのかい。」

「參りまするとも。私どもは稼業でございまして、其の中宮へ湯治に行くお客を乘せますために、恁うやつて、影法師のやうに、何處か在所の隅に活殘つて居ります人足でございます。それも澤山はございませぬ。錢金で腕車は動かず、馬は厭だとおつしやるお方ばかり。これでも暑中になりますれば、三日に一立ぐらゐづゝ、賃錢が頂けます。」

「而して何なの、私が行く鞍ケ嶽は、矢張其の路を通るんですか。」
「いんえ、違ひます。鞍ケ嶽は其の三方ケ岳、奥三方なんぞの、取着きの難所でございまして、申さば入口の山門でございますが、いやもう何の道も、奥の院は、ものごと鷹揚で業が穏でございます、けれども、得てして御門番の衆が、意地くね悪く手荒いのでございまして、うつかり茸狩に入りましても、どつと足許で水が出たり、目の上で火が燃えたり、六尺棒のかッぱらひで、豪く驚かされるでございますよ。」
「これ、はあ、六尺棒だの、門番だのと、見下げた口を利くめえよ。お山は近いに、當事もねえ。」
と先棒が苦つた聲。
「おつと躓。」
といふと石塊に踏みかけて、駕籠がぐら〳〵となる。
「それ、見せえ。」振返つて、だんまりが澁い面。

七

屋根うらに掛けた菖蒲ほど、乗つた美人は身動きもしなかつたが、不圖其の耳を欹てたのであ

る。
「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」
先棒の肩の上から、後棒の腰の脇から、路の前後を透したが、露骨な岩山の膚を右に、瘠せた畑を左手に見るのみ、十町四方殆んど人らしいものの影もない、但遙に畦を行く、馬士の寸と、駒の尺、日は當つても影を見るやう。唱名は判然と近いから、
「若い衆さん、お寺があるの。」
「別にお寺はございません。唯此のさきへ參りますと、比咩神社と申して名高い白山のお宮がございます。」
「でもお念佛が聞えるよ。」
「はあ、彼でございますかい、ありや、何でございます、大巖の傾斜地藏を拜むのでございます。」
「かたがり地藏？　妙な名だね。」
「御覽じまし、細ッこい此の谿川の流の岸は、恁うやつて巖が屏風を立てましたやうでございませう。其の上へまた巖がいかいこと押かさなりました中から、一個、圓になつて飛出して居りますのが、直ぐお顔でございまして、三丈ばかり、見上げるやうな自然石へ、御像が刻んでござり

ますが、路傍の如意輪様見たやうに、何でも願をかけます事を、合點々々の形で、頭を傾げて在らつしやいます、其處で人が傾斜地藏と申すでございます。えゝ、むかし其の、豪い貴い坊様がお刻みなさりましたさうで、なあ、合棒、何とかいふ坊様だツけや。」

「泰澄様よ。」

「それ〳〵、役の行者か泰澄様かと謂はれたお方でございます。驗がございますに、お孃様御參詣なさりまし。」

「ぢやあ、直ぐ巖に刻んであるの。」

「然やうでございます、へい〳〵。」

「賴母しいねえ、路々聞けば、山には恐しい魔が棲むといふのに、巖が其のまゝの佛様もおいでだよ。」

南無阿彌陀佛々々〳〵と早や耳許に聞えると、後棒も口の裡で南無阿彌陀佛々々〳〵。

「南無阿彌陀佛。」先棒も調子を合せて、山駕籠は土の上、新木の高い小屋がけの前に下りた。小屋は唯柱で支へて、屋根ばかり。山路の石も草も、其のまゝの土間にして、樒を入れた桶が三ツ四ツ、流の岸の巖に載せて柄杓が又二三本、柄を此方に向けて斜違に差置かれた。入口に床几を据ゑ、敷物をかけて、一人、袴を一着に及んだのが、傍に小さな机、帳面を開いて往來をじろ

じろ見て居る。

「此處かい。」駕籠の中で、美人はもつれ毛をかけた頰を傾け、顏を外へ、日を遮つた薄暗い土間を透して、下から見上げるやうにすると、仰ぐばかり高い屋根の、向の廂は纔かに御胸の邊なり。正面の巖石一座、苔滑かなる法衣を絡ひ、蔓葛を袈裟にかけて綠青の色堆く、暗き山かと立たせ給ふ。御顏を衝と差向けて、人を見給ふ風情、拜むものと目を合せて、微笑ませ給ふに似たり。然も其の偉大なるや、前に五百の衆生を置きて一切平等、蛙の干物も御目ざしの惠の露には洩れじとこそ、悚然として寒氣のするまで、神、袂に、清水の點滴、其處ばかりは淵をなして、山寺の鐘も沈むべく、耳に絕えなかつた谿川の響も絕えて、松風が颯と吹く。

八

後棒は襟を擴げて汗を拭いた、手拭を膝に掴んで、小腰を屈め、

「えゝ、お草鞋を脫いでいらつしやりますで、此處でお詣りなさりまし、御面倒でございませう。」と心づける。駕籠を出るには土間へ跣足であつたから。

けれども居ずまひを横にして、美人は、石像を正面に向直つて、

「それぢや餘り失禮です、下りませう。」といふ處へ、息杖を差置くと、直ぐに小屋の中を一文字

に、影寒きばかり澄切つた川のふちに行つた先棒の無口なのが、柄杓に一杯流を汲んで、柄と兩端に兩手をかけ、胸のあたりへ捧げながら、御手洗を齎らした。

「へい。」

「まあ、お世話ねえ。」と荒漢の然もだんまりの、恁るしんせつ、思ひかけざる狀して、嬉しさうに情を含んでいつたが、

「一寸待つて。」手を白やかな咽喉に懸けると、襟を結んだ手拭の端を解く、先づ片袖、よろけ縞のお召の袷、紅なし友染の長襦袢は絞の菖蒲、花片に膚を包んで、八口から、しつとりと、駕籠にかゝつて、はらりとなる。留南奇の薫人を打つやうに、淺黄の小柳繻子獨鈷入の帶を漏れて、姿を蔽うた赤毛布、するりと撫肩の背を落つれば、かさねた踵の蝶白く、狂ふが如き牡丹花は、燃立つばかりの背負上であつた。

「憚り樣。」

「はッ、」といひながら先棒は、餘りの艶麗さに、堅くなつて、ぶる〳〵しながら、加減なしにどッ、一浴せ。水は掌の白きを透して、颯と土間へ、流るゝのであつた。

後棒は又此の小屋守とでも云ふ風な、帳簿を控へた男の前で、二ッ三ッ續け樣にお辭儀をしたが、やがて渠が乘つかつた床几の下から、其の穿物であるらしい、齒のさゝくれと共に臺の廣い

九

日和下駄を撮み出して、此方に向返る途端に一目、はじめて彗星よりも驚いたのは、美人の胸に、幽に星の光を曳いた、燦たる時計の黄金鎖。

きよろ〳〵しつつ借下駄を丁と直し、

「召しまし。」

「皆、こんなに御苦勞を掛けて濟まないね。」

鬢のもつれ、背のゆらぎ、片膝立てた、右の裳、輕く穿物にかゝつたが、不圖躊躇へる狀である。

時に拜み果てて一人、田舍親仁、小屋を罷出る體で、川と御像を背後にしたが、繪馬一ッない小屋の屋根、ちら〳〵弱くさす日の光を、あんぐり口開いて當所なく眴し〳〵、後棒の後と床几の前を、横に拔けて出ようとする。

「待て、待たんか！」と呼んで留めたのは、古袴の小屋守で。

這奴物ありげな面體、御佛にかしづく者には似ず、昔々九郎判官吟味のため、新に据ゑた關所の頭人、富樫殿の御内にて、落栗轉倒太といふ風あり。今や稀に、役場の受附に於てこれを見る。

轉倒太は田舍漢に一睨を吳れて切口上。
「これ〳〵、素通りをしてはならんよ、待ちなさい〳〵。」
「ひやあ、何でござえすけえ。」
「何でござえす？　何でござえすぢやない、何分の寄進に附いておいて、お鳥目をお上げといふのだ。」
田舍漢は腕組の下へ、懷の財布を大事に壓へて、
「御冥加錢さ、お賽錢箱へ入れたでがすが。」と怪訝する。
「賽錢は賽錢さ、別に寄附をしなさいといふのだ、此の帳面につける分だよ。多少には寄りません。」
田舍漢は急込んで、日に燒けた色を眞赤、吃つて額の汗を拭いた。
「で、でござえすから、多少には寄らず進ぜたてや。」
「何、其は其として、別に志をお出しなさいよ、分らないな。」
ます〳〵澁つて、
「そりや、そりや何でござえす。もの、些とばかしでお恥しいこんだけんど、引續いた凶年で心には任しましねえ、それで、はあ、志だけは出いたでがすよ。」

「分りませんな、お賽錢の事ぢやないといふのに。」
又睨んだが、纔に頷き、
「はゝあ、お前、何にも知らんのだ、何かい、近在の者ぢやないのかい。」
「私、何でござえす。木滑在のもんで、はあ、鶴來まで用足に行つた歸りでがす。」
「むゝ、然うだらう。」
と頰杖で帳面の端を撮み、田舍漢の寸延な面を、輕蔑したやうに視めながら、何を讀むともなく、べら〳〵と引返して、
「それぢや此のお小屋は何時出來たか知らんだらう。」
「一昨年參りやした時には、何も無かつけえ、其後はしばらく拜みましねえよ。」
「だからよ、こりや去年の夏出來た、お前方、何うだ、それまで參詣をする時は、野天に畏つたものだらう。そら、日が照つても其なり、雨が降れば濡れ、風が吹けば吹曝し、處を、可いか、信心の衆が、炎天干雨ざらしは氣の毒なり、さればといつて、佛を拜むにお天氣を見る分でもなからうといふので、今度な、同行の便利の爲に、可いか、お慈悲深い旦那樣が、お建てなすつて下さつた。」
「や、それは早や御奇特ぢや。はい、南無阿彌陀佛。」

「可いかね、其處で其のお慈悲深い旦那様といふのは、お前方は知つてるか何うだか、城下に、貧窮人の、お救小屋を立ててお在なさる、巨山様といふ今の世の活佛だ。」

謂ふや否や、尊が聞えたほど慌しく、

「ひやあ、あの活如來様でござえすけえ。」

「然う、然う、然う活如來。」といつて、面を和げ大得意。

「知らねえでか、私が村さにも、崖崩れに潰れた家の、活殘つて何うもなりましねえのが、二軒も如來様に養はれて居りますで、はい〳〵。」

「分りましたか。で、其の如來様が諸人便宜のために、小屋をお掛け下すつた。處で又此の下へ入つて、雨露にも打たれず、蓮の臺を被つたやうに、難有く、安樂にお參詣をする冥加として、皆さんから屋根代を頂戴します。」

「お孃様、お召しなされまして可うござります。」

後棒は美人の駕籠を出ようとして控へたのを、借りた下駄の遠慮だと思つたのである。

「少時。」と小聲でいつて、衣紋正しく、小屋守が言分に耳を立てて控へたり。

十

小屋守 爽な辯舌で、

「けれども屋根代を頂いて、別に其でお小屋の入費を差引くといふ譯ではありません。寄進にお附きなさる若干金は、皆城下の其のお救小屋へまはして、諸人助の足にするんだから、何の事はない、手數入らずに慈悲善根を施す道理、功德ではあるまいか、何うだね、分りましたか。」

「そんだらはあ、些とばかしでも如來様が諸人さ助けさつしやる、お手傳ひになるでごぜえますか。」

「然うだ〳〵、砂利が須彌で、お前の村方でも食べさして頂いて居るといふが、皆其の天窓へ情がかゝるさな、眞實だよ。活如來の巨山様は、聞えた大分限者でいらつしやるけれども、何しろ貧窮人多勢の處へ、續いての凶年で、今日も三人、明日も五人と、小屋入をする始末だから、金銀は落ちて居らず、御自分の飯を一杯減らし、召物を一枚脱いで、人助けを遊ばすで、巨山様お身なりなどといふものは、恁う見受けた處、お前さんより、もつと粗末。其のかはり昨日拾ひ上げられた乞食でも、一度救小屋へ入つた上は、今朝ツからお前さんのやうに破れた股引は穿いて居らぬ。いえさ、譬だが、まあ、其處がお慈悲だ。あゝ、多少には因らんからな。」

と滔々と陳べて帳面をづツと出して見せる。

田舍漢は背伸をして、財布の底を探して居た。

「それ、十錢が五錢でも、一々帳面につけて、國處、姓名が丁と乘る、月の末に縣廳へ差出すと、知事様が御覽になりますぞ。」

「ひやあ、南無阿彌陀。」

小屋守は筆を構へて墨を含ませ、

「えゝ、木滑村か。」

「上でござりやして、へい〳〵。」

「上木滑村……石川郡だね、名は……六兵衞、さあ、つけました、縣廳で御覽になるよ。」

六兵衞大き手を内端に出して、机の隅へ密と置く。

「一錢！」と高らかに調子を張つて尻上り。

これに怯乎としたやうすで、又撮み出して恐々乘せる。

「二錢か。」と氣の抜けたやうな小さな聲。

「はあ、お輕少でござりやす。」止むことを得ず重ねて一錢。

一寸一寸の一寸、三ツ、銅貨をはじいて、ひよいと並べて、

「合せて三錢、石川郡、木滑村……六兵衞、知事様が御覽になるよ。」

だら〳〵流るゝ汗だらけの胸を、平手で拭うて、六兵衞足も地につかず、

「勘辨してくらつせえ、これで何うにもなりましねえ。」

「五錢、確に受取り。」と持直して筆を置いて、小屋守は顏を背けた。

六兵衞はほつと息、憐を乞ふ笑滿面、皺の中に目を細めて、

「はあ、もしお次手さござりやしたら、私等村からお救小屋に入りやした、七左衞門後家と八平が爺様に、もの、變ることちうもねえだかと、おことづけさ賴みますてや、やあ。」

というて、お辭儀をした。

小屋守見返りもせず、帳面に肱をついて、默つて二つばかり打頷く。

後棒が、

「もし、お孃様。」

「私や參詣は止しませう。」

十一

褄を駕籠の中へ折返して、美人は下駄にかけた足を引いた。

立てて居た膝を屈め、手を支へた姿小さく、恰も石の袖に包まるゝやう、小屋の彼方に斷崖暗き、巨頭の地藏尊を伏拜んだ、合掌を解くと、左右を見て、

「駕籠屋さん、出掛けませう。」
時に擦違つて背後を通つて、とぼ〳〵小屋を出る田舍漢の、石高路に搖らるゝばかり、浮きつ沈みつする體で、世の中疑はしい目色をしながら、二三度見返つて立去るのを、うつかり見送つて居た駕籠の後棒。
「へい、御參詣なさりませんで可うござりやすか。」
「此處から拜みましたよ。」
「御見物がてら、入らつしやれば宜しうござりますに。」
「だつて、屋根代が要るといふもの。」
「後棒、上げようぜ。」と口を切つた、先棒のだんまりは、揃へた日和下駄を搔撮んで、無言で床几の下へ、突戻すやうにして、大跨に取つて返した。駕籠舁どもも、小屋守が擧動、仔細は知らず幾分の不平を抱いたに相違ない。齊しく拗ねたといふ見得で、
「そらよ。」
「おう。」小屋を打棄つた乘物の上げ方や、美人の姿は地を離れた、神々しいばかり高くなる。
「もし、もし、もし。」と尻上りに小屋守の物々しい呼留めやう。
「私かい。」

「えゝ、駕籠のお方、何分の御寄進をなすつて下さい。」
「否、私は其の小屋で、雨も風も凌がしては頂きません。」
「では其の、屋根代とは申しますまい、巨山家の慈善事業に、御贊成下すつてな、御志頂戴いたしたうございますが。」
振向きもせず駕籠の中で、横顏で莞爾して、
「私は人助けをしますやうな、そんな難有い身分ぢやないのです。」
小屋守は色を作し、
「ですが、お見受け申した處、五十錢、一圓にお困りなさる御仁體でもありません。へゝへゝ、駕籠になんぞ、お召しなすつて、貴女。手前主人なぞは、いたせば馬車にも乘られまする身代を、貧窮人のために跣足で駈まはつて世話をしますぢやありませんか。」
「それは御勝手になさいまし。」
「はてな、知事樣も御贊成で、私は正五位ぢやけれども人間ぢや、巨山殿は無官ぢやが、佛だとおつしやつて、尊敬をなさるくらゐ、誰一人涙を流して感心せぬものはないんですが、何だかお氣に入らないと見えますな、貴女。
貴女は變な方ですな。釋迦にも提婆だ。話の種にお名前を承りませう、何といふ方です、お

名前は何といひます。」
美人は柳眉を動かして、口を結んだ、しばらくして、言はねば卑怯だと思つたらう。
「名は龍です。」と言ひながら、激した風情で、菖蒲の葉をじり〳〵と裂いて、礑と投げた。
「姓は、住處は？」
「ほゝゝ、交番でお聞きなさいな。さあ、駕籠屋さん。」

ふれ狀

十二

三宮は鞍ケ嶽の陰に隱れた、山間の小さな村で、村長九郎次も小さな老人、天保年間の生とて、演劇の庄屋樣好の扮裝、村端の流に近く、野佛があつた跡の土饅頭の上へ押上ると、椿の樹の下、小藪の前、男女入交り十四五人、ずらりと取卷いた黃昏頃、中にはきちんと髮を分けて派手な浴衣を着たのもあり、白粉を濃かに、紅い二布の見えるもあり。
九郎次は忙しさうに懷中から端を見せた、四疊みの狀一通、一大事認めてありさうなのに手をかけたが、ずらりと天窓數を見渡して、

「やあ、皆の衆、一統へ傳達さすべい事あるで、此處で讀上げて聞かせるぢやが、薄暗うなつて來たで、眼鏡でも間に合はぬ。雜と主意をいふべいに、能う覺えエ。またそれ〴〵へ觸れるだぞ。」
「お庄屋樣、何か、御苦勞でござりえす。」と色の生白いのが先づ會釋した。
「朝から方々駈歩行いて居るわ。こりや今はじまつた事でない。後月十五日前さから、施法院の方丈樣と談合の上、一筆認めて、二太郎が家を筆頭にずらりと廻狀さ廻しただが、一向に埒明かぬ。ものの此村は家數百と無いに、書いた事は六條か七條、煙草一服吸ふ中に讀めるこんだで、印をついて隣家さ送れば二日とはかゝらぬ筈ぢやが、一月の餘になつても、未だ四軒目へ屆かぬではあんまいか、扁や乖が面倒で讀めざらば、それ、お寺へ來ても、學校さ先生が許へ持つて行つても、分る事だに、はてさて不念千萬な。
其內に日は迫る、一處へ呼び寄せべいにも、足はのろし、手は屆かぬ。其處で日がな一日恁うやつて廻つて居るぢや、些と氣をつけて吳らつしやい。」
一ツ叱言をいふと、村の束の不機嫌さ、伯父親の意見よりは利が强く、鎭守の祭に雨が降つたほど寂となる、機を見て、九郎次痰のある咳拂。
「餘の儀でないてや。主たちも知るづらあ、追つて此の邊へもな、鐵道が敷けて汽車が通る、それ、陸蒸汽といふ機械ぢや。就いては、其の道さ拵へに、人夫どもが繰込むわ、やれそれと夢見

たやうに思ふ内に、やがて今日明日、鐵棒をこそ持たねども、鶴觜を提げた草鞋穿の鬼が、によッこり鞍ケ嶽のそれ其處さ、入口の橋の上から、顏を突出すは、今かも知れぬ。

噂より十倍での、小娘は裂いて樹にかける、圓髷は田の中に突込まれて、島田さ土手に仰向けぢや、いやはや、恐しいことの百年目。

手取川向うから、三人五人、十人づゝ、何處までも續いて、幅三里ばかりの間の人捉網ぢやで、目にかゝると命がないぞ。此の先の木滑在から、辰口の溫泉へ行つて、奉公さして居る湯女ぢやが、馴染の後追うて城下へ足拔をする途中、傾斜地藏の鶴來路で、手酷い目に合されてな、横に見過いて行く筈の、親許へ倒れ込んだは今朝の事ぢやに、人の身の上と思はつしやるな。女房たち娘ども、夜歩行は斷つての事、朝晩も氣をつけて、うつかりと一人で出まいぞ。また戸締も氣を附けるぢや、戸の方へつゝ向いて、明け放して寐ては成らぬ、傳達は此のことぢや。それ〳〵恁ういふ内から、主たちは何うしたものだ。手を握つて居るのもあれば、腰を撫でて居るのがあり、や、頰ずりした和郎も見える、苦々しい。」と情なさう。朝から歩行きづめの藁草履、半ば摺りへらしたので踏みしだく、踵に石の觸るより、餘程こたへた顏色で、九郎次は衝と下りた。土饅頭の左右に分れ、膏汗とともに握り合うた手を放して、皆うろ〳〵とものの色、紅、白粉も逢魔ケ時。

橋の袂

十三

「お貞、何うしたのだ、庄屋の爺さんが朝ッからくる〳〵廻つて居たが、今また其處で、何か說教をしたやうぢやないか。」

九郎次が見て、此村へ、鬼が今にも其處からといつた入口の橋の上、欄干に兵兒帶をかけて、凭懸つたやうな腰をかけたやうな、反身で居るのは、當三宮村、尋常科の訓導で、其の鼻の下の髯とともに、唯一人の學者である。

藪の前の暗い中から、白い蝙蝠ひら〳〵と、黃昏の色に分れて、水ある方へ歩行き寄つたは、部厚な大面の肥滿娘、いや塗つたこと〳〵、庄屋が白壁に異ならず、髮を束髮に、帶をお太鼓に、紅の二布下駄に溢れた、厭らしき風俗、束髮だけに、お太鼓だけに、卽ち訓導の御物にて、見識が高く、脊が低い。

お貞は猪首を拔衣紋で、會釋と嬌態と、目づかひを一所なり。

「先生さ、私等はあ何うしべい、鐵道の工夫ちうが、遣つて來るで、是からもう、多時夜歩行さ

出來ましねえとよ。暮方に出ても摑まつて殺されるちうだ、何たる事だんべいか、巡査様頼むちゆつて、此處ら七ケ村に、出張の旦那、一人切ではしやうことがねえだし、お前様明日から何として逢ひますべいね。」と愁ふる顏、梨花の雨の風情に似ず、胡瓜の花に五月雨也。訓導は鼻で笑ひ、

「當前だ。工夫が來ようが、何うしようが、女の出歩行はよくないなあ。皆浮氣に生れついて、人の謂ふ事を肯かないのだから、丁ど可い意見だね。はゝゝはゝ、何だとよ、如何に亂暴だつて、矢張目のある人間だ、然う無法な事をする筈はない、心がけの良いものなら指一本も指さないさうだ。其のかはりお前のやうな惡性ものは、譬ひ石櫃の中に入つて、鐵の鎖を下して置いても、摑み出して慰むとさ、夜歩行きにや限らない。」

聞くと齊く胡瓜の花、虻が吸ふかとぶる〳〵して、

「あれ、私さ何處に浮氣のうしますだよ。お前様が先生だあで、私はあ、田植にも出ましねえだ。平百姓の娘とは附合もせぬやうにして居るだに、酷いことといはつしやるよ。さあ、何處さ私惡性だか、それ、聞かない事にや濟みましない。」

と、身を揉んで擦り寄る肩を、訓導襯衣を着た手で抱へ、

「そしたら、何だつて我輩の姿を見ない中に、其處らうろ〳〵出て居るな、何處かの土百姓と、

矢張こんな風だらう。」と丁と突放すと、欄干にぐにやりと縋り、

「何をいはつしやるだよ。庄屋様のお達を聞くだつて、彼の達とはずツと背後に離れて居ましたは、私一人でねえかね。平時、お前様、お姿の、此處で見かけましねえぢや、背戸の瓢簞棚の下さ潛らねえだけんども、先刻はあ、やあ俳優の立女形さ駕籠で乘込むちゆつて、小前の娘ッ子さ大え騒の遣るでねえかね、私未だ化粧が濟ましねえだつけんど駈け出してそれを見ただあよ。」と、づんぐりした腕を出して、鬢を搔撫でたものにて候。

「嘘を吐け、狒々が勸進元をしやしまいし、何の洒落にこんな山へ女形が乘込むものか。」

「いんねさ、俳優ぢやねえけんど、繪で見たやうな美い女さ、駕籠で鞍ケ嶽へ行つただよ。目の切の佳い、細面の、色の白いことさ、日向を歩行いたとは見えましねえ、それに豪く品が好えだ、そんではあ。」

と、襟を扱き、腰を撫でて、

「見たくでもない赤毛布さ被て居ただ、銀杏返でよ、開けねえぢやあんめえかね。」

十四

「あとで娘ッ子さ、山媛だ、山媛様だ、ときよと〳〵して、恐怖がるやら、難有がるやら、拜む

ものもあつただね。野面から飛出して來た若い衆達は、遠くから見た目に、赤毛布でねえ、もみぢを着て居さつした、秋祭を待たねえで、あの駕籠さ、お神輿にして擔ぎたかつたッて謂つただよ。」

「何處のもんだ。」

「そりや、はあ分りましねえ。」

「而して何か、是から鞍ケ嶽へ上つたのか、何を當てに行つたらう。」

「然うだあね、其の女さも何處の人だか分りましねえし、もう一人、山の天邊の千蛇が池さ緣に、此間つから籠つてござる何處の者だか分んねえ書生さんがあるでねえかね。どちらもどちらだアで、其の人さ尋ねて行くかも知んねえだよ。」

訓導は是を聞いて、然も輕んじ賤めた態度で、頂の方を見やり、

「何うせかはりもんだが、おい、お貞、そんなに佳い女か。」

「あれ、見たくでもねえ、そんな佳い女だら何うするだ。」と厭な目色。

「こんな佳い女だら恁うするだ。」と未だものの色は分るのに、訓導は、ぐいと娘の頰を突いたが、お芋の煮えたを箸でさいた形である。

「はゝゝはゝ、いや、そりや可いが、お貞、其の旅の女から、此處の橋錢を取つたらう、錢は誰

が預つて置いたんだ。」

「誰も請取りはしねえですよ。」

訓導は眉を顰め、

「請取らない、何故請取らない？　誰も何とも謂はないのか。」

「何はあ、お錢さあ置いて行かつしやいと謂うただがね、寄越しましねえ。」

「えそりや、何だ、橋番を置いてあるんぢやないから、橋錢を吳れろッたつて承知はしない。巨山樣の慈善事業に寄附を賴むんだつて謂はなけりや不可いと、吩咐けて置くのに、氣が利かない山獸どもぢやないか。村の者も村の者、大分月末に纏めて納める、橋の錢が滯るぞ。商賣ではないから、一々請求をする譯にも行かんがね。我輩が凡て預つて巨山氏へ一纏めにしちや屆けるんだから、粒が多いほど世間へ對して我輩の顏が立つ。三宮には訓導の垂井が居て、これ〳〵の寄附を募つたと、體の可い、我輩の名譽になつて、知事公にも名を知られる、詰り出世の基ともいふもんだから、お前も我輩の何なら心付けて、隨分催促をしてやれ、眞實だ。よく〳〵目をつけて下されば、こそ、我輩だけは此の邊でも巨山氏の芙蓉潟の別莊へ出入が出來るのさ。お前なぞも又働きに因つては、我輩の何だといつて、あの別莊を拜ませて遣る。其の結構な事、まるで御殿だ、四方湖で取卷いた景色なんざ、龍宮を見たやうだ。なあ、人事ではないぢやないか。

だから其の旅の女になんぞ、お前が眞先に談判を爲る筈だ。」

「はあ、皆ががや〳〵といはしたつけ、片田舍だで、言が通じましねえ。私、先生さと何ぢやお蔭にや、何でもちやんと分るけに、橋の錢さ出してくんなさろちうと、橋錢は幾干だ、言はつしやる。いんね、此處さ橋の錢貰ふでねえッて、活如來樣の事話したら、又かい、御免だよッて、ずん〳〵行かつしたけえ。何かもの凄いやうな女だでね、村の衆も氣怯れさして、其のまゝ通して了うただよ。」

訓導はちよッと舌打、

「變だな、巨山氏の名を聞いて、御免だなんぞ、罰が當る。」

十五

「待て〳〵、しかし禍が福で、丁ど可い、此の邊へ陣取るといふ、工夫どもが乘込んだ日にや、何の事はない其の女の後を追懸けて來たやうなもんで、鞍ヶ嶽へ封じ込んだ形になる、手當り次第劉暴な奴等だ、然も山へ上つたのは美い女だといふから、何の道玩弄物になつて、死骸を曝すか。それが厭なら麓へも降りられまい、巨山氏を御免だなんて、罰は覿面だから恐しい。」

「然うだあよ、山から降りられぬやうに成つただら、笈ヶ岳の夫婦雪崩になんべいさ。」

對手が及びもない美女だけに、訓導の令閨呪ふやうな事をいつた。俗に夫婦雪崩と稱へる、昔西國方の旅の巡禮の若い夫婦、奥三方に詣でんとして、途中笈ヶ岳の半腹で、不意の寒さに封じられて、千丈の雪に埋まつた、翌年春五月、一山の雪悉く消えた朝霞の晴間に、男女の姿、二ツならんで、山懷に眞白に殘つたが、笈を擔いだありのまゝの俤、それより年々雪解の頃、唯其の姿ばかり消え殘つて、やがて颯と失せるのを、口碑に傳へていふのである。

「眞實だ。」

「それだが先生さ、私等も何うかされはしねえだかと、はあ、心配で、氣術なうてなりましねえ。」

「馬鹿を謂へ、人を見て法を說けだ、何、我輩等見識のある者に、奴等手出しをするものか。束髮に結つたお前なんか、第一見な、村の若い者だつて恐れて串戲口一ッきゝやしない。其と同一事よ、附いてる者が附いてる者だと、自然と威が添ふからお辭儀をして先方から除けて通る。皆宵の口から戸じまりをしたつて、お前一人は威張つて步行け、其處は、我輩といふ者が。……」

橋の袂へ前方から、村をさして、きやつ、きやつ、きやつ、きやつ、ぞろ〳〵と小兒ども。

「錢くれさい。」

「やあ、橋の錢置いとけちや。」

「先生がいはしつた、私等が小遣にするぢやねえだよ。」
「施行だ、施行だ。」
奇音を發して口々に聲を上げ、左右を取卷き、ぶら下るやうに、八九人、眞裸な兄も交つて、彼處の空地で相撲を取つたのが、むら〳〵とたかつて來たが。
橋の中途に令閨と二人で控へた、訓導の姿を見附けると、哄と忠義顏に勢づいて、二三人前へ廻つて取切つて、
「錢置けちや。」
「施行せいやあ。」
優しい聲で、
「靜に、靜に、何をいふのか一時で分らない。何うしたんだな。さあ、能くいつて聞かせて呉れ、叔父さんには分らないから。」
と、腰へ掴つた、一人の兒の兩手を取つて、茶の中折帽の下に、秀でた眉を俯向けに、眼鏡をかけたが伏目に見ながら、薄い髭ある引緊つた唇に、詮方なささうな笑を含んで、嬰兒も懷くべく柔かに尋ねていつた。
脊は餘り高くない、中肉の痩せた人物、無造作な洋服で、膝より高くズツクをかけた、鶴の脚、

草鞋輕く穿しめて、枯木の枝の短なのを、杖の代りに提げた、年紀は三十二三であらう、全身一點の弛める線なく、繕はずして、自然の品あり。一度名工が是を見なば、其姿をありのまゝ、或は描き、或は彫みて、立處に一個何等か專門の學者の像を爲し得ることを認めるであらう。けれども三宮村の訓導垂井の眼には、纔に山林の小官吏、月給は、恐らく自分より下ぐらるに見て取られた。

急先鋒

十六

垂井訓導は、それと見ると愛娘の肩を離れて、凭懸つた橋の欄干から分れると、兵兒帶がだらりと下る、腰を据ゑ、反身で徐々と歩み寄つて、
「何ですな、何うかしたのですか。」
旅客と小兒どもへ兼帶に聲をかけると、幼いものは一樣に、訓導の顏を見上げて、口々に又哄と騷いだ。
「先生、此の人さ、お錢を出さねえだあ。」

腰に摑まつた里の童の手を取つて、俯向いて其のきよろ〳〵やる猿眼を見て居たのが、傍に搔退け、面を上げて、旅客は訓導に立向ひ、

「先生……ですか、貴下。此の小兒達は何をいふんだか、大勢一時だから些とも分らんで困りました、何ういふことです。」

訓導は頤に手を當てて、

「靜になさい、然う騷ぐんぢやありません。」

先づ威勢を見せて、蜘蛛の子を追ひ散らし、

「君は御存じないと見えます。皆でお錢をお錢をと申したわけで、此の橋をお渡りなさるのに、幾干かお出し下さいといふんです。」

「分りました、橋錢ですな、幾干。」と直に衣兜へ、無造作に手を突込む。

此方は何のためともなく、腕まくりをしながら、

「何、橋錢ぢやないのです。街道筋の商法橋なら、渡賃を頂けばといつて、たか〳〵八厘か一錢ですが、それと性質が違ふのですな、御覽の通り橋が恁うやつて新しいんで、」

とゆるやかに饒舌り出すと、煩雜いといつた形で、旅客は二ツ三ツ杖を掉つた。

「新しいから、如何程なんです。」

「別に値價といつて極つては居らんので。一體こりや去年此の土地の洪水のあとで架りましたが、村で致したのぢやありません。以前は唯もう丸木橋のやうなもので往來をして居たですが、其の水で流されますと、村方困窮の折から、丸太一本手の屆きません處を、篤志の大慈善家があつて、新に立派なのを拵へて下すつたですな。なし崩しに其の費用を辨ずるといつても、人助けにされた事業ですから、取らうとは言はれんですが、其の方は又久しい以前から、城下に救小屋をお建てなされて、出入りいつも四五百の窮民を養うて居らるゝで、其の幾分の足に、廣く諸君の寄附を仰ぐでして、慈善家の恩惠で出來ました、此の橋をお通りの方に、志を頂戴しようといふわけです。僕が申さいでも當國の境をお跨ぎになつた以上は、速に御承知でありませう。慈善家といふのは、巨山氏、誰も活如來といへば、知らないものはありません。」

巨山といつた時、旅客は稻妻の如く其の眉を擊めて、颯と不快な色を湛へた。と同時に人の面を襲うて、キラ〳〵と輝いたは、磨ける鋼鐵の枠を溢れて、眼鏡の下に一閃した、鋭い瞳の働きであつた。

是が爲に、射竦められたか、思はず顏を背向けて振返る、訓導の背後の方へ、ならば爪立つて歩行きたさうに、肥滿女、束髮は堆く、胸を張つて、脊の低いのを氣にする足つき、肉をだぶだぶと近いたが、恰も彈き返されたかと、あとじさりに衝と退いた。

間は遠し、此の女は、旦那とともに旅客の眼光に恐怖を抱いたわけではない、別に膽を冷し、魂を消すべきものがあつて、橋の袂に來たのである。

「親方、もし、何をなすつて在らつしやるんで。」

旅客の右手に來て立停まつて、一寸肩を搖つて會釋をした、一個の壯佼、色黑く、額狹く、鼻隆く、頤細く、觸ると火の出さうな眼の上へ、向う顱卷を緊乎として、口許の苦み走つた、威勢の良い奴、(風)と紺地へ靑く拔いた、半被、腹掛、三尺帶、竹を破つたやうなきりゝと細い足ごしらへ、朋友の分も背負つたらしい、鶴嘴を二挺、斧を一挺、柄を繩で結んで、一所に、ひよいと輕く肩。親方に引添うて、じろりと訓導を見た凄さ。

十七

然ればこそ此の兄哥、鬼ならば刃の牙、蛇ならば炎の舌、惡工夫の急先鋒、渾名を一番槍力松で。

今呼んで親方といつた、敢て邊幅を修せずと雖も、品威自から兼備はり、淸癯鶴に似たる人物は、北國の新線路擔任の技師、工學士、姓は水上名は規矩夫。一同旦那と稱へ、先生といふ處、對手に因つて、殊に此の力松の時の如きは、親分となり、親方となり、お頭となり、棟梁となり、

ともすれば隊長となるのである。

「親方、何うなすつたんだね、えゝ、親方。」

工學士は靜に振向き、

「橋を渡るのに幾干か寄越せといふ掛合なんだが、」

「へい、ぢや何ですか、此の橋に渡を付けろといふんですね。へん、石橋の山車が練込みやしめえし、何をいつてやがる、生意氣な、何奴だ。」

眉の根を八文字に縮めると、小股を踏開いてづッと出た。

「汝か、やい、お頭に木戸を突きやあがつたな。出ろ、こん畜生、仰樣に反らして、土性ッ骨を渡つて吳れう。」

訓導は兵兒帶の端とともに雙の手をたらりと下げ、魂を宙に、足もふら〳〵と前途を開いて、橫樣に又欄干に附着いた。二三間隔つて、白粉は妙な腰つき、口紅の色も蒼くなつて、肥つた死神のやうな手ぶり、身を揉んで招いて居る。

「さあ、お出でなせえ、親方。」と路を讓つてあとに退つた、力松、鶴嘴の肩を入交へ、フヽンと笑つて、

「獸め！」

「待て〳〵、亂暴な事をいつちや不可ん。そして何だ、錢を惜んだやうで見ッともない、力。」
「え、」
「皆、最う此處へ來る時分か。」
「直ぐ參りやす、長靴の大將も一所でさ。」
工學士は頷いて、杖の尖で地の上に線を描いた。
「ではな、私は代を拂つて先へ渡る。」
「お止しなせえ、親方、詰らねえ、何ですぜ、何處か其處らに居る奴でさ。餘計な橋錢なんか取上げやあがつて、第一此の村の奴等が迷惑をするんだッて謂ひますぜ。水が無けりや眞中から打壞して通る處だ。がた〳〵震へて落こちねえやうに、欄干に掴まらして置く內がお情でさ、打棄つておいでなさいやしな。」
「まあ、待てよ。」
と工學士は、幼兒に對した時の如く、莞爾と片頰笑み、
「可いやうにするから、默つて居な。で私は先へ渡る、お前此處に、皆を待合して居るんだよ。可いか。」
力松口を尖らして、

「可うがす。そりや可うがすがね、だつて馬鹿々々しいぢやありませんか。私ア吝でいふんぢやありませんが、鐚だつて出しませんぜ。」
丼をぐわちや〳〵と、
「恁う、あるにやあるぜ、讐もありや錢もあら、汝に拂はねえばッかりよ、唐變木。」
「ぢや、貴下、志だけ、輕少です。」
銀貨一片。
默つて手を出さず、目ばかり睜つて大息を吐いて居るから、工學士は其のまゝ、訓導の肱の傍なる欄干の上へ、衝と差置くと、姿黑く、夕暮の橋の新しい上に、鮮明に露はれて、悠々と通つた。
氣で壓されたやうに、束髮は身を飜して、ひよろ〳〵と出たが、五歩も行かず、立竦んで停まつた前を、ずッと過ぎ、やがて渡り果てる、と早や暗い。
藪の邊で、其の姿が見えなくなつたと思ふと間もなく、岸なる岩の上に、すッくと丈高く瘦せた彫像の風情で立つた。
手にした枯枝の杖も搖ぐばかり、水は近く、靴の尖に雪を碎いて、颯と飜つて、靜に流れて、
又颯と飜つて、靜に流れる。

對岸一叢の樹立の中に、八日の月の影淡く、處々に岩の光、流の色。
力松も橋の袂を開いて、學士とさしむかひに相臨んで、此の溪川を隔てたのである。

十八

「親方、親方。」
流は近く岩に響き、聲は遠く谺を返した。力松大音に、
「來ましたぜ、來ましたぜ。」
「來たか。皆其處に留まれといへ。而して捨吉を呼べ、捨吉を、」と工學士はや、伸上るやうにし
て、此方の岸から命じたのである。
力松は背後樣に、片手を高く擧げて、
「やあ引、急げ、やい、急げ、」と下腹に踏張を入れて、甲走る。
左右畠の一條路、三蜒りばかり蜿つて長い、森に接した畷の上、遮るものなき月の下へ、前な
るは影暗く、後なるは形仄に、鱗を立てて十八九人。續いて一團、又一團、一町措き、二町措き
の其の間を、ちら〳〵と、二人三人が相繋いで、正に色黑く丈長き異樣の怪物、月の光と黃昏の
名殘の色とに隱見して、末は遙に雲間より地平線上に降れる氣勢。

魁の同勢は、力松の聲に一動搖み、前後左右が入交つて、墨汁を磑と擲つたるやう、手足の影
をべた〳〵と地に印して、衝と駈けて近いた。
「捨吉、居るか。」
「居る。」といつてのッそり出た、眼のきら〳〵と光る青年、髮を長く耳にかけて、細りたる頤の
尖に、投遣の髯伸びたれば、顏の形三角なり、肩に一ッ、脇腹の邊にも、大な鍵裂の痕のある、
これは(流)と拔いた半被一枚、淺黃の膝切の股引で、痩せた毛脛を露出の素跣足、腕組をした力
松に立向ひ、
「何だ。」
「待ちねえ、お頭が汝に御用だぜ。」といひながらキラリと鶴嘴を、月の射す岩角に突いて、流の
中に飜る、水の泡を搔摑む如く、溪川の上に手を伸し、
「捨吉が參りやした、頭！」
工學士、
「捨か。」
蓬々くしい年少な工夫の姿は、默つて前面に顯れた。
「最う些と下の方へ、流の下だ。」と工學士は岩傳ひ。捨吉は命に應じて、南北、流を挾み、水

暗く岩の白き間へ、雙方一條の黑き線を曳いて、十五六歩。

「可し。」

同時に足を停めたのである。

學士は力ある沈んだ音調。

「一ッ、二ッ。」

捨吉は手を拱いて、耳を傾けて身動きもせず。

「三ッ、四ッ、五ッ、」

算ふる聲と擧動に、略規矩夫の意を了したか、捨吉は振向いて、靜に背後なる樹立を見た。

「其の六本目の榎を倒せ、丁ど今立つてる處、岩の切目だ。」

聞きも敢ず、力松ぢたゞらを踏んで、

「占、占、橋が出來るんだい。」

捨吉は拱いた腕も解かず、踵を回らし、のそ〳〵と樹の下へ。身を反して仰向けに、兩の瞳は下闇に星の流るゝ如く、屹と見上げると、葉を垂れて、榎は梢から早や力なげに、月と分るゝ風情であつた。

直に根方に蹲つて、捨吉の姿見えずなるや、どや〳〵と寄つて五六人、手助と覺しく取卷いた。

橋の上なる訓導夫婦は、有るが如く、無きが如く、幻かとばかり消えもやらず、活ながら葬られたやうな形。

從つて爰に工學士の指揮の下に、工夫等が爲せる業は、恰も土の底、幽冥の境に於て、行はる事に似て、端倪すべからざるものであつた。

三宮村の草分以來、未だ嘗つて聞いたことのない、異樣な響がして、ドウと鞍ケ嶽の麓へ響くと、榎はざわ〳〵と枝にかけた月を外して、ざツと幹を搖つて横ざまに流の上。

仁者の架した橋を賴まず、鬼の渡る路は出來た。

芙蓉館

十九

見よ、如何に美しや。越の白山の名は解けて、山陰に月の隱るゝ時も、此處には雪の色を湛へて、芙蓉の花の湖一輪、朝は醒めたる高士の如く、夕は醉へる美人に似たり。

其の夕づく日を颯と浴びた、薄紅の蓮ひら〳〵、水に船ありて陸に人無き、砂の汀を葦に沿うて、使者の美少年と村夫子。

「船の中で聞きました、お前様の行かうといふ、巨山の別荘は直き其處ぢや。何うぢや、大分お草臥かな。」

少年は物珍しげに、四邊を眄し、眄しながら、

「何うしてこんな佳い景色でせう。芙蓉の湖といふのは眞個です。」

「然やう、賞美して申す名ぢや。」

「それでも綺麗な名を知らないものは、私なんぞの近處では、皆、獺潟、獺潟ッていひますが、然うすると何だか薄暗い、凄い處のやうに聞えます。」

「はゝあ、いや、彼是、時刻も其の獺になりかけました。」

と日脚を視めて打笑ひ、

「恁うと知つたら、粟生の茶屋で、漁船なんぞ待ち合さんで來ようものをな。何の三里足らずの路ぢや、お前様を負つても、もつと早く來られました。

今か〳〵と待つ中に、甚う船が遲く來たで、棹をさしてからが疾くても、時は後れた。

しかし、どの道お泊りであらうに因つて、仔細はない。日が暮れて着くまでの事ぢや、お前様が其の柳の枝へ、針をさしたら、釣をしながら歩行いても大事もないの。」

少年も莞爾して、

「でも、急いで行きませう、獺潟になつては厭です。」

村夫子は打頷き、

「成程々々。あゝ、優しいことをいはつしやる。先づ別荘へ行つたら、お前様が祝ひなさる奥方に、其の話を聞かして遣られえ、何よりの土産ぢやで、どんなにか喜ぶぢやろ。

けどもな、眞個は矢張獺潟ぢや、此の芙蓉といふ湖の名は、此處には限らぬ。十里、十五里と周圍の廣うない水溜の、然まで世に聞えぬのは、土地のものが賞美して方々でつけて居る。確信州にもある筈ぢや。其處で、所のものだけに、茶店の婆まで、芙蓉潟は嬉しいのよ。

何で又獺潟といふならば、一體此の湖は、近い頃出來たもので、白山と一所に、古歌に詠まれて居るのではないぢや。

先刻船で下つて來て、手取川の支流から分れて入つて、湖の入口で上つたの。見られい、こんもりと背後に見える、あの村も其の時分は、船つきの漁場でない、矢張田植稻刈の在ぢやつた、其處の庄屋に何と、天人見たやうな美しい娘が居たとの。毎年、獺が魚を祭る頃になると、其の庄屋の奥庭の縁に近い、飛石の上へ、生々とした大鮭を一尾づゝ、然も初物を供へたさうぢや。鮭の漁も、それからでないと無かつたといふ。

娘が七歳の時からはじめて、十九の年まで、一年も缺かした事がないで、村方では、手取川の

淵に棲む、獺の主が、其の美女に懸想して、牲を供へるのぢやと言うて居た。

十九の年、城下の武家の三男を養子に取つた、祝言の夜が更けて、奥庭に怪しいものの影を鐵砲で射留めたのが、六尺にあまる獺で、疵から血が流れると一所に雨が降出した、其が何と車軸を流して、五日も六日も、小止が無うて、七日めに洪水ぢや。其時大川が切れ込んで、此の湖が出來たのぢやで、水はけは又別に海までついたが、丁ど船を漕入れて來る手取から、湖口までは獺の通うた路ぢやといふ事。其處で人が獺潟といふのぢやが、」フト少年の顏を覗いて、

「いや、案じられるな、今は最う見た處、そのやうな俤は毛ほどもない、清淨な芙蓉の湖。あれあれ、早や月が見える、波がきら〳〵と寄るわ、寄るわ、それ、向うが最う別莊ぢや。」

唯見る、白き端艇の如く、小波の中に突出たのは、館の土塀の片端であつた。

二十

「お待ち、まあお待ちよ、今、肝心な處だから、」と巨山の別莊芙蓉館の二階なる、廻縁の端に立つて、お辻といふ仲働、東西、これより、目の中へ入つて失くなりまする體に、雙眼鏡を堅く押附け、釘で打つたやうに爪尖を揃へて立つたが、

「あゝ、呑んだ。」

咽喉へごくりと唾を通して、

「一思ひ。鵜呑みとは能くいつたものだ、ねえ、お孝さん。」

小間使のお孝は袖に、梅の薫の馥郁たる、地は黑のお召縮緬、赤と黃とお納戸の細な翁格子の羽織、當館の令室、美樹子の召料を柔かに掛けて居る。夕暮の裾寒う、庭の池の杜若の葉の戰ぐにつけ、高樓におはする方の、背後から被らせ參らすつもりで、階下から上つて來た途中、廊下で道草を食ふと知るべし。

「お貸しよ。一寸、さあ。」

「お待つてば、どうも希代だこと。あの、ひよいと呑込む工合ッたら、お前さんの何か承知をする處と、撮食をやる時にそッくりだよ。」

「可いよ、自分の親仁が漁師の癖に、何も鵜が魚を捕るのが、珍しいことはないぢやないかね、お見せッたら。」

「珍しくないものなら、別に御覽なさるにも及びますまい。今拜借をして來たばかりだから、親仁が急に田地持になつても、直にはお貸し申されません。」とお辻は泰悠に姿勢を變へて、銀の如き湖水の上を、ずらりと雙眼鏡で向直る。

お孝は少しく聲を憚り、

「奥様はね、お前さんのやうな意地悪根性ぢやありませんよ、何時でも貸して下さいます。」
「だから可いぢやないか、またお借なさるが可いやね。おつと、おつと、あゝ、持上つた。」
「え、」と伸上つて欄干から顔を差出したが、遠き柳に薄煙、水の果つる處山あるのみ。
「何がさ、お辻さん。」
と顔を見上げる。仲働は高慢に口を結んで、
「フム、大分重かつたと見える。川口の井戸端で、何家かの女房が水を汲んだ處なのさ、手桶を兩手に、えいやつと腰を切つた。おや〳〵、あゝ、然うか。一寸きら〳〵魚が飛ぶのだと思つたら、あれ、柳の蔭で、爺様の漁師が釣つたのだよ、鮮麗に映じます。」
「何が映じます。お見せなねえ、」と甘えた口。
「おつと、又釣れた見える〳〵、釣棹の絲まで見える。」
「御覽な、心柄だから仕方がない。鵜が意地汚をする處だの、勝手働きの水汲だの、魚を釣る處、お前さんのお父さんぢやなくッて。
私に貸して御覽なさい、そんな下卑た物なんぞ見やしないよ。遠くに鞍ケ嶽の下を、水がちよろ〳〵と歩行く處だの、筏を流して來る眺だの、白鷺の立つ姿ね、空を向きやお月様を拜むわ。」
どうせ貸さないと斷念めて小間使、出任せに雲上なことをいふ。仲働は眉を開き、鼻の下を長

うしたがヒタと見入るものあつて、無言なり。
「お辻さん、然う仰向いちや、見つけたつてお星様よ、金平糖ぢやありませんよ、あれさ口を開けて、どうだらう。」
「お默り。」
「ぢやお見せなね。」
「お默り、其處どころぢやなくなつた。今ね、向うの葦の處を、……あゝ、出た、出た。二人づれで此方へ來る人があるんだがね。」
「道だもの、二人でも三人でも歩行きまあす。」
「一人は少いよ、先へ立つて、あれ横を見た、むゝ、此方を向いた。おや、御門の松の枝で。」
湖に流れた綠の枝、搔い潛るやうに身を捻つて、
「おゝ、綺麗な、色の白い、俳優のやうな美しい學校の生徒さん。おや、おや、おや、もう一人はどうも風つきが。ヤお宅の旦那様だ。」
思はず雙眼鏡を取つて外すと、何も見えず、舞臺は一面の淺黄幕、唯漣の寄るばかり。

二十一

仲働の慌しいのに、お孝は吃驚、身を開いて横に飛んだが、
「嘘ばつかり。」
お辻は雙眼鏡を取り退けた、目のあたりきよとんとして、
「いゝえ、眞個。」と逆にして硝子を覗く。
「串戲ぢやありませんよ、何處の國にか望遠鏡の中に、旦那樣がいらつしやるもんですか、あれさ、振つて見たつて仕やうがないやね、飴の中に、……」
「おつと、皆までおいひでない、飴の中にお前ぢやあるまいしといふのだらう。」
と又當がひ、湖上を斜かけに見當を附けて、ぐるりと廻つたと思ふと、ひよいと飛上るやうな腰附で、
「御覽、見て御覽、旦那樣だよ。」
「どれ、お見せ。」
「さあ、」といつてうつかり渡すと、引手繰つて入交つて、お孝は持つたものを、ずるり緣側。
「まあ、お羽織ぢやないか、此の娘は。」と恭しく拾ひながら窘めるのを、耳にも入れないで覗いたが、思はず調子高に、
「奥樣。」と呼んだ。

「何だねえ、大な聲で。」
「旦那樣ですよ。だつて、」
「だらう。」
「あれ〳〵、」
「そら、ね。」
「まあ、」
「奥樣、旦那樣がおいでなさいました。」と殆ど同時に同音にいつて、二人でばた〳〵と御注進。
障子がすらりと開いたので、兩人ぴたりと足を留めると、部屋の中から島田を綺麗に、高等な化粧をした、年紀も六か七の少いのが、白足袋でちよろ〳〵と、小刻みに裳を輕く、お組といふ小間使、四五冊草双紙を取擴げた中から出たが、お次に用もなく控へたらしい、おとなしづくりの容色佳。
「えゝ、旦那樣がおいでなの。」と欄干に寄つて柱に掴まる。
肖後を拔けて、隣の室の障子を緣側から、お孝が膝をついて密と開けた、これは片手に雙眼鏡。
主が換つて、お辻が羽織を捧げて中腰。
「あの、旦那樣がお見えなさいます。」

お辻もちやんと手を支いた。

横手床の間の仄暗きに、濃い色の杜若、大輪なるが活けられたる、其の紫に照り榮ゆる、月の俤さし俯向いて、ぢつと見入つた机の上に、半ば開いた謠の本。

實や浮世の業ながら、殊に拙き海士小舟の、渡り兼たる夢の世に、すむとやいはん、うたかたの、潮汲車寄るべなき、身は蜑人の袖ともに、思ひを干さぬ心かな、かくばかり經がたく見ゆる世中に、羨しくも澄む月の、出潮をいざや汲まうよ〳〵、影恥かしき我姿々々、忍車をひく潮の、あとに殘れる溜り水、いつまですみは果つべき、野中の草の露ならば、日影に消えも失すべきに。

彼の松風を讀みさして、愁然として端坐した、あでなる人のありさまこそ、巨山の夫人美樹子である。人目なき今、はら〳〵と落涙して我知らず机に胸、姿も心も、惱ましげに崩折れたが、女どもに顏を出されて、衣紋を屹と、頰におくれ毛の亂も見せず。やゝふくみ聲の情ある、聞くものの身に沁むばかり。

「然うかい。」といつて立たうとする。

背後へ逸疾く差寄つて、

「風が冷うございます。」

と一人が藤紫の純子の裏を、幽に翻して着せかけた、お召縮緬の羽織を通して、帶は淺黄紗綾形の鹽瀨と黑繻子の打合せ、お納戸と薄鼠の子持縞絲織の袷の裳を引合はせて、なよやかに身を起す。丈もすら〳〵とうつりの好い、珊瑚の根懸の高い圓髷で、中差は、堆い、深彫の金の風吹牡丹、棟高な斑布の鬢櫛、定紋つき平打の金簪、烏羽たまの髪の艶やかなる、闇の水に、螢の光の流るゝやう、すらりと立つて緣側へ。

二十二

「さあ〳〵いそがしい、さあ、忙しい、忙しいのは是からだ。」

お辻は廊下から饒舌り込んで、突然立膝で取着いた、女中部屋の火鉢には、燒鏝を一挺、柄の太いのが突込んである。傍に、高島田、金絲をかけたのが、かよわい腕で、重さに引附けられたやうに、火熨斗を當てて、袴に取縋つた形でお組。

斜に坐つて針仕事、紫紺の羽二重、紋着の女衣服、紅梅色の裏を返して、媚かしく膝にかけ、襟に絲を刺して居るのは、貧相で淋しいが鼻筋の通つた色白な、年寄つたお針で、傍目も觸らず。

お辻は火箸でくる〳〵と灰に渦、ふん〳〵と嗅いで、

「不思議々々、恁う見た處、薩摩芋も燻べてないやうでは、爰許もお忙しさうだ、ねえ、お組さ

ん。」
「知りませんよ。」
「いゝ加減なことばかし。此の間粽がすんだばかりで、何處に薩摩芋があるものかね、お前。」
「其處はお情深い旦那様、丁と俵で貯蓄てございます。」
「人聞きの悪いことを、奥様が大層お好きのやうだ。」
「いゝえさ、私たちのことを思召してなんだよ、眞個にお優しいッたらない。」
と染々いふ口の下から、
「それにしても忙しい。」
「忙しい〳〵ッて、お前、何が忙しい。然うやつて饒舌つて居るぢやないか。」
「此の饒舌るうちが忙しいんだよ、恁くいふお辻さんなればこそ、平氣な顏をして居るけれど、不意に旦那様がお歸りの處へ、おつれがあると來たんだもの、昨夜から目が廻る、頭が廻る、手足がまはる、身體がまはる、ソレまはる。」
と膝頭に褄を挾んで、白足袋の尖を揃へ、火鉢の前でくるりと廻る。
「どッこい。」とサソクに又火箸で灰をくるりとやつて、
「何うだ、働きものかね。」とけろりとする。

あッけに取られて、手を留め、
「串戲ぢやないよ、もう彼方へ行つてお呉れ、眞個に此方は忙しいのだよ。直ぐ間に合せなくつちやならないのぢやないか。」
「奥様のお召だね、おや〳〵、襟をくけて何うおしだ。」
「大急ぎで男ものに縫直すんだね、お客様にお着せ申さうとおつしやるんだよ。」
「へい、あの俳優の若旦那に、」
「俳優ぢやないよ。」
「見たやうにお綺麗なさ。へい、ぢや、こゝにある、これも、」
といつて、手に取つた、襲衣は雪の下朱葉。白鹽瀨の無垢で見るも冷かな、燃立つ炎の凍つた紅絹裏、お辻は觸つた指尖から悚然とした寒い顏。
お針は一服吸ひつけて、
「お辻さん、お前、そんなに震へるほど欲がつたつて仕様がないやね。」
「否さ、まあ、一寸、輕くつて、柔くつて、冷くつて、薄雪のやうぢやないか。私なんぞが着た日にや、衣服の方で解けてなくなるだらうけれど、お客様が此の白と、其の紫紺のをかさねて着たら、あの美しい處へ、まあ、どんなだらうと思つてね、何なの？奥様のお指揮なの。」

「あゝ、お指揮、だがね、旦那様と御相談なすつたんだよ、いくら御不自由がないからたつて、然う急に新しいのが出來はしないから。」

「然うだらうよ。たとひ内の奥様に、あの初心なお客だつて、内證で遊ばすとなつた日にや、此處一番尋常ごとぢやないからね。其處で。」

「お襦袢は、切が間に合ふからね、新しいのでちやんと出來ます。」

「而して此のお袴、あゝ、こりや昨日、お客が提革鞄からお出しなすつたんだよ。」

「然うさ、昨夜一度お穿きなすつたんだけれど、皺になつて居るからね。革鞄の中からお出しだなんて、お前能く知つておいでだね。」

仲働は昂然として、

「其處はお辻さん、覗いて居たもの。」

二十三

「然うさ、私は、雙眼鏡で見付け出して、俳優だつて騒いだのは、私だけれど、何も覗いたのは善い男の所爲ぢやありません、御門が彼れだからね。御覽の通り、華奢な、尋常なお客様、お年紀もゆかず、此處は初、吃驚なすつて、蟲でもお起しなさりはしないかと案じられたからですよ。

それ、旦那様だといふと、直ぐに御門番に通じたんだけれど、前に二階で見つけたんだから間に合ひません。丁どお客様が松の樹の正面の、湖の縁へお立ちなすつた鼻のさきへ、どつとお前、眞黑な虹が噴出したやうに、大な刎橋が降りたらうぢやないか。

呆然はそれで澤山な處へ、其こそ思ひがけもなさらない、まあ天から降つた體の橋だから危しさうに、やう〳〵旦那様のあとから雲を踏むお心持で、怖々お渡んなさると、すぐに、ぐわらぐわらと卷き戻つて、お頭の上を松の樹へ絡んで納つたらう、恐しい響だし、お前さん、恁う疊つた處を見ると、宛然大な蜈蚣さね。あとは又お邸の周圍が殘らず水になるのだから、知らないものは驚きます。むかし龍宮へ行つた話は、龜に乘つて蜈蚣を退治たんだけれど、此方は蜈蚣に乘つかつて喜見城へ入るのだもの、蛤は蟲の毒さ、何もあんなにしてお置きなさらないでも可さうなもんだと、私は思ふよ。」とお辻は思入つた狀していふ。

お針どのは仕事にかゝつて、くけ直す襟を一扱き、指で挾んで、りうと撫で、

「それでも恁うやつて、四方水の、あの橋の下りない内は、浮城のやうな中に住んでれば、私たちはじめ、浮世を放れた、といへば氣寂しいけれども、天上界も同一で、結構なわけぢやないか。

それに又、いくら塚原さんがお强いたつて、」といふ時、えへん！と咳拂。五間ばかり隔てて聞える。塚原傳内、當館守護の豪傑で、北辰一刀流の達人である。

「そら、二時頃の氣合が入つた、毎日同じ刻限ね、戸障子へ響くよ。これぢやなるほど、眞個の懸聲をしたら、梁を渡る鼠が轉がるかも知れないね。」

「だからね、お強いにはお強いさ、そりや、當節の事だから、眞劍で切つ果つは知らず、源氏平家の大仕合に、無手で二三百人の中へ飛込んでも、天窓の土器に龜裂一ッ入れないといふ方だから、五人、七人、拔刀で押込みがあつたつて、それこそ親船に乘つたやうなものだらうさ、また佛樣といはれていらつしやる旦那樣の許へ、たとひ鬼だつて、覗くこともあるまいけれども、恁うやつて男氣の少い處、萬一といふことがあつて御覽、無事なまでも餘計な騷ぎぢやないか、昔だつて然うさ、百萬石のお大名でも、ちやんと要害といふものはあるんだよ。」

「それも然うかね、殊に又、工夫が入込んで物騷だといふから。そりや可いけれどもね、お客さまは橋ばかりぢやないよ、まだ驚いたことがあるんですよ。

奥樣は襖の蔭までお出迎なすつたけれど、皆ばら〳〵と出て、式臺で、旦那樣お歸りを申上げたらう。あとで、御洗足を持つて行つて、お足を洗つた時、お客樣が、今のは當家の旦那かッて、呆氣に取られておいでなすつたぢやないか、あの、お服裝だからね。與一平……ぢや爺樣過ぎる、與太郎は安本丹、然うさ、與左衞門ぐらゐに思つておいでなすつたのに違ひはないのさ。かさねがさねだから、一先づお座敷へお通し申して、少時お一人で在らしつた時にや、あの美しいお顏

が恍惚して、人形のやうだつたよ。」

「其處をお前さんが覗いて居たね。へい、然うすると、」

「提革鞄の中から出して、薩摩絣のお召の下へ、お穿きなすつたのが此の袴さ。おや〳〵、お組さん、まだ火熨斗が濟まないぢやないか。此の人は、むゝ、なるほど、擦つて見たり、取着いたり、それぢや日が暮れても、果しがない。」

お組は耳朶に色を染めたが、極りの惡さう、ものもいひ得ない唇に水一口。

「一寸、其の霧を吹いた日にや、勿體ない、あの方に、水を吐きかけるも同一だあね。」

娘は一層、紅を漲らして、我を忘れて、はゝと飲む。仲働手を拍つて、

「おもしろい〳〵。」

二十四

「さてと、其の、お召物の縫直しが濟むと、紫紺の羽二重の御紋着に、白の紋鹽瀬のお襲ねで、此のお袴を召すんだね。」

とお辻は更めて、悠然と坐り直る。

「あゝ、然うだよ、而してお前忙しいのぢやないか、どうぞ最うお構ひなさらず、」

「否さ、眞面目にさ、どんなにか、まあ、嘸お似合ひなさるだらう。」
「まづ藝人にだつてありませんね。」
「あゝやつて、絣を召しておいでなされば、凛々しくつて、可愛らしくつて佳いけれど、御紋着でお袴と來た日にや、どんなだらう、私は思ひやられるよ。」
「些とまたお覗きなさるが可いのさ。」
「あれさ、眞面目にさ、其處で何うするの。」
「何を、何うするの？お前。」
「だつて分らないぢやないか、おなじ達引いてお上げなさるなら、縞物か何か、一寸々々不斷にお召なさるものが可ささうなもんだと思ふよ。」
「そりや追つて遊ばすだらう。今度はいづれ呉服屋でもお呼びなすつて、こりやほんの、今夜のお間に合せさ。」
「今夜、はてな、お客様が御紋着で、其で何、お組さんと三々九度ごとでもあるのかね。」
「厭な、お辻さん。」とお組は袴に面を伏せる。
「おや、此の娘は膝に縋る氣だね。」
いはれて目を細く上氣した、横顔で打背き、

「私どうしませう。」
「何をいつて居るんだよ、」と額越に見てお針どのは窘めるやうにいふ。
「分らないぢやないか、然うでもなけりや、」
「お前が分らないんだね、お客様は、舞を遊ばすんですよ。」
「踊なの、」と怪訝な様子。
「これだから、漁夫の娘は話せない、舞といへば踊といふ、煤拂の埃のやうだ、馬鹿々々しいぢやないか。
お能のね、お仕舞といふんでさ。
それ、旦那様が謠を遊ばすだらう、奥様は鼓が御名人、お客様が舞をお舞ひなさるので、其のお遊びがあらうといふのさ。御紋着でなくつちや、折角の御技倆が榮えないぢやないか、分りましたか。」
仰山に、
「分つた！　はあ、それでは彼の方は能俳優。」
「お名は何とかいつたつけ、」
「えゝ、恁うだに因つて、若杉幸之助様といふんです。」

「別に、お家柄の名ぢやありませんね。けれども、お能の方は、御維新の時分から近い頃まで、しばらく譯が解らなくなつて居たんだから、どんな又御苗字にかはつて居ないとも限らないね。何しろ、奥様がお話の次手には、つい、私は氣にも留めないでお名は覺えて居なかつたけれど、お年もいかないのに、大層お出來遊ばすんだと聞いて居るがね、嘸お見事な事だらうよ。而してほんとうの藝人で鼓もお上手だといふこつた、お聲も、唯聞いても震ひつくやうに良いやうぢやないか。」

「そりやもう。」と力を入れる。

「拜見ものだね、お次から、そツとでも窺ひたいよ。」

「それから、あの、今夜は、奥様も一調を遊ばすさうでございます。」とお組は舞袴をきちんと疊んだ。

「一調ツて？」

「鼓の曲。」

「其處々々、其處だよ、道理こそ。」獨で合點して頻に頷き、

「否ね、革鞄からお袴を出してお召しなすつた處へ、お組さんがお茶を持つて行つたとお思ひな。盆を貸して下さいツておつしやるから、聞傳へにして私が持つて出たら、其の革鞄から、何うで

す、鰯を三把ばかり、紅白の水引のかゝつたのを引出しておのせなすつた。おや、おや、と思ひましたね、はて、こりや容色は可いが、乾物屋の御用聞か知らと、澄まして見て居ると、其のあとへ出ましてね、おなじく盆に乘りましたのが、裏と表をかさねた皮と、鼓の胴。あの繪で見てさへ、しをらしいのに、古びがついて、何となく神々しいのだから、お人柄も十段立ち增つて、私や、思はず、三ツ指をぴつたりついたよ。」

鞍ケ嶽

二十五

こゝに手取川の對岸、鶴來の南、日に暗く、月にも暗く、樹木濃かに鬱蒼として、所謂梅雨期の日本晴にも、其の邊は五位鷺の鳴かんず氣勢、名にし負ふ北國空、一朶の怪しき雲を籠めて、金城の天地長に朗かならず、行く處、到る處、庭の池、川の水、屋根の上、寺の鐘、社の棟、秋の白菊の夕まぐれ、春は櫻の朝ぼらけ、机の上にも、明窓にも、柱にかけたる姿見にも、緣なる嗽茶碗にも、常にこれがために一點の隈ありて存する如き、異靈の一山あり。鞍ケ嶽と名づく。

傳へ聞く富樫政親、地の巉峻巖嶮なるを相し、城いて詰の丸となしけるが、長享の年中、土寇

大に起りて、果は此處をも拔きし時、政親最後の決戰に、敵の勇士、水卷小助忠家と引組んで、馬ながら諸ともに墜ちて失せしとなむ、頂に大湫あり。

知らず此の池、それよりして朱の鞍ありて、ともすれば水に浮ぶとかや、然も水脈は遠く鶴來なる、金劍の宮の境内、砥ノ池といふに相通じて、此處に灯して高く翳せば、彼處に其の影映るといへり。いかさまにも水の色、千年の秋を封じたれども、草に似たる一葉も浮ばず、心あれば、晴天風なきに荒海の渦を卷き、然らざれば、凩の中に靜なる月の如く小波はたゞ落ち散る埃を洗はんとして、晝も星の影を動かすあるのみ。

其の凄さの故に、土地の者は稱ふるのであらう、千蛇ケ池は、同國醫王山の頂にもある筈であつた。けれども恁る名に呼ぶを以つて、何時の世よりか誤つて、一度、長蟲の鱗を腐らす鐵氣の、針一本だに投ずれば、立處に山海嘯、十萬の家を浸し、或は當年の大暴風雨となつて、五穀盡く實らずとて、行詰つた相場師などの、覺悟を極め、褌に鐵を藏して裸體で這ひ上る輩のために、麓の村々組合で、むかしから建てた番小屋がある。松茸を守るにあらず、蓴菜を守るのでない。池の見張をするのであるから、掘立小屋は固より頂上、池に近き山懷にあつて、恰も其の處谺の奇、一聲高く富樫と呼べば、三ツ四ツ七ツまで續けざまに山彦を返す由。されば蕎麥を賭けて將棋を指す底の隱居所でないから、捨てられた親仁か知らず、誰か水を守るものぞ。然も夜、殊

に夏、今や五月の半である。

元來、池に番人を要するのは、初秋から、米の相場の狂ふ時を主とするので、それも近頃は然までになく、魑魅魍魎と馴染な男のない時は、等閑にして差置くのに、隙間漏る怪しの火かな。

三宮から上り一里半、森を越しては空を仰ぎ、森を越しては空を仰ぎ、峻坂恁くすること四度、五度にして、それより、水を越え、石を飛び、岩を攀ぢ、草に縋り、果は蔓葛に釣られて上る、其の間、路はたゞ鋸の刃を渡るやう、森一ツ潛るごとに、一夜明けたる心地といふを、頂までは五日路六日路にも當るであらう、麓の鎌は峰の殘月、世を隔てたる深山の中。

滿山正に天地に大なる鐵の如く、黑き中に、赤く閃くは爐の炎である。白く戸に浸むは煙である。

驚破、惡魔の、土塊を煉つて、月に化せんとする時か。

否、里人等は、恐しい夢から覺め際に、譬ひ鞍ケ嶽の恁る光景を認めても、敢てこれを怪しとはしなかつた。

此の二三日前の日が暮れて、渠等は岨づたひに二個の松明の、ちら〳〵と燃えたのを少時視めた、尤も其の日、一挺の山駕籠に婀娜たる美人を乘せて、さしかゝつたことはいふまでもないのである。

然し、駕籠は纔に取着の森一ツ、それより上には昇き入るゝ路のないのを知つて、いづれも、今年の秋早かるべし、あはれ、其の白脛のあとは遙に山路の霜となつて、爪紅の血は岩角にもみぢを染めよう、旅の袖は、やがて溪川に錦を散らすであらうと言つて、且つ憐み、且つ危んで居たのであつた。

實に、髪は亂れ、衣は裂け、手足に血の名殘こそ留めたが、旅の女は、番小屋の中に、一個の青年と爐を圍んで、炎尖に瞳いよ〳〵清しく、面いよ〳〵白く、健在。

二十六

裏山風するともなく、折燻べた松の葉から、立昇る炎下伏に、煙の絡附いた時であつた、旅の女、――傾斜地藏の小屋守に自ら名告つた――お龍は、端坐した膝を爐の緣に進めて、燃料にも火箸にも、枯枝を灰にさし入れながら、

「村岡さん。」と沈んだ聲で呼びかけて、手を留めて熟と見た。

青年は爐を隔て、紺の色鼠に褪せて、綻も處々、釦もちぎれた、學校服。惟ふに最初から其の身丈に合へて、整へた品ではあるまい。古着などをありのまゝ手足に通したものと見える、痩せた體に太いのを絡うたが、傍なる人の情、赤毛布を裾にかけて、駕籠にもつけて來た風呂敷包を、

結目も解かず枕にした、頰にかゝるばかり頭髪伸びて、顏の色蒼白く枯れた頤に薄髭生ひたり、鼻筋通つて、眉優しく、見るに額の淸らかなる、可哀、恁らざりし時の偲ばるゝ其の俤の紅一點、唇の色の美しさ。然も窪める雙の瞳、鋭き光を包むと謂はば、讀者は何となく三宮村に榎を倒した、工夫捨吉の面相を思ひ浮べて、やがて相肖たるを認めらるゝであらう。

服裝こそ違へ、年恰好、耳の形も酷似で、但其の兩眼の、彼は涙涸れて霜に冴え、此は情を湛へて露に濕へる事の、異れるばかりである。

默然として答へなかつた。

「村岡さん。」

又呼びかけて、背後を見返る、壁黑く、暗き雲の切目と覺しく、煌々と星の輝くあり。お龍は痩せたやうに、肩を窄め、

「不二太さん、然う遠慮をしないで、最う、直ぐに應とおつしやいなね、此間からも然うだけれど、誰も聞く處ぢやありません。而して何か話をしませう、私はつく〴〵寂しいわ。」

未だ燃えやらぬ枝を其まゝ、力なげに取落し、髪の根もがツくりと横になる身を支へようとして片膝立てた、裳を溢るゝ友染も、寒さうな風情である。

村岡と呼ばれた學生は、横ざまに肱を曲げて、己が耳の根を引抓み、

「寂しいですか。」と唯一言。
「貴下と二人で居るんですから、然ういふ譯はない筈だと思ひますけれど、默つて恁うやつて居ると寂しいんですよ。それでも東京に居た時はもつと寂しくつてなりませんでした。今ぢや一所に居るんだから、可いやうなもんですがね、何爲か、矢張寂しいの。貴下、寂しがつちや惡くッて？　何か話をして下さいなね。」
「話といつて、又同一ことを繰返していふだけです。風が吹けば思ひ出す、車の音がすりや考へ出して、それからそれへ話に枝葉が出來るんですがね、こんな山の中だ、目と星ばかり動いて居ちや、自分ながら啞か聾かと思ふほど、これを饒舌らうといふ事もなくなつたぢやありませんか。
それに、此の間、二人の駕籠屋を案内に、此屋へ貴女が尋ねて來て、僕が昏睡して居たのを起して、介抱をして呉れました。あとで駕籠屋を歸してから、まづ貴女の御深切、謝すべき事は謝し、泣くべき事は泣き、訴ふべきは訴へ、怨むべきは怨み、悲むべき事は悲み、聞くべき事は聞いて、三日あまり、寐るのさへ忘れて、喃々として語り續けたでせう。
更めて貴女に向つて、世間ぢや、僕の事を何と思つて居ますと尋ねれば、貴女は矢張、東京はいふまでもなく、いづれの國でも誰一人、村岡不二太が、日光の華嚴の瀑へ投身して死んだといふのを、露ばかりも疑つて居るものはない。

然も其の自殺したのは、龍さん。」
不二太は岸破と起きた。
お龍は嬉しさうに、爐を見て、再び燃料を。
「貴女との間が思ふやうに行かない、其の鬱憤のために爲たのではなく、婆迦婆の弟子が懊惱に堪へないで、身命を擲つたと、親身までが、信じて居る、といつて答へるでせう。」

二十七

「リて見れば、僕が假に形骸だけも、こゝに活きて居るのを知つたものは、世の中に貴女ばかりだ。人が生死の祕密を打明けたくらゐ、祕さないことはありません。
此の間の駕籠屋も然うです、こんな、餓鬼道に徜徉つて居るやうな、薄汚い男を見て、貴女と並べて、夫人、旦那樣といつたですな。
較べて見りや姫樣と乞食だ、誰がそんなことを思ふもんです、考へると龍さんが、こりや路すがらも、鞍ケ嶽へ、良人か許嫁か、戀人か、何しろ緣あるものを尋ねて上ると、公然といつて呉れたに相違ないんだ。
村岡は死んだんです、ものをいつても亡骸同樣、動いても幽靈同然、二度と世の中へ名告つて

出られる身體でない。
然るに其を、嘗て大なる望を抱いて、大學にあつた時の如く、良人と思つて下さるんなら、龍さん、貴女は、幽靈と結婚するんで、貴女も死んだものといはなければならんのだ。
詰り僕のために、死んでくれたんです、何といつて、謝するにも言なく、泣くに涙もないのです。僕は唯、昨日、一昨日、一昨々日から、過去を繰返して話しただけで、別にいふことはありません。」
と瞬きつついつたが、目を見据ゑて、しばらくして、
「然し、龍さんは、話をせんぢや寂しいですか。」
「そりや、不二さん、おつしやるまでもないの。あの、日光でおかくれなすつてから、私はね、其の時から一緒に死んだ氣で居るんですよ。最初から、隨分人目を忍んだ間ですから、豫て暗號がありました。可い鹽梅に、其の暗號で知らして下すつたから、眞個に私だけは、不二さんが死なないことを知つて居たから、すぐにも邸を脱け出さうと思つたけれど、……隨分久しい間でしたねえ、貴下が隱れて在らつしやる處とさへいへば、金精峠から奥白根、碓氷の中、信州の戸隱、越後の妙高山、越中の立山まで、知らない國を夢にばかりは見て居ました。
でも、死なないで居るのを知らしたのは、私に冥土のあとを追はせまい爲ばかり。どんなこと

があらうとも、屹と來てはならないといふお言ですから、一生懸命に堪へては居たけれど、此の山からお寄越しなすつたおたよりぢや、最後の決心が、お出來なすつたつていふんですもの。
ひよつと、お目にかゝるのが、もう今度は、新しい屍でも、お尋ね申さないでは居られなくなつたから。
私もね、二度と邸へは歸られないやうな事をして、飛出して來たんです、ですから、死んだものつもりですよ。
それでも寂しいにや寂しいぢやありませんか。えゝ、不二さん。あなた何にもおつしやらないけれど、過去つた事より、私のお話しなさいッていふのは、あなたが、最後になすつた、其の決心の事なんです、どうぞ、それを話して聞かして下さいなね。」
村岡は是を聞いて、目に一段の光を添へた。
「龍さん、それです。貴女は此處に來てから、未だ一度も、寂しいといつた事はなかつたですな。或はそれが、僕に對して仕て下さる、お志の辛抱かも知れんけれど、兎に角、此の山に居て、此の夜氣に打たれて、寂寞を感じて下さらんでは、僕のいふ事が能く解りません。だから、今日は宵の口から、一言も發しないで、靜に待つて居たんです。
可し、それではお話し申しませう。此處へ、一

といつて差出した、垢じみて蒼く爪の伸びた指へ、お龍は默つて、白い手から、生々しい獸の骨の如き、枝うつた燃料を與へたのである。

「こりや、僕の方が馴れて居ます、生樹だから、」

と搔き起して、俯向いて、ふッ。

ぱつと立つた炎の影にも、憔悴の、一際見ゆる渠が風采、此の世の人とは思はれず。然も聲は、凛として、

「あとで、何爲、あの時に、あからさまに自分の弱點を露出して、龍さんと思ふやうになれない所爲だといふ遺書をして、洲崎、吉原に於て行はゝ如き、一人情死の愚を謳はれて死んでしまはんだつたかと、非常に後悔をしたんです。」

二十八

「また實際、龍さんを前に置いていつちや何だが、一婦人のために、生命を棄てるつていふのを、親類なり、友人なり、天下に發表し得るやうな勇氣があるなら、僕はもう彼の時に、事實華嚴の瀑で死んだんだ。

處が然うはいかんです。執着があり、未練があり、就中名譽心が盛だから、絶望した懷疑派の

一人が、哲學のために殉じた體に、世を欺き、人を欺き、自分を欺いて、公に遺書を貽しました。どうして、手近な處でも、いつはり多き世の中に、死ぬるばかりが誠なりけりといふですものね。誰がいつはつて死ねるもんです、果せるかな、現在生きて居るんだ。はゝゝはゝ。」

不二太は意味もなく高らかに然し寂しく笑つた。お龍は一切、其の意を了したるものの如く莞爾して、

「それでも、あの當時は、私だつて嘘だとは思はなかつたんですもの。世間ぢや何れだけ騒いだでせう。不二さんの死骸といふのが、未だ見つかりもしない先から、眞似をして身を投げたものが三人ありますよ。眞個に貴下は大膽ね。」

不二太は耳を引張つて、

「大膽？　何、大膽なことがあるもんですか。極めて小膽な、吝な卑怯な料簡ぢやありませんか。村岡が最後之感を遺書して、いつはつて死んだのに較べると、大晦日に首を縊る奴が遙に豪い！其の方が、却つて本心を打明けて死を恐れんのだから、勇氣があります。しかし僕は、區々たる名譽心のために、大罪を犯したですな。たとひ愚にもせよ、癡にもせよ、僕ゆゑに多くの人が死にましたから、詰り手を下さないで、人を殺したと同一なんだ。

まだ最初の中は、山の中から自白して、名告つて出て、立派に社會の制裁を受けよう。あはよ

くば、一たび死んだものの蘇生つた嬉しさのまぎれに、罪が許されるかも知れんなどと、果敢な い望を持つたこともあつたんですが、既に蔭ながら人を殺したのを知るに到つて、最う其の望は 絶えたんです。

到底自分は、再び世の中へ出られる身體でないと考へると、それからは實際、死生の問題を解決しなければならん必要が起つたんです。」

不二太は說いて、爰に至つて、靜に、

「お聞きなさいよ。其處ではじめて、いつはつて遺書したやうな懊惱を實際に爲出したです。何とぞして、生ながら自分を葬り得て安心が出來るやうな、解脫の要道をもとめんけりやならんでせう。

釋尊は王宮を出でて、先づ、これを婆迦婆仙人に聞いたんです。僕は嘗て少く學んだ、胸中の書籍に就いて尋ねたです。」

渠は頤を胸に埋め、

「僕はこゝに尋ねたですな。然うすると、此の胸には、金釭も未だ新しい、つけたてではありませんか。」

いひかけて犇と胸を打つた手を、肩へ辷らして兩手をかけて緊乎と組む。爐の焰は、ものあつて、上より壓し伏せるやうに又暗くなつた。夜氣膚に迫り、沈々として、數千里の雪の、世を鎖して此の孤屋を封ずる氣勢、時にさら〳〵と音するばかり、靜まり返つた緘默を破つて、板戸に觸れて幽に響くのは、靄の顏の、仄白く、近々と來て隙間より冷かに內を覗ふのであつた。

顏を上げると、いつの間にか、お龍は爐の此方にまはつて、背後から毛布を背に被せかけて、差覗いて立つて居る。

目を見合せ、

「恐しく寒いこと、」と其まゝ寄添つて、姿を並べた。

不二太は悵然として、

「龍さん、解脫の道を胸に問へば、新しい釭の間から、微に答へるのは貴女の名、貴女の名ばかりであつたんです。」と切々となつて聲が曇つた。

お龍もほろりとして、

「まあ、ねえ。」

二十九

「えゝ！龍さんの名をいつて何にする。汝蛆蟲の如き身を以て、濫に尼連禪河畔の長者の女の、

乳酪を欲するも同一だ。

釋尊すら、世を遁れ、山に入り、眞先に婆迦婆に道を聞いて、五百人の弟子の光景を見たけれども、然うして得脫しようとは思はれないから、去つて、阿羅々迦羅邏に聞き、鬱頭羅迦に聞いて、なほ明星一點の光明も認め得なかつたために、婆迦婆の弟子の行に倣つて、其處で、苦行の林に坐した。

或は一日に一粒の粟を啖ひ、或は膚に木の葉を絡ひ、或は蛇の如く地に這つて動かず、或は日出づるより日の入るまで、偏に太陽を睨み詰め、」

不二太は又例の耳を抓みつつ語つたのである。

「或は、隻足で立つて身を支へ、或は終生日に一本づゝ頭髪を拔き、或は木の枝に巢を組んで、果實を嚙んで世を終るなんど、皆、婆迦婆の弟子の苦行です。

釋尊も、六年間、此の難行を爲たのだけれども、到底終局の解脫に達することが出來なかつたので、心をかへて、苦行の座を立つて、傍を流るゝ尼連禪河に降りて、身を清め、月も日も塵も積り積つた垢を落した。爾時に疲勞一時に起つて、暈眩して岸に倒れた處へ、恰も通りかゝつたのが牛乳をさげた長者の女で。美少女は、高位の沙門の倒れたのを見て、抱起して、其の手に携へた乳酪を供養した。釋尊はこれがために、神氣を恢復して、卽ちあらためて、菩提樹の蔭に端

坐して、工夫を凝した七々四十九日のあけがた、朝日の雲より出でたる如く、豁然として大悟して、成道正覺を得たのでせう。

然るに僕如きものが、はじめッから一足飛に、龍さん、貴女を望むんです、長者の女を求めるんです。解脫なんざ思ひも寄らない！頭から退轉だ。

どうして正覺が得られるもんです。けれども世の中へは顏を出せん。深山路に分け入つて、樵夫に辨當の殘を惠んで貰ふにさへ、聲を密め、顏を背けるほど、人目を憚る境遇だから、唯今までに、あらゆる苦行を盡したです。

華嚴の瀑に、世を欺いてから、あしかけ三年、藁の上にさへ寐たことなく、暖な湯を呑んだことさへない。嗟！これほどなら、何爲彼の時に、實際を打明けて、眞個に死ななかつたらうと、思はない日はなかつたですが、もう其の時分には、貴女に逢へないがために死ぬといふより、一目見なければ死なれないやうになつ了つた。

ですが、僕が、こんなものが、貴女に逢へようとは思はない、勿論、夫婦にならうなどとは金輪際思ひもかけぬ事、今以て、斷乎として、誓つてそんな心はない。

けれども斷念める事は出來んのです。固より未練で、臆病で、あらためて、死を事實には爲し得ない、死ぬには死なれず、生きられもせず、苦行を盡して解脫はならず、懊惱に懊惱、煩悶に

煩悶をかさねた結果、今、龍さんがお聞きだつた、其の最後の決心が出來たんです。」

一段語り果てて、不二太は、深く息を吐いて、今や朦朧として、座の一隅に侵し進んだ靄の煙を吸つた。

お龍は髯の中にたゞ其のみ美しい、學生の口許に目を注いで、

「はあ、それでは硫黄ケ島へ行つたやうな、救の船が見つかつたんですか。」

「飛んでもない。」

「思想界ぢや兎も角ですが、あなたは何も警察へ引かれるやうな罪人ぢやない、私さへ宜しくば、世の中へ名告つて出ますか。」

「以ての外です。」

「ぢや、一生、何處のか山奥に朽ち果てて、人の形の苔になるの。」

「そんなんぢやありません。」

「ではどうするの、不二さん。一度私に逢つて死なうといふ、御決心?」

村岡は頭を掉つた。

お龍は面に、希望を湛へて、

「それぢや可いではありませんか、私は夫婦になる氣だもの。」と事もなげにいつて、直に問題は

解決したと思つたやうに、安らかに眉を開いたのである。お龍が此時の俤は墮獄の罪人を救ひ得た天人の如く、端嚴にして且つ微妙なるものであつた。

不二太、

「否!」

三十

お龍は餘りのことに、返すべき言もなかつた。

「……」

「どうして、斷つてそんな事は思はない、僕が今、此の身體で、貴女と夫婦にならうとすれば、狒々が配偶を求めるのだ、以前からも又然うです。一目見たい、逢ひたいと、思はんことといつたらなかつたけれども、未だ嘗て一度も、世帶を持たうの、寢ようのといふ考へを起した覺えはないのです。こりや明な道理で、食ふ道を知らんものが、一家を營まうといふ料簡の起る筈なく、片時も安眠をし得ないものが、何になります!」と不二太はやゝ激した風情で、擲つが如くいつた。

「まあ、貴下、不二さん、世の中へも出なけりや、山にお引籠りなさるでもなし、私も構ふ氣ぢ

やないのですつて？」

「いかにも。ですが貴女を構はないなんて、そんな事があるもんですか。構はないのぢやない、構はれないのです。たゞ機會があり、場合に因つたら、僕其時こそ、生命を棄てても構ひます。そりや屹と、決して御志を忘れはせん。」

「否、私が聞くのは私の身についての事ぢやないの、何うするのよ、貴下は、」

とお龍は我を忘れて摺り寄つたが、憂慮しさに堪へぬ風情で、

「不二さん、何うするのよ、最後の決心ッて、又死なうなんていふのぢやないの。私はね、一所でなくつちや死なせないから！」

思ひ詰めた、男の膝に手を置いて面を正しくして屹といふ。

村岡は又耳ととともに己が毛髪を掻い摑んで、

「死ぬもんですか、此の因業な奴が死ねッたつて死なれはせんです。龍さん。」

お龍は頷いて、默つて次の言を待つた。

「もう十分間、然うやつて居て、最後の決心といふものを聞いて下さい。恐らく是を聞いたら、驚いて呆れて、」といひかけた、片手わなゝきながら、お龍の冷い袖を壓

へた。

「此、此の袂を拂つて去るでせう。固より承知だ。其の時は、穢はしい、厄雜な身體は、藻脫の殼となつても、魂は附添つて、無事に麓まで送りますよ。龍さん。

古の哲人は、悟道の曉に佛になりました。

僕は迷に迷をかさねた結果、思ひ切つて惡魔、外道になつたのです。

村岡は死ぬに死なれず、生きるにも生きられず、横にも縱にも身を置くに處なく、煩悶に煩悶して、死しても到底、解脫を得、慰安を求むることが出來ないから、生きながら惡魔になるのだ。

あらゆる罪を犯す、爲し得る限り不法を働く。惡逆、無道、酷薄、殘忍、人を殺す、」

「え、」

「火を放つ、」

「嬰兒を屠る、婦女を辱める。」

「……」

「犯して其の眼に唾吐き、屠つて其の臟腑を炙る。牛馬を裂き、犬を煮る、草木を枯らし、水を濁す、いづれも天魔破旬の爲す處、卽ち僕の行はんとする處だ。」

「貴下が。」

「勿論、」と答へた。
「不二さん、貴下が、」
「勿論、」と昂然として答へた。
「草木を涸らすの。」
「其の根を穿り、其の花片を搖るです。」
「牛、馬を裂くの。」
「其の舌を嚙み、其の腦を嘗めることを誓つてしませう。」
「水を濁すの。」
「敢て其の源を蹂躙する。」
「放火をするんですか。」
「何でもない。」
「人殺。」
「仔細はないです。」
「婦人を……捕へて、」
「……」

「貴下、嬰兒を、――」
しばらくして、口吃しながら、
「勿……論。」と答へたのである。

三十一

「而して、然うして、然う、そんなことをして貴下の身は何うなるんです。」
お龍は顏さへ辭さへ、ものに激した狀であつた。
今はなか〳〵に落着いて、不二太は却つて自若として、
「其の結果、僕は何等かのものに滅されるんですな。罪惡は必ず滅亡しなければならんです。鬼を制するは神、邪を破るは正、魔を封ずるは佛、罪を正すは法、暗黑を照らすのは光明でせう。
僕は今、光明を求めて認むる能はず、法に從はうと思つて出來ず、正を欲して得ず、神佛にも棄てられた身體だから、自分を救ふためでなく、我を滅さう、罰しようとして、神佛の顯るゝのを待つて、跪いて、訴へて、泣いて、救を求め、慰藉を求めて、たとひ殺されても可いから安心して死なうと思ふんです。
僕は敢て火水も厭はん、お話し申したやうな、鬼畜に齊しい、惡逆を擅にすれば、何者か來

て、是を滅さずには居ますまい、可矣、それは悪魔でも構はん。そ、そんな奴を殺さうとして出現すれば自分のためには佛です。又もし、刑官でも差支へない、我がためには慈善家だ。直ぐに其の袂に縋つて、其處で解脱しようと覺悟したです。龍さん、僕が三年間、いふに忍びない煩悶の曉、漸く斷ずることを得た、最後の決心といふのは是です。」

判然と、いへる言は明快であつた。けれどもお龍は押返して、

「待つて下さい、それでは、むづかしい理窟は分りませんけれども、何、詰り恁うですか。貴下は生きちや居られない、死ぬにも死なれないから、心でなり、仕事でなり、よくないことをして、悪人になる。

然うすると、悪人は滅びなければならないから、天なり、命なり、神、佛、人なり、何にせよ、其の悪人を滅すものは屹と、善人、人でなければ、神、佛ですから、其處で、賴んで、成佛をしたいといふのね。

それぢや、優しくいつたら何なんでせう、一層氣候が蒸暑いくらゐなら、風も吹け、雨も降れ、然うしたあとで、太陽の影を拜まうといふんですかね。」

「先づ然うです、」と不二太は嬉しさうにいつた。お龍は可愛い兒の駄々を、合點した趣で、

「さつぱりして好いわ！」

とぐツと枯枝を搔上げると、何うしたのか此度は輕く〳〵と燃えた。其の明に、胸を折つて居る小柳の帶も青く、艶やかに照り添つて、唇朱く、血の色を帶びた雪よりも白い横顏へ、衝と、紅の輝く絲を曳いたやうに、炎の尖が閃いてかゝつた、はら〳〵とある後れ毛の末がアハヤ。

はツと思ふ咄嗟の間に、不二太は美人の肩を向うへ突いて、

「危い！　髪が……」と優い聲、服の隈々も一刷深く濃くなつて、眉の間の顰も消えて、口許も頰も、暗澹たる破小屋の片隅に、明かに見えたが、恰も此の時は、一點彩なき墨繪のおどろおどろしい深山の圖なる、二個芥子の如き人物に、繪の具の滴美しく染め出だされたる光景であつた。

お龍は煙の染む目を婀娜に纖うして、咽喉清らかに稍仰向きつつ、頰を動かして、縺れかゝつた鬢の毛を掉り靡け、

「私だつて、火水の中も厭ひませんよ。貴下が構つてくれなくつても、何時までも一所に居て、而して、貴下の前途を見屆けて、安心をして、最う一度、インキの罎を提げて、あの本郷のね、龍岡町邊を通つた時のやうな顏を見ませうね。」と目も通はさないで、爐を見ながら焚火にしなやかな十の指、炎尖の高くなり低うなるまゝに、微に打動かしつつ差翳した。腕組をして瞻つて、

「だから、だから不可ん、龍さん、だから駄目だ。僕を滅すものは遠く他に待つには及ばない。悪逆無道な心を聞いて、貴女が此ま〻僕の横面へ唾して、フイと見棄てて去れば、立處に其が卽ち引導を渡してくれる善知識、僕は快く目を眠るものを、留を刺してくれれば可いに！」

異形のもの

三十二

不二太は胸に、肩に、腕に、溢るゝばかりの眞心を身悶に顯して、

「慾、龍さんが見棄てないから、何より其が執着の種なんだ、天地に容れられない、こんな人畜を何だつて庇ふんです。たとひ袂を壓へて居たつて、叩き拂つて去つ了ふ筈ぢやありませんか。今もいふ通り、然うすりや斷念めて、僕は苦患を忘れて死ぬ。」

「貴下、そりや不可ません。獨りで死んで、自分だけが好くッたつて、後に殘つたものは何うすると思ふんですえ。

構はないぢやありませんか、夫婦にならなくつてもお傍に居ようといふんだから、何も私のことに氣をお揉みなさるには及びません。

おつしやる通りにして、十年なり、百年なり、また唯た今でも、貴下を成敗する正しいものが出て來るのを、私だつて待ちますよ、ねえ。一所に苦勞をしませうねえ。」

「……」

「また、貴下、御挨拶ぢや私は厭、好事だわ、私、勝手なんです。」

「一言もありません。」と不二太は張詰めた氣の一思ひに碎けて消えるかとばかり、便ない胸を壓へようとして、四邊を眴すと、フト枕にして居た、風呂敷包。

ずばと身體を横倒に引寄せて、膝に乘せ、縱に鳩尾を支へたが……待て。

「や、こりや、皺になる、衣服でせう。」

「否、乳ですよ、何とかいつたつけ、不二さん、

あれさ、……尼連禪河の女の乳なの、お金ですよ。」

「不殘、」

「はあ。衣服はないんです、他にね、好な書籍が五六冊、」

「何の書籍？」

「韓非子、」といつて嫣然として一笑して、又、一燻、樺の皮に火が移つた、新しい焰は幅廣く燃えはじめる。

不二太は胸を引いて、大きく空ざまに手を翳し、
「こりや良い火だ。」
「私の方が上手でせう。不二さんは沈んだ氣の癖に、赫々と炭を繼ぐのが好だつたね。おゝ、而して、ぱッと大摑みでなしに、これから何うするんです？恁うやつて多日此處に居るんですか。可いわ、然うすりや私も其のつもりで、薪も拾ひませう、清水も汲んで上げませう、不二さん、可いやうにして下さい。」
これには答へず、村岡は火の影に、黑白も分かぬ、屋根裏の隙間を熟と仰いだが、
「何時です。」
鐘は固より、鷄犬の鳴音はおろか、世にいふ松風の聲も聞えぬに、鎖が晃いて靜にパチリ、
「一時四十分、時計が些と狂つて居ますやうですよ。」
不二太は頷いたばかりであつた。
「山が高いから、早く東が白みませうかね。貴下、此處がまた何してお氣に入つたんです。」
「朋友が澤山あるからです。」
「お友達？」
「有名な魔所です。此の山の城の門にして、これから奥は、峰續き、山續き、白山の谷へかけて

凡そ妖いものの住家ですな。所の人は天狗といひます、魑魅魍魎の類、山の神、土地の神、こだま、すだまの高臺の市街なんだね。
しかし、魔所といつても場所に因つては、崇高な處もある、俊秀な處もある、雲に超然として高く、神仙となり、仙女となつて、月と語り、星と遊んで澄したもんださうだけれど、取着の此の鞍ケ嶽、千蛇ケ池あたりに居るのは、皆僕のやうな駈出しの惡魔、邪鬼外道の輩だ。
ですからいはれなきに殘忍な仕事を働く、能く老人なんかいふがね、此處へ攫はれて來た小兒があると、あの、迷兒の迷兒の與太郎やといふ奴、一寸僕にも肖て居る。然うすると奥の笈ケ岳へ行つて賴むと、惡戯徒が、親分にぐッと取占められて、謝罪つて返すんですつて。
龍さん、貴女は先刻寂しいといひました。時刻も可し、一時すぎ。其の朋輩を引合せながら僕が惡事の手はじめをして見せませう。」

三十三

「それから龍さん、明日にも連立つて山を下りませう。此處に居ちや何一つだつて目的の犧牲を手に入れる事は出來ないのだから。」
お龍は眞顏になり摺寄つて、

「何處へ行らつしやる、仕事の手初ッて何ですね。」と、稍懼を抱いた體で、男に縋るやうにしたが、其の目を睜つて答を待つた間は一個、うら少い美人に過ぎぬのであつた。

「最初の仕事にも、居處を變へるにも、先づ第一着に、華嚴の瀑へ行くんですな。」

と事もなげにいつて退けると、

「嘘ばつかり。いくら心ぢや魔になつたつて、鬼になつたつて、日光山まで、此の鞍ケ嶽の頂から、何處を飛んで行かれるのよ。落人ぢやないけれども、路傍の石の地藏にも心を置かなくつてはならない身體ぢやありませんか。」

「何、上野國まで行くのぢやありません、つい此の上のね、龍さん、千蛇ケ池まで上れば可いです。

千蛇ケ池は瀑ぢやない、勿論瀑ぢやないが、其の怪奇、其の幽邃、月と、太陽と、星と、一所に映す水の色、是を華嚴の瀑の、瀧壺の底の巖の下なる、別天地と稱して可い、僕は元來其處に沈んだ身體なんだ。

だから、なぞらへて其の池を、恁う……お聞きなさい、耳の底に何となく音もしないで轟々と響く、我が朋友、山々谷々に充滿た、惡魔の呼吸を、岩の底に葬られて聞く、千丈の瀧の音と思つて、一番手初めを行ッつける、龍さん、仕事といふのは、先づ、」

不二太は屹となつて膝を立てて、何物か四邊に求むる樣子を見て取り、

「何です、」

「松明。」

「あゝ、然う、」

とお龍も膝をうかして見た、燃殘りの松明一把、大なる蓑蟲の形したるが、所がら、此處よ、此處よ、と鳴きも出さんずる狀に、壁際の暗き中ながら直ぐに知れた。過日夜明けて後、孤家を辭した駕籠舁の殘し置いた賜物である。

不二太が洋服の手許赫く、松明はめら〳〵と炎を立てた、これを爐に突込む時、焚火は揉伏せて煙にしたので。

此の煙仄白く、小屋の中に群つて、不二太が立上つた松明の火から、末濃に紫を吐くのと入亂れつつ、二人の身の周圍をぐる〳〵とまはつて、戸口に向ふのに續いて出た。

不二太は一度立停つて、後に跟いたお龍の立姿を見ながら、衝と隻手を前方へ差延べ、板戸を引開けようとすると、建附けは透いて居るのに、何かひそ〳〵、濕やかに戸外から壓へて居て、ねばるやうで、開かなかつた。

不二太は思ふことがあつたと見え、

「お待ちなさい、犧牲を搜しに出るものが、又歸るに家のあるべき道理はないのだ。是ッ切山を降りるから、僕は何にもない。龍さんは其の包を、」

「可うございます、それでは。」

「と腰へつけるかな、いや、肩から西行背負といふのが可いか。」

といひ〳〵力を入れてぐッと引いた、ガタリと開くと、煙は怪しい形して、一團フイと外へ。續いてむら〳〵むら〳〵と、ひらめいて出たが、一面の濃な靄は、殆ど戸を封ずるばかり、丈もなく、幅もなく、厚みもなく、限知られず、山に幕を蔽ひかけて屯した中にちぎれ〳〵。彼處に一ッ、此處に一ッ、圓に固つて殘つたの、碎けて三ッ五ッになるもあり、相交つて朦朧として彳むあり、末廣がりになつて遠ざかりつつ去るのもある。或ものは蟹に似て脚なく、或ものは犬に肖て尾なく、又人に肖て手が見えぬ。

靄は煙の下を潛つて、重く、鈍く、緩かに動き出して、折から戸を出でた學生の胸を籠め、背後に草鞋の紐を結ぶ美人の足を乘せて、雲が來て導くやう。

三十四

さて番小屋を出て晌した、深更鞍ケ嶽の光景は、單に爐の煙の奇しき振舞ばかりではなかつた

のである。

一段々々累る峰は、大空に一ッづゝ夜が深く、いよ〳〵高く、いよ〳〵靜に、いよ〳〵暗く、其の高きにつけ、靜なるにつけ、暗きにつけ、彌が上に謂ふべからざる祕密を藏して彌勒出世の曉まで、天にも地にも片言を洩し語らざるべく、決心したかと視められた。然も其の形の男波や、女波や、碎けて返る小高き丘まで、朧々の岩の胸、木の骨土の肉、淸水の血に靈あつて、此處に彳める人に對して、上から大きやかに瞰下すあり、傍から差覗く狀なるあり、瞰下す者は魔であらう、差覗くものは鬼であらう、又嘲笑ふが如きも見え、頷くが如きも見え、冷かに面を背くるも見え、澄して嘯くも見え、爪立つて飛ばんとするも見え、横に寢たるも見え、慌てて目覺めたる風情なるも見え、來つて語らんとするも見え、跪いて拜せんとするのも見えた。低く、上に村岡とお龍を乘せ、高く下より滿天其の光の燦たる每に殆ど音するかと近き星の光を包める靄の中に、種々の山の姿。

其の嘲笑ふは魑魅よ、魍魎よ、頷くは、こだま、すだま、面を背くるは何者ぞ、嘯くはそれ、名ある石か、横に寢たるは松が枝か、飛ばんとするは高峰の鳥か、夢覺めたるは猿なりや、來らんとするは岩角よ、うづくまつたは樹の根であらう。

恁る時、白山にては白雲雪の谷間に湧きて、綿々紫の岩を攀ぢ、靉靆として天に朝し、月を

送り、旭日を迎ふと聞く。

彼處は神仙、此處は妖魔、陰慘たる靄は恁る異類異形を宿して、松明の影に皆動けり。

時しも棹の如きもの、黑き稻妻かとひら〳〵と枝打つて、峰ともいはず、谷ともいはず、横ざまに映つて消えた。

あとから脚長く痩せたる影法師、凡そ四つ、番小屋の背後を衝と、絕頂の方へ駈け拔けた。其後へ、つッと出たのは、張子の虎のやうな首のぶら〳〵とした獸で、やがて見えなくなる。

ト中空を馬が飛んだ、何か乘つたのが分れてフッと落ちたと思ふと、木の葉が續けざまに降つて來た。

松明がバチ〳〵と鳴つた。

取つて左右に振ると、炎が靄を蒸して、薄赤く靡くと同時に、前後左右にすく〳〵と煙の形、人の姿、ぢつと二人を瞻めたのである。

「不二さん。」

「皆、僕の朋友です。」

ひたと男に寄添つて、

「而して仕事とおつしやるのは？」

「應、其の、これから千蛇ケ池へ行つて、其處を華嚴に擬らへて、僕がしようといふ手初めの一件？」

「え、、其ですよ。」

「いや、貴女は氣怯れをしたんだ。此の大勢の僕の朋友を見て驚いたんでせう。此のくらゐの事に恐れるやうで、此の先とも、何うして、僕と一所に身體が置けます。ですから幾度も、早く留を刺して下さいといつたぢやありませんか。

僕をお棄てなさいといふのです。」

「然うぢやないの、私は恐いのぢやありません。」

と煩つたやうな身のこなし、お龍は袖を引合せて、松明の煙に色が薄い。

「尤な事です。決して無理はない、いかに氣象の勝つた貴女だつて、これが驚かないで居らるゝものか、」と意氣の昂つた不二太の風采、とみかうみて、

「貴下、あなたは魔法つかひ見たやうね。ですから、お友達だから、貴下の使ふのだから、山は恐くはないけれど、早く見たいの、其の仕事といふのは、どんなだらうと思つて、氣が急いて、息がはずむの、胸が痛いわ。」

三十五

「然し、然うして千蛇ケ池へ行つて仕事をするッたつて、何も犠牲のある處ぢやないのだから、人殺をするんでない、放火をするわけでもない、まあ、御覽なさい。」

火影に、胴中のあたりだけ、眠いのを引摺起された風情の、手近な白樺の幹を照して、村岡は立寄つた。

手を擧げて上から下へ、一擦り擦つたと思ふと、爪が鋭かつたか、質がもろいのか、樺の皮はバサリと剝けた。人の面を脱したあとは恁うであらう、これは剝げたあとは目鼻がありさう、生生しい木質が面長に露れて、落ちたる皮は、風もないのに、むく〳〵と地に動いたが、暗さに紛れた。

學生は眞直に立向ひ、お龍を顧みていふやう、

「詰り恁うするのです。上の池のふちにも、立樹がある、就中大きく目につくのを、引剝す。それから其處へ、僕が其の時から持傳へて、雨に濡れ、霧に濡れ、雪に埋れ、露に打たれたため、未だ乾かないで、此處に衣兜に藏つてある、矢立の墨で、あの、華嚴の瀑の巖頭の樹を削つて、記し留めた、虚の遺書と同一言、一句も違はないのを認めるんだ。」

「而して？」

村岡は高く松明を捧げて持つた。

「恁うやつて、下を見、……」

あかりを衝と腰に曳いて、炎を倒にして伏せて、

「上を見、」

右の肩へ斜めにかざして、

「左を見、」

左へ取つて、面を向けつつ、

「右を見、凡そ世の人の、あの遺書に對してした所業をづらりと視めるです。然うすると、」

渠は力なげに、炬を垂れて、其の二の腕を片手で壓へた、悄然として、

「或者は僕に同情して泣きました、」

いひかけて得もいはれぬ顏をして、綴ぢつけた絲を切る如く、むく〳〵と唇を震はしながら、大口を開いて、

「或、或者は嘲笑つた！」

と言ふより疾く狂せる如く、磴と大地に手を投げて、土に頭をつけたと見るや、むつくと擡げ、

胸を伸し、諸膝を立てて、樺の木目の惱しげに、面を曝せると相面して、ぢつと目を眠つて、片手拜をした。一切の擧動は、活潑に、迅速に、猛烈に、殆ど人をして一言を發せしめず、身動き、瞬だに得せしめざる一分時の間に演ぜられた。

其まゝ靜に立つて、あとへ身を退き、

「龍さん、或者は懊惱して哲學に殉じた少年を拜んだです。其の遺書に跪いたですな、十字架を禮する如くに、或者は又死んだです。

其の凡ての人を眄して、否、寧ろ睨めまはして、其處で僕は、一聲、

(馬鹿め、)といふ。

惡事の手初め、何うですか。」といつて不二太は放心した體で恍惚して、眞蒼になつたが、靄の中に其面白皙にして、服裝の色藍を帶び、却つて一種犯し難き品威を備へて見えたのであつた。

「殘忍、酷薄、惡逆、無道、鬼畜に齊しいものの爲す事の發端には、立派に價するだらうと思ふ、ねえ。」

お龍は莞爾として、

「ほゝほゝゝ、」

「(馬鹿め、)はゝゝは、」

幽に呵々と谺に響いた、恰も深潭に石を投げたる音して。

途端にものあり、二人の身體戰くよ、地鳴がして、鞍ケ嶽は搖ぐばかり、上なる峰より、ぐわら〳〵と、響きに應じて、番小屋は附木を裂いたやうに、めりゝと崩れて、凡そ牛を轉ばした、黑き影、大なる巖であらう、其まゝ谷底に轟と落ちた。

「龍さん、恐くはない。」

「……」

「瀑の音だ。」

松明を背後へ曳いて、ぢつと透す、前なる谷を黑山になして、蔽ひ累なれる靄の中へ、犇と二人の並んだ姿が、フト、飛んだやうに、朦朧と肩を揃へて映つた。

綠の旗

三十六

「良助、此處だとよ。」

手取川、河畔の工事が大野戰の準備かと疑はるゝばかり、胡麻を撒いた眺望の人數、此處彼處

に、廣く、大く、流から礫原へかけて、鞍ケ嶽を近く背後に、白山を遙に横に、開展して行はる、一幅の活圖畫を、一眸の裡に納めて、小高い堤防の上に建設けた天幕の前で、振向いて呼びかけたは、お龍を乘せた山駕籠の先棒で、要藏といふ口數の少い方、其處から早や小腰を屈めて居る。

良助も揉手をして、うろ〳〵しながら急いで來て、

「おゝ、然うか。」

兩人一所になると、要藏が小さな聲、

「一生懸命にお願ひ申すだ。」

「おい、承知々々〳〵。」

時に渠等を導いたらしい、一人の工夫、棧敷を覗くといふ見得で、鼠色の天幕から今日は暑いくらゐ午後一時頃の光線の中へ、目にやけた顏を出して、炫いか眉を顰め、

「おう、此方へ入んねえ。」

駕籠舁ども口を揃へて、丁寧に、

「はい、はい。」

「何だぜ、恁うお前達、用が濟んだら、さツさと歸んねえよ、お頭ア愚圖〳〵長話はお嫌えだ。」

といひ〳〵、つツと出て、擦違ひに見向きもしないで、土手の石原を眞二つに下りて行く。

「若い衆さん、難有うござります。」と弓形に聲を送つて、

「さあ、お主。」

要藏が先へ立つて、畏々、身體一ツだけすぽりと入る、三角の暗い口を、良助は後について、二人とも山賊の構へた巖窖へ入る心地。

先づ見る、左右に妍き婦人、一人は銚子を取り、一人は齊眉き、背後に一人、玉子の肱で、肩を揉む、大王五段襲の蓐の上に、熊の皮の敷物かけて、高胡坐、大杯の波に虎髭を泳がせて、三方犧牲の婦人どもに、涎を垂るゝこと土蜘蛛の絲の如く、前に控へた俎に片足は猪か、馬か、人間か、音に鬼と聞いた工夫のお頭。水所だけに河童に似た酒顚童子と、おつかな、びツくりの良助要藏、思つたとは大相違。

天幕の内は見かけより、胴ぶくれに廣かつたが、小石も草も其まゝに、大形ではあるが粗造な白木の卓子を据ゑて、陽氣のために寛げたか、纔に胸を開いた襟白く、肩を斜に凭掛り、一枚の地圖を展き見つつ、鉛筆を手にして、端然と威儀正しく、唯一人、椅子に控へたのは水上規矩夫であつた。

兩人それと見て、卓子の脚の傍に、焚火のあとが灰になつて白い、土の此方に、肩を附着けて

蹲まる。

「其處へ、お掛けなさい。」

工學士は優しくいつて手で敎へた。

「へい〳〵、何う仕りまして、へい、いえ手前どもは。」

「これが勝手でございます、はい。」

「いや、遠慮は不要よ、私も其の方が勝手だ、さあ、お掛け、」

工學士は再び深切に指示した、椅子は三脚ばかり横縱に亂雜に据ゑられた、なほ卓子の上には、土瓶、茶碗の類が、取散らされてある、其の不規則なのが、却つて一個々々、緊乎と主人に然か命ぜられて、各々嚴格に位置を守りつつあるが如く、秩序正しく整然として見えたのである。

駕籠屋はものいはれて一層逡巡、容易に座に就きさうにないから、

「まあ、宜し。」

と向直つて、

「何か用か。」

良助は顏を上げ、

「へい、飛んだお邪魔をいたしまする。もう、何でございまして、私どもお願ひにあがりました

儀は、他でもございませぬが、なあ、要藏、」

「はい、其の儀につきましてございまして、え、、おい、」

目と目で互にのみこみ合ひ、

「良助、何しろ、あのことから前へ申上げべい。」

「然うよなあ。」

三十七

要藏入交つて恐る〳〵、

「え、、旦那樣、私どもは此の鶴來街道の、田圃の肥料に育ちました、蛆同然な人足でございまして、はい、時勢後れな駕籠舁を渡世にして居りますものでございますが、世の不景氣に連れまして、からツきし稼業がございません。近來まる遊びでございます、其處で棒組と相談いたしますには、なう、良助、」

「全く棒組の申す通りでございます。」

「何とか一ツ命の綱にありつくべいと、低い鼻を突合せたでございます。承りますれば、御支配の仕事の方で、ものに寄つちや人を使つて下さるといふことでございますで、恁うやつて、出頭

を揃へて、お願ひに上りましたでございますが、」
とはあ〳〵いつて息をはずまし、
「恁う、お前、かはつて申上げねえ。」
良助夢中になつて土を掴み、
「就きましては、私ども、山奥の案山子でございまして、何のお役にも立ちましねえでございますが、御覽下さりまし、足腰は達者、折ぺしよりましても棒杭の代に使へませうかでございます。棒組とても相當に小力はございますで、どんな事なり、骨は惜みませぬで、旦那様、一ッ助けると思はつしやりまして、二人をおつかひ下さる譯には參りませぬか、お願ひでございます。」
「お願ひでございます、」と續けざまに頭を下げる。
腰を据ゑ、目を睜り、息を詰めた一揆の劍幕、そも如何なる大事と、氣を凝らして聞き取つた、水上規矩夫、餘の事に微笑して、
「何か、お前達が日傭に雇はれたいと恁ういふのか。」
「はい、就きまして、……」と要藏一膝乘り出す、良助は拳を握る。
工學士は何事も思はぬ狀で、
「そりや違つたよ、人夫の出入は私には解らんね。」

「其處を、もし、何うぞ旦那様のお力を持ちまして、」
と身悶してあせつて、縋るにつけ、工學士は意味もなく打笑ひ、
「おい〳〵、些だつて私の力は要らんのだといふに。お前達は賴む人を間違へて居る。そんな事なら屋島といふのに聞くと可いんだ。幾干でも人夫は要る、潛水夫などこそ、選んで雇つて來てあるけれども、仕事師だ、土方だといふものは、行くさき〳〵で間に合せるんだから、未だ此處をはじめて十日にならん、却つて此方から賴みたくッて居るかも知れんぜ、多分然うだらう、疾く尋ねて聞くが可い、屋島といふ男だ。」
「へい、屋島様、何うだ、良助、」
「然うよの、」と何か腑に落ちない體で、もぢ〳〵。
「名は藤五郎といふのだ、其處らに働いて居る工夫だちの、誰に聞いても分るよ。」
「でござりますが、旦那様、唯今、此方へ參りますにも、彼處此處まご〳〵いたしまして、方々で小酷く叱られて、いや、もう這々の體でございました。」
「宛然八陣へ入りましたやうでございます。はい、ぶッつかりますと最後、天窓がぐわんと鳴つて、目から火の出るやうに劍呑を喰ひますんで、此の通、……不躾ながら大汗でございました。」
工學士はガタリと椅子をずらして、卓子の上の早附木を取つた、卷煙草に燧と吸ひつけると頷

くと一所に、
「亂暴な奴等だ、そりや氣の毒だつたな、屋島は何だ、聞かないでも、其處等見て歩行くと、長靴を穿いた、年配四十二三の、極人柄の溫良のが其だ。たしか他に、長靴を穿いたのは居ないから、もし知れなかつたら、屋島といふより長靴の大將と尋ねるが可い。」
「はい、はい、それから其のお給金でございますが、」
「いや、なほ其の男でないと分らない。」
工學士は煙草を差置き、二人が煮切らない樣子を視めて、
「そんなに小突かれたか、ぢや此處へ呼んで遣らう。」
良助慌しく、
「旦那樣、一寸。」

三十八

「お給金と申しました處で、金高を兎や角申すではございません、おい、要藏然うだらう。」
「然うだともよ、棒組も申上げます通り、決してお錢のことではないのでございまして、お願と申しますのは、實は私ども無給金で、はい、無錢で使つて頂きたいのでございます。」

「無給金？」
と工學士は其意を得ない面色で身を開いて、卓子に肱をついた。より委く靜に聞かん哉の姿である。良助此處ぞと取入つて、
「唯もう焚出しのお餘りでも拾はして頂きますれば、それで難有がりまして、二人とも生命を差出して働きまする。」
「人を使ふに給金なしといふ法はない、又無錢で仕事をする奴があるものか、勞働には相當の報酬がなくちやならん。私はじめ皆手當を取つて動いて居るのだ。お前達は見受けた處、何だか大層な意氣込だな。生命がけで働く、働くは結構だが、此の工事の手傳ひをするのに、何も生命がけといふ危險な場合はないよ、それにしても非常に思ひ詰めて居る樣子ぢやないか、何うしたのだ。」
「えゝ、其處でございます、旦那樣に生命を差上げました氣で、無給金で働きまするかはりに、折入つて、實は其のお願ひがあるのでございまして、」
「條件づきだな、多分私には分らない事だらうが、まあ、可し、聞けなら聞いて見よう。何だ。」
「はッ、」
頭を下げて、

「さあ、要藏、」
「まあ、お前から、」
しばらく讓り合つて、良助が額を拭き、
「もし其の、お腹立では恐入りまするが、實は其の、つい此の四五日前に、駕籠を一挺雇はれまして、鶴來から鞍ケ嶽まで棒組と二人で、客人をお送り申してござります。
綺麗なお少い方でござりまして、はい、其のお方は、鞍ケ嶽へ、御亭主を捜しにお上りなさりましたので、お十八九、二十ぐらゐなお嬢様が、何でも東京の御人だと申しまする、はる〳〵おいでなさりました、御存じでもござりませうが、鞍ケ嶽は、なか〳〵頂上まで駕籠は舁けません。
山の中途からは日が暮れまして、あとはたゞ松明で御案内申上げて、七ツ谺の番小屋までお送り申したのでござります。何と、旦那様、其處に籠つて、半死半生の體で寢て居なすつた書生さん風の方が、許嫁ででもござりませうか、お嬢様がお尋ねなさる御當人で、皆で御介抱申したあとで、かれこれしら〳〵夜の明方に私どもはお暇を頂いて歸つたでござります。
それから、盗むものはなし、森の中に置放しにして參りました、駕籠のある處まで下りまして、空を舁きながら、なあ、棒組。」
「然やうでござります、何日といふ糧があるではなし、嬢様もまた、どんなことをしても書生さ

んを勸めて、山を下りるといはしつたつけ。就いて氣がかりなのは、丁ど早や麓の邊まで、のたくり込んで來た毒蛇。」
「いや、はや、鬼一口の御連中。えゝ、旦那様、腹をお立てなさりませんで、まあ、お聞き下さいまし。
麓で舌なめずりをして居る處へ、上からあのお嬢様ぢや、何の事はない、棚から牡丹餅……は譬にならぬ。川上から芍藥か、天から菊の露か、松の梢に藤の花といふお美しいのだに因つて、一堪りもありやしまい、拐り取つて蹂躙られて、影も形もないやうな目にお逢ひなされう。
路なら五六里、半日と一晩お附き申したばかりぢやけれど、おいとしくつて、おいとしくつて居ても立つても堪りませぬ、などといひ〳〵里へおりまするとも、もう其處等一面に、鱗が立つて、むく〳〵隙間もない工夫だち。
こりやならぬ、いよ〳〵ぢやと、駈け拔けて、鶴來へ戻りにや戻りましたけれども、久しぶりで、頂いた多分の賃錢で、辻堂の前で德利を中に置きましても、棒組とも〴〵一滴も、へい、咽喉へ通ることではござりませぬ。あゝ、此處で、駕籠屋さんと、優しい聲で雇つて下すつたと思ひますにつけても、もう、旦那様、へい〳〵。」

三十九

「お互に親はなし、女房兒はござりませず、一番身體を投に出して、一六勝負にお孃樣を助けて試べいと、德利を絞つて、相談を極めました。

なれども對手は鬼千疋ぢや、此方人づれが一人や二人、賽の目になつた處で、迚も力づくで行くことではない、兎も角もこりや近間へ行つて樣子を見る事にしますべいと、旦那樣。

焚火を搔消して、辻堂の狐格子に德利をぶら提げて置いて、二人で又鶴來街道をぶら〳〵遣つて來たでござります。

傾斜地藏の邊には、別段何事もござりませぬが、三宮村へかゝりますと、田も畦も沸返るやうな騷ぎで、何と、昨夜の事ぢやさうにござりますが。親不孝と、お洒落と、束髮と、高慢と、肥滿つたのと、塗りますのと、六ケ敷い字が讀めるのとで、評判な、お貞子といふのが、隨分飽くまでな目に逢はされましたといふことで。」と、良助はベソを搔くやうな苦笑ひ。要藏も汗を流して、

「えゝ、お手廻の疾い事で、へゝゝゝゝ。」とやたらに額を拭ふ。

工學士は合點ゆかず、

「其の女が何うかしたか。」と卷煙草の吸さしをポタリと棄てた。

其の火と一所に、良助消えも入りたき狀して、

「へゝゝゝ、御串戲おつしやりまし、何うした處ではござりませぬ。其の娘は豫て村の學校の教師野郎と、巫山戲た眞似をして、ペラ〳〵と唐人言葉で親達に口答へなんかするのぢやさうにござりますが、昨夜日が暮れて間もなくぢやと申しまする。

其のもし學校の教師が呼ぶやうに、お貞とか何とかいつて、裏口から呼出しをかけたものがござりましたさうな、そは〳〵立ちますで、親たちが、時節がらぢやと申して留めますのを、例のペラ〳〵で刎ねつけて、駒下駄を穿いて、瓢箪棚を潛つて、出ましたが最後之助、其の駒下駄がポンと宙返、唐突に引擔がれたでござりませう。

キヤアもスウもあらばこそ、天狗に攫はれたも同樣で、足が二本、ぶらりと行くのを見たばかり。

親達が顚倒り、やあ、誰も來い、彼も出い、と近所隣を狩催して、提灯で畦道を八方へ駈けましたが、彼處にも十人、此處にも五人、碁盤の地を取つたやうに、工夫だちが、多い事。屯々の篝火で、提灯は光なく、すご〳〵引返しますと、入口の橋に並べて、此間お方だちが、其を渡つてお通りなされましたさうな、榎が溪川の上へ伐倒してござります。其の眞中へ何と、阿魔ッ子

を素裸にして横倒。

何處でどやしつけたか、身體だけ持つて來て打棄つたのでございます、ものの十四五人、ずらずらと兩岸に樹の影のやうに突立つて、白いは面ばかりぢやなどとハヤ。

憎まれものでも村の人間、餘の事に取つて懸らうとすると、中にぬツくり、大鉞の刃のギラギラするのを引背負つて立つたのが一人、目を光らして、四邊をぎよろ〳〵と見てござるで、誰も手出しがなりませぬ。

鉞をどツしり肩にかけたのが、ドス聲で、

（女郎、口惜くば一思ひだ、目を瞑つて、身體を動かしせえすりや死ねる、川へ落ちて死んぢまへ！　然うすりや野郎が一疋、下手人になつて行る、何うだ）といひましたつけえ、これを聞くと尙の事、阿魔は榎に抱きついたさうでございます。

（さあ、歸れ）と其まゝどや〳〵と引揚げました、遠くまで跫音を聞きながら、手出しもならず、やう〳〵這寄つた娘を抱へて、皆お念佛を唱へて歸りましたわ、內へ寢かすと大病人。

訴へるとか何とかいうて、敎師殿は今朝疾く村を出たさうにございます、いやもう寄ると觸ると其の風說、村は軒並にがた〳〵がた〳〵、地震のやうに震へて居ります。枕を流に打たつしやる大鉞の響を聞いたら、山鳴ほどに恐がりませう。

そりやこそ推量に違はぬぞ、先づはや村の澤庵で、朝飯は我慢なされた、これから若鮎で一杯などと、待ちかまへてござる處へ、あのお孃樣がつかまつたら何となると、途中から旦那樣、胸がどき〳〵躍りました。」

工學士は半ば眼を閉ぢて、默然として聞いて居た。

四十

「へい、唯今良助が申す通りでござりまして、親不孝の淫奔ものには、却つて小氣味の可いくらゐな成され方でござりますが、是が何も神佛のお心といふではござりませず、小癪な奴ばかりを撰取つてお遊びなさります手加減ではござりませんに因つて、此方人等が孃樣は、こんな山家に、何處へも隱れ場處のないほど、美しいだけに案じられます。

處で、棒組と談合を極めました、二人が生命は突出しますで、どうぞ、其のお孃樣を無事にお通し下さりますやう、へい、覺悟を極めて上りましたから、いふまいこともあけすけに申上げまして、ございます。御機嫌に逆ひましたら、私どもを如何やうにも御成敗なさりまし、何うだ、棒組。」と目を据ゑて一心不亂。

「賴まれてする事ではござりませぬで、退れとおつしやつても動きませぬ。」と要藏も胴を据ゑる。

學士は靜に聞き果てた。寂しく輝く眼鏡の下に、伏目に打案ずること良少時。
默つて早附木の箱を取つて、しツくりと細い洋服の腕を差し向け、衝と良助に手渡して、
「まあ、一服喫め。」
「お手づから、お手づから、これは、」と頂く。
爾時極めて沈着に、
「然うか。」
此方は喫みかけた煙草を差置き、
「御意でござります、へい。」
「而して、お前達は何か、其の事を私に賴めば、何うにも出來ると思つて來たか。」
「はい、お頭に願ひまして、旦那樣が、應と引受けてさへ下さりますれば、お聲がかりで、何とでも成ります事と存じます。」
「然うか、婦人を捕へて、亂暴をするのは、私が爲せるとでも思つて居るか。」と冷かなものいひであつた。
要藏言忙しく、
「滅相な、決して然やうな不都合なことは考へては居りませんが、えゝ、良助。」

「お頭樣が鶴の一聲で、孃樣は助らつしやらうと心得てでござります。控へろ、鎭まれ、旦那樣のお心通りになりますのでござりませう。」
「當所で出丸の天狗樣が、暴れてしやうのござりません時は、奥の院へ參つて願ふでござります、然ういたしますとお頭が取締つて下さりますので。」
「其處で私を目指したんだ、お前達が既に然う考へるやうでは、亂暴をされた人たちも、私が發頭人だと思違ひをしようも知れんな、誤つて警官なども私に心づけて居るかも分らん、何といつた、要藏か。良助か、」
「へい、へい、」
「いや、折角だが、お前達は見損つて來たよ。これは、巡査の前でも、警部の前でも、又村一統の前でも、尋ねらるれば判然といふが、私は工夫の取締ぢやない。唯づッと、これ此の加賀の國の圖の中へ、良い工合に、併行した赤い線を二條通すだけの役目だ、工夫が何をしようが、彼をしようが、些も預らん、もし、皆が、婦人を汚すために線路が狂ふか、火を放けるために、隧道が塞がるやうな事があれば、屹と戒める、必ず處分する、自分の權利の屆かぬ處は、然るべき筋へ願つて出て取締る。けれども、一寸づゝ、五分づゝ、私の思ふやうに、じり〳〵と、此の線が延びて、あとに故障がない以上は、蔭で何を爲ようと構はない、又多人數の事だ、構つたつて爲

やうがない、可いかね。

但私の目の前で、見て居る處で、婦人を榎の上へ横へるやうな事をすれば、人情として默つて居らない、屹と留める、留めるが、……素々私は工夫の頭でも、親分でもないのだ。土方なり、仕事師なり、大工、左官、其の他、すべての人足と同然、爲る事は違ふが、同一給金取だ、いふ事を肯かんければ、默つて其場を去るの他、爲やうがない。だから、今お前たちの言つて來た事は、すぐに警察、警官に訴ふるより別にやり方はあるまいと思ふ。しかし折角來たものだ、其の男とても巡査のするやうな眞似はしまいが、兎も角、人夫の頭をして、給金の出入、萬端世話をして居るから、私よりは相談甲斐があるかも知れん。今此處へ呼んで遣らう、前刻いつた屋島藤五郎といふ男だ。」

といひかけた、傍に屋根を通した、青竹の柱に房々と虹を絡めた切の中の、色の綠なるを、輕く引くと、さらさらと音がして、高く蒼空の竹の尖へ、一流の同一綠の旗。

戸外から見ると其の美しさ、工學士が天幕の屋根には、孔雀の翼、暗號の色々、綠は屋島を呼ぶのであつた。

手取川

四十一

「見たか、」

「見た〳〵、見た段か。」

「見たとも。」

「何だ、」

「雲だらう。」

鳥の巣も、蜘蛛の巣も構はず打込んだ、河原の篝の怪しい火影に、五六の黑影、澪標の化けて出た形で、いづれも齊く、夜半の空の雲を仰いで、忙しく口々にいふのであつた。

「雲だらうぢやねえやい、雲だな、」

「何、雲に乘つてるんだ。」

此處に陰氣な沈んだ言語が、喧嘩の將に起らんとする時、各自が、激して意中を呟く、口叱言のやうに罵しり交はさるゝにつれて、見渡す限り、彼方、此方に、十人、八人、五人づゝ、近きは、其の股、腋の下、胸から、頤の下へ赤く淡く焚火を包んで、工夫を描いた影燈籠。又たゞ闇夜に龜の子の群れる趣して、時々人よりも大いなる、火花が爛と見え爛と消ゆる、遠き方の群集

に至るまで、彼是同時に氣色立つて、譬へば目覺しき花火の後、不知火のつくし潟、月待つ二十六夜の風情に似て、何處ともなく、ざわ〳〵と、短き草に一陣風が渡ると、船を見よ、船にも人の、棹さゝずして行む影あり。

「それにしても何だらう、」

「然うよな、雲にしちや些と判然とし過るぢやねえか。」

「眞個だ、雲を摑むやうなもんぢやねえ。」

「然も二人だぜ、男と女の並んだ姿だ、尋常事でなささうだい。」

「狸かな、」

「いんや、神樣だ、空中を飛行する、男女二柱の神だ。」

「高慢な知つたかぶりをしやあがら、山伏め、」と交返すものがある。

一人陰氣な聲を發し、

「俺ア、地震だと思ふ。」

「戰爭があるのかも知れねえや、」

「海嘯ぢやねえかな。」

「何しろ、不思議だぜ。」

「不思議だ。」

しばらく寂寞となつた、手取の河原の光景は、時々刻々に、層一層陰慘なものになつた。礫原の石の山は處々に鋭き三角形に積上げられ、雄大なる萬力は、一ならず二ならず、機械の鐵に灰色の光を帶びて、一度、篝が移つたら、其まゝ立處に炎をまはして、地平の盡くる處まで、ぐるぐる駈け出しさうな氣勢である。

平地に深く、未だ嘗て此の邊には見當らない、恐しき穴は穿たれたり、水なき處に縱横に流が出來て、逆流してちよろ〳〵と、耳に就いた河音の他に新しい響が傳はる。太い鎖は、十町、或は五町のあひだ、遮るもののない眇たる凹凸の石の間を潛つて、八重十文字に線を交へ、工夫と工夫と工夫等の間に斷續し、八方に奔つて、末は河に入り、果は又雲に連なるなど、恰も世界のはじめ、天帝が描いたる、設計の、圖取をこゝに見る如く、或は地球の滅びんとする時や、日月暗澹として最後の幕を引く處を、纔に支へた一落數千仞の谷の底なる小都會に、決死の人種が、火と水と土と木を敵になし、防ぎ戰ふにも似るのである。時に此の單の輪に、焚火を取卷いた工夫等の背後に、兩人、繼子のやうに蹲つて、凍りついた形で、火にも當らず、畏つて居るのがある。

「え、」

「おい、」
「そツくりぢやねえかよ。」
「殊に女の方なんざ、お嬢様其のまゝだ。」
「然う思つて見た日にや、恁う、銀杏近まで肖て居るぜ。」
ひそめき語るは良助、要藏。

四十二

「誰でえ、誰でえ、河童に魅込まれたといふ風で、其處に蹲んでるなア、」
「へい、今晩は、」と要藏ぼやけた聲。
「見や、今晩だとよ、」
「雪隱で出會したやうな挨拶をしやがる、はゝゝはゝ、」と高らかに笑ふ者あり。
「新入ぢやねえか、新入だな、手前達ア、」
「御免なさりまし、へい、つい今日から御厄介になりました、新入めにござります。」
「出やな、出やな、何も然うびくつくこたアねえ。」
「おゝ、長靴の大將からお言葉のあつた奴等だ、此方へ寄んな。」

又一人、
「然して手前達ア土地ッ兒だつていふぢやねえか。」
「へい、田舍ものでござります。」
「馬だ、馬だと來やあがら、鈍間が人込へ出やしめえし。」
「さあ、當れよ。」
「待ちねえ、土地ッ兒なら丁ど幸えだ、一ッ聞いて見ようぢやねえか。」
「可からう。」
「時におい、お前たちも今のを見たらうな。」
「何でござります、雲に乘つたお姿でござりますか。」と良助腰を伸し顏を突出す、櫓で踏張つた形なり。
「むゝ、然うよ。恁う此處等ぢや、傳說因緣のあることかの、五月の幾日から何日までは、此の大河の上へ、雲の人像が拜まれるとか何とかいふ、」
「然も女體と、男體だぜ、えゝ、新入。」
「眞個でござります、いえ、おなかま中で、豪い風說でござりますで、私どもも寐ないで居りまして、刻限といふに、唯今御一所に拜みましたが、いやもし、呆氣に取られて了ひました。つひ

ぞ小兒の内から祖父祖母に聞いたこともござりませぬ。なあ、要藏。」
「然れば、生れてはじめてでござります。」
「だからよ、私がいふんぢやねえか、恁うやつて河も山も突崩すもんだから、澤山は跫音を聞いた事のねえ、此處等の、何かの、ソレ主などといふものが、何處かへ引越をするんだとよ。」
時に別に、鋭き舌をひらめかして、
「それにしちや雲の姿といふのが、當世だぜ。おい、月夜に裏町を拔ける、いゝ中の、並んだ影法師といふ形だ。土地の主といふならばよ、女は撞木を持ちの緋の袴だ、野郎の方は烏帽子を被て、御幣を擔がねえぢや納まらないぢやねえか。それとも四天で百日鬘か、長刀をついて瀧夜叉といふ處だ。それに何と、突然アノ上へ雨雲で相合傘が覆つて見ねえ、すぐに稲妻で、いろ〳〵いろ〳〵、と拜まれ給ふなア餘り還俗を爲た魔物ぢやねえか。」
「勿體ないことをおつしやりまし、眞個に恐しい魔所でござります。」
「はゝゝ、馬鹿をいへ、魔物結構だ。恁う、神佛こそ拜まねえが、魔物があらはれりやすぐに其の乾兒になる、揃つてお頭と奉らあ。待構へて居るんだぜ。魔物は氣を引くといふからな、おらつちが心は先方様が御存じだ、可愛がつて下さるぜ。力松か——トそれ、もゝんがあといふ聲で召しますだ。

はツといつておともをして、ねえ、おい、黑雲に乘つて暴れて出る、さしづめ、おれなんざ、柄杓のやうな刀を提げたり、烏賊の甲のやうな槍を背負つて、一ツ目小僧で駈け出す役だ。どうかまあ、三晩續けて見る、あの雲が、魔物でくれろと祈つてるんだい。」
と大氣焰を吐けるものは、かゝる中にも立てらるゝ、小さな身體の大兄哥、一番槍の力松であつた。
「小頭、えゝ、其につきまして、私ども些と心あたり、と申しますのは、あの通りのお二方を鞍ケ嶽で、」といはうとする、良助の袂を暗がりから、ソツと引いて、ぐいと留める。
良助、はツと思ひ、
「鞍ケ嶽が、矢張其の、あのもし、へゝゝゝ。」

四十三

「何を、鞍ケ嶽が何うしたと？」
力松は焚火の中へ、煙管を突込んで聞き返した。
「それが其の何でござりまして、飛だ恐しい處なんでござりまして、」
「何をいつてやあがる、世間の奴等が恐怖がるものが、賴母しいんだといつてるぢやねえか、悪

く威かすない、いや、威かすなぢやねえ、えゝ、小焦つてえ、恐しくはねえのだから、威かすなぢやねえや、氣を拔きやがるなだ、然うだ。眞個によ、おらツちや、何だぜ、もしか、天狗にでも魔物にでも、あゝいふのがあつて見や、荒神樣にして拜むぜ。なあ、おい。」と四邊を眴し、兩手で顏を伏せて洗ふやうに擦つたが、

「あゝ、詰らねえ、今夜あたりや、あの雲が舞下つて、二柱が磧へ下りてよ、見參！とか何とかついてくれるだらうと、樂みにして居たのに、山の頂上から、ふうはりと出て、天窓の上を通り越して、背中へ消えるなんざ怨めしいや。

聞きねえ、お互に何だ、仕事の方は、お頭もあり、大將もあるけれど、內職の方には棟梁がねえからな。」

「どツちが內職だか知れたものかい。へゝゝゝ。」

といやな音で笑つたのがある。

「本職なら尙の事だ、よく婦人を滅茶にした、よく打壞を行つたなんて、賞められて見たが可い、どんなに嬉しいか、張合があるか知れねえぜ。猫が鼠を捕ればツても、主人の前へ持つて出ら、ソレ首實檢といふ奴だ。

拾吉兄哥なんぞも、然ういつてら、大巖を打缺いたり、奈落へ枕を打込んだり、山の胴中を抉

るぐらるで、よく爲たといはれたつて、癇癪が納まらねえとよ。何でも、善男、善女の目にや、阿彌陀樣が見えるといふから、おらツちがお目にかゝられるのは、惡魔か、外道だ、それが拜めると來たんだから、雲の形は、あゝ見えても惡魔外道だ、口を開いて一言いやあ、殺せ！燒け！だらうツて喜んで居るのにな。失せ給ふなア薄情ぢやねえか。えゝ、恁う、土地兒の新米、お前達、鞍ケ嶽でも、お馬のドーでも、魔物に知己があるなら、拜みの後生だ、引合して貰えてえ。べらぼうめ、魔物處か、刃物にせえ逢つた事のなささうな徒だぜ。」

と足をずツと踏伸ばして、力松天を仰ぎ、

「やい、吝な處を面桶で伏せようか。」

案外な風向きに、良助屹と思案して、

「小頭、もし、實は私ども、只今申しましした鞍ケ嶽で、あの雲にそツくりといふ、お二方を見ましてござります。」

「餘り不思議でござりますで、眞個にはなさるまいと存じて控へたでござりますが、」

と要藏も氣を持たせて、口を添へる。

力松シヤツキリとなり、

「正物を見たか、お前達ア、」

「知つてるか。何だ、」
「何様だ、」
「誰明神だ、」
各自、指が動くやうに動搖む中から、一人、中腰になつて、頰冠の奥に目をきよろ〳〵、
「見ねえ、やー一寸見ねえ、噂をすれば影がさすだ。」
「え、影ぢやねえ、眞物だ。」
「どれ、むゝ、いかさま、御出現。」
「女の方だ、」
「女體々々、」
「辨天様が御降臨。」
「あれ〳〵、あれ、美しい。」
「天降り、天降り、」とふは〳〵と踊つた奴は、腰に穿替の草鞋を帶びたり。
たど〳〵と來て其あはひ、三間ばかりにして立停まつた、媚しい聲細く、
「もし、些とお尋ね申します。」
驚破と駕籠舁ども胸ドツキリ。

力松聲を密めて、
「一件か。」
「はて、」
要藏ぢつと透して、
「違ふの。」
「まるで別だ。」
と聞くと、靜まつて様子を視めた工夫ども這個！　獲物こそござんなれと、一時にわや〳〵が
や〳〵。

四十四

「此方へ來ねえ、此方へ來ねえ。」
早や二三人ばら〳〵と立懸つて、
「さあ、寄んねえ。」
「ずツと來なよ、遠慮をするない。」
「其處ぢや話が屆かねえや。」

「はい、はい、」とおど〳〵しながら、右も左も取巻かれ、擴がつた人輪の中へ、突飛ばされた嵐の色鳥、寠れた翼を窘めながら、蹌踉き出でて倒れかゝる、片膝をついて手を下げて、焚火に顏を赧らめたが、たぐりよりや最愛よの、細布の十六七、砧に畫く娘である。右の方から摺寄つて、

「姉さん、何を聞く。」

「あの、尋ねます人が、」と息の下で幽な聲。

「何だ、尋ねる人だ、生きてる人か、死んだ人か。」と左手から覗いていつた。

「えゝ、」

と吃驚、顏を上げる、前髪が頰にこぼれた、頸許の清らかさ、月の影が宿りさう。

惡工夫等は目を見合せて、北叟笑むあり、手を拍つあり、舌舐ずりをしたのもある。

ニヤ〳〵と笑ひかけて、

「姉や、恁う、お前の尋ねる人といふのは、頓死をしたのか、首縊か、身を投げたのかと聞くんだよ。」

「おゝ、お父さんは、何うかしたのでございますかい。」と最う涙ぐんで娘はわな〳〵。

「はゝゝはゝ、泣くな、泣くな、今ツから泣いちや爲樣がねえ。笑つてくれ、莞爾笑へ。誰も死にやしねえんだがな。お前のやうな美しいのに尋ねられる奴が、此處らに活きて交つてる理窟は

ねえが、何てえんだ、これさ、何て名だよ。」

「甚平と申します。」

「甚平だ。甚平は佐倉の渡場でなくつちや居ねえぜ、お前の父樣か。」

「はい、あの、お城下の何でございます、巨山樣のお救小屋に居ましたのでございますけれど、其處が厭だからツて駈出して、お夥間へ入りました筈なのでございます。」

力松が口を入れて、

「おい、昨日あたりも二三人、新入があつたぢやねえか、搜してやれ。」

「然してお前は何て名だ。」

「……」

「何て名だツといふんだよ。」

「露でございます。」

「露か！　ほウ、」といつて、今までたしなんで居た平手で、眞綿のやうな片頰をベツたり。

「あれ、」

「堪らねえ、よしこのの言句にある名だ。」

「一番面桶で伏せるかな。」

「あゝれ、」
「待ちねえ〳〵、夥間の奴の、娘だつていふぢやねえか。」と力松は掉動かして煙管で留めた。
「嘘の皮、から嘘でさ、兄哥。誰がこんな代物を持つてながら、救小屋へ入つたり、此方人が夥間に成つたりする奴があるもんですか、千兩箱だ。」
「屹と親兄に損をさして、色男の後を追つて遁げるんだね。地獄の門番に先方から聲を掛けたなア勸進帳を讀んだんでさ。」
「うむ、それも然うか。」
「〆この、〆この、やあ、ぢたばたするな、こン畜生。」
「まあ、あれ、あれ、あれえ。」とばかりに、亂髪を小石に敷き、眉を開いて當所なく、助を求む る目も上づり、唇の色眞蒼に、崩るゝ衣紋の乳を隠して、丁と合はせた兩の掌、白き槿の花に似て、露といふ名ぞあはれなる。
力松は苦い顏、
「おらあ、そんな痛々しいなア見るのは厭だぜ。」
「だつて、兄哥。猫が鼠をくわえても、首實檢だ。」
「巫山戯やがるな。」

「合點だ。」
哄と笑ひ、黒く集つてずる〳〵と引いて行く。
目前へ朦朧と男女の姿、影が並んでフツと立つた。

四十五

力松足を曲げて焚火を圍み、手許を暗くして、熟と見ながら、
「新入、新入。」
「小、小、小頭。」と良助は向うを指し、佛も鬼に一所になつた四邊のさまに、齒の音も合はず、がた〳〵と胴震。
聲を殺して、
「一件か、」
「え、え、え、」
「一件のお方か。」
「見えました、お出でなさりました。」と要藏、手で手を引張るやうにしたから良助も一所に、兩人づいと立つて、すた〳〵と駈け出したが、お露に集つた一群をづいと拔けて、眞先に進むと、

諸共にハタと膝を折つて、件の立姿の並んだ前に、大地に兩手を支いたのである。

不思議なる光景なれば、一同齊く目をつけた。

「惡黨だとおつしやりまし、魔物だとおつしやりまし、皆が大事にいたします。えゝ、もし鬼で在らつしやいますな、魔で在らつしやいますな、鬼のやうな、魔のやうなお心でござりませうな。」と要藏胸を叩いていふ。

村岡はお龍とソト目を交した。

未だものいはず。

時に一團の炎あり、磧の上にちら〳〵と燃えて、やがて近づくと火花がぱら〳〵、煙はうしろへ、人は前へ、前後して二人ざくり〳〵と來る。

前なる工夫に松明を持たせ、背後に引添うた荒漢、明き片頰火の如く、暗き片頰藍の如く、髪は蓬に(流)の字の破半被、帶にした繩が重量に弛んで、腰に一挺の鉞をさしたが、刃渡二尺俯向けに蒼く、膝の下に輝いて、恰も是阿修羅の隊の飛將軍、月宮に亂入して、其の第三の小王子、三日月を捕へて提げた風情。眼を半眼に、腕を拱き、胸を張つて、素跣足なるものを誰とか爲る。

力松近く呼んで、

「捨吉か。」

松明は衝と高く捧げられた、穴藏に灯したるやう、ものの色は皆陰々として露れた、あはれ忍泣く犧牲の涙の露も、半ば解けた唐縮緬の帶の端も、爪に疵ついた腕の血も。

お龍は赤毛布を絡うて居た。不二太の靴は破れて居た。

けれども一人は端麗に、他は俊秀にして且つ奇峭なるお龍と村岡が相好は、先づ惡工夫等の迷信に適うて、早や其の十中の九を說法し得たことである。

これより前、橘の香こそ通はね、三々五々屯した、彼方からも此方からも、力松の群の、美しい獲物を嗅ぎつけ、我勝に寄つたのが、鱗に鱗をかさねたから、五人ならず十人ならず、無慮二十人は居合せたらう、娘に太くなつて取着いた毒蛇の骸、兩方へ解けて眞中から颯と分れる。

「助けて下さいまし、誰方ぞ、來て、下さいよウ。」

トタンに揃つて動き出して、既に危かつた犧牲に近づいて、今、半ば身を起した、お露を前に二人はしツくりと肩を合せた。

河波の音滔々。

「お孃樣、駕籠屋でござります。」

「もし、駕籠のものでござります。」

「お見忘れなさりましたか。」

「鞍ケ嶽へお送り申しました、」
交々言つて擡げた顔を、左右一目屹と見たが、みだりに語らず、其まゝ口を結んで、頷いたのはお龍であつた。
力松すた〳〵と來て小腰を屈め、
「へい、これは。私ア力てえんで、力松てえんで、へい。」
といつたが、未見の人、不二太が默つて瞻めたので、繼穂なささうに一足退つた。
要藏は又摺寄り、
「お嬢樣、旦那樣、此の力頭をはじめ、首を長うしてお待ち申して居りましたのでござります。貴下力は惡魔、えゝ、もし、なあ、なあ貴下方は惡魔外道で在らつしやりますで、皆の隊長で在らつしやります、惡黨で在らつしやりまするな。」

四十六

「ねえ、兄哥、」
密と力松の半被の裙を曳動かした奴があつた。
「そツくりだね、此間ッからの雲の形に瓜四つだ、孰方が影だか分らねえな。」

力松は恁る珍客の前に、餘り口數を利くを不躾なりと思へる如く、默して頷いたばかりであつたが、松明の火に照された兩個の姿と、唯ぬいと立つて手を拱いたなり未だ一言も發せざる、捨吉の顏とに目も放さず。
裙を曳くものは益々低聲で、
「可いぢやねえか、兄哥、組合の加勢に天降つた一件ものなら、何も遠慮することはなささうなもんだぜ、見て居る前で、一番、其の阿魔を打〻めよう。」
忽ち傍より、
「畜生、旨え處へ氣が附きやあがつた、然うだ、違えねえ〳〵。」
「おいら又、彼の人たちが、おらッちに下すつたお土產だらうと思ふが何うだ、然うでなくつてお前、今時こんな美しい代物が、恐しい此の鰐の口へ自分で飛び込む奴があるものか。
猫の死體から南瓜が生えた話はあるが、お露ッて娘が磧に顯れよう理窟はない、第一品物が好過らあ、緣日ものぢやねえからな、えゝ、力兄哥？」
「默つてろ、」と制して力松は、今更ながら、影向した魔神の男體が、無言で睨み合つた捨吉と、服裝こそ違へ、殆ど見紛ふばかりの顏容に、一層信仰の念を增して、愈々差控へて渠等が爲す處を瞻るのである。

折からむら〳〵と黒き影、映ると見れば人となり、闇に人ありと見れば影さして、工夫は西より、東より、夜の色の動くとともに、足を交へ、肩を組んで、次第々々に數を增して、ぐるりと四邊を取卷いた。

此處に無慮百に餘る工夫等は、後れたるものは先づ、前んじたるものは屢々、いづれも仰いで疑はしき雲を仰ぎ、訝しき姿を視めて、目も口も吐く呼吸さへ、盡く〳〵二人の膚を襲ふのであるから、もし是をして鎖したる一室に於いてあらしめよ、いかに氣丈なればとて、窈窕見るが如き、かよわき女性の、毒氣に觸れて眩いて倒れたであらう、幸に深夜の磧は渺漠として、隨處散點せる異類異形の怪物は、山の雄、河の大なるがために、却つて凩に吹散らされたる木の葉に似て、豫め山中の孤家の、物凄じきを見たる目に、お龍は恐るべき惡工夫等の姿を宿して、然も冷靜なる態度を保ち得たのである。

されば少くとも此の美人の、裙端折りたる褊袢の裙、なほ其の、はら〳〵とあるおぐれ毛をさへ、打搖がし得たものは、僅に鞍ケ嶽を颯と下して、川面を渡る夜嵐あるのみ。

其の夜嵐や、一時、松明の火は高くひらめき上るかと見れば、低く手許に絡んで、振照らしつつある工夫の足許に、媚めかしい犧牲の娘、半ば死してたゞうつとりと夢見るやうな横顏を、露はに白き二の腕に搔垂れて、胸まで縮めたる脛を戰かしたのが、不意に、苦と叫んだ時であつた。

衝と一足出た不二太の前へ、肩を聳してじり〻と寄つたのは捨吉で。

ゆるく組んだ腕を解いて、片手を鉞の帶にかけて、片手でお露を指して、

「お主ア、此の娘を何うするかい。」

「……」

「助けようといふのか。」

色をかへた村岡不二太、思はず振返つてお龍を見た。

お龍はつか〳〵と出て、猶豫はず、娘の手を取つて扶け起すと、一目見て觀世音、ぶる〳〵と震へて犇と縋る、しをらしい兩の肩に、毛布をかけて、身を斜めに、捨吉に立向ひ、婀娜な聲して、

「黃道吉日を相てお殺しなさいな。私が預つて置きますから、」

しばらくして捨吉は、默つて手を下げて、一禮した。

良助と要藏は、重荷を下したやうにへと〳〵と又頭を下げた。

力松ぢたゞらを踏んで、

「やあ、拜め、天からお授けの隊長だ！」

邂逅

四十七

「誰？」

「私、屋島でございます、未だお休みではなかつたのですか。然して夜更にお立出で、はあ、それでは矢張今しがたの雲の姿を、貴下も御覽になりましたか。」

隔はないが慇懃に、恁く工學士にいつたのは、數々噂された屋島藤五郎、卽ち長靴の大將と稱する人物、いかさまにも長靴を穿つて、蒼硝子の小形の瓦斯燈を提げて居る。此の明を手にして、不規則に散ばつた多勢の工夫の間を過つて、此處に工學士の天幕に近づいた姿は、異彩を放つて、星の流るゝが如き光景であつた。

屋島が步調は、極めて正しく、整々堂々として大跨で、一足毎に常に馬の脊を跨ぐに齊しい。此の人は嘗て騎兵の曹長であつた、今も常に身に絡ふのは、古びた記念の軍服で、步行くに靴の音の、大く聞ゆるのも、或は兵營以來の皮を、幾度も修復して重厚になつて居る所爲かも知れぬ。尤も籍を軍隊に置いたのは久しい以前で、後には地方の中學校に體操の教師をした事もあつた。

體操の教師であつたが、算數の術に長けて、字を能くし、讀書の力も深い、のみならず、屋を設くるに圖を引き、木を相して柱を撰ぶ、日の陰晴を豫知して卜筮を嗜み、星の名を知り、衣服の裁方も心得て居れば、風邪ぐらゐは醫し、火酒をつかつて繃帶も遣る、工夫が祝事する時の、たとひ、煮染にしろ、料理の指揮もする、萬藝に通じたもので、殊に驚くべきは、工學士の天幕に、暗號の旗を備へて、竹の柱の切を曳けば、中空に色の顯るゝ仕掛の如きも、此人ものずきの細工なり。

數年前、家についた公債證書、また若干の資產を殘らず投じ、教師も辭して、若い細君を——地方には番臺がない——長火鉢の向うに坐らせて、湯屋を開いた、爾時自ら號を混堂と稱へて、何と風流でせうと、腰折歌、俳諧などを樂んだが、三月と經たず、フト細君が家出をすると、敢て其の行方を尋ねようともしないで、商賣を留めて、自分が却つて金澤の市に姿をかくした、其が恁の如く工夫の中に顯れた次第である。

其處で、略歷は、石川縣士族、騎兵曹長、體操教師、湯屋の主人、細君出奔、工夫の組頭となる。

數も千に餘る工夫の悉皆を取締るのではないけれども、支配下の、給金萬端、賄から、着るものにも心づけ、怪我も治せば、金も貸すので、他に頭を持つ徒のみか、其の長までが歸服して、

長靴の大將軍。

既に團體に名ずるに、風流組を以てしたのも屋島で。

藤五郎は、十四五も上だけれども、年下の工學士に對して、宛然神聖なるものに齊眉く如く、主に事ふるが如くする。

けれども、敬するよりは其の實愛するのであつて、彼の我を招くに綠の旗を以てせしむる如きは、其の徒然を慰むるためにもなれかし、一種の大人びた玩弄器を與へたつもり。

此時此處に來たのは、招かれたためではない、少しく語るべき仔細あつて、もしやと試みに深更の閨に訪ひ寄ると、工學士は未だ寢に就かなかつたばかりでなく、獨り立つて天幕の外に、物思ふ狀して彳んで居たのであつたが、

「屋島君か、風說の通り空を通るのを見たですよ。」

此方の言も丁寧である、水上規矩夫は中學に居た時分、其の體操の科の生徒であつた。然るに先生を稱して先生といはないのは、此の十四五弟の、少年の家に通つて、屋島が又外國語を習つたから。

「貴下は何と御覽でした。」

「私は單に、あんな雲だと思つたです。」

四十八

「屋島君、而して貴下は何と見たのです。」

例の靴の音が一ッ靜に響いた。

「は、私は然うすると、貴下よりは餘計に買ひました、私は彼の雲を、人の影と見たのであります。」

工學士は微笑して、

「成程、其の方がおもしろい、私のやうに、平氣で唯、あんな雲だといつて了へば其ッ切です。いや、實に冷淡でした、人の影ですか、成程。」

「然し、よく貴下、こんなに晩くまでお寢みにならないで、あれを御覽になりましてございますな。矢張、工夫どもの騷ぎが豪いので、つい釣り出されてでございませう。」

「一昨日の夜中からだといひますね、誰が見つけ出したのです。」

「然やう、何とかいひました、何でも船の中で見つけ出したので。然うです、多見次といふものでした。フケスの枕を打ちましたのが、水の流れ工合が惡いから、其處ぢや不可ん、と傍のものがいつたのを、何、こいつを承はりの己が打込んだ、洪水にだつて、びくとも動くのぢやない、

恁うして見せるッて、貴下、强情ぢやありませんか。其の晩、磧には上らないで、野郎、其の自分が打つた川の中の杭に、小船を纜ひつけて大の字形に寢たんださうです。

處が恁ういつた流ですから、船がぐらついて多見の奴、寢心が惡かつたか、寢つかれないで、まじまじやつて居ますと、見ましたな。鞍ケ嶽の頂から、すら〳〵と人の姿が出て、仰向けに寢た空を流について、すつと川下の方へ通つて行くのが、月はありません、今夜の通り、焚捨の篝にぼッと隈取つて見えたさうで、奴は龍宮へ行く夢だらうと思つたといひますが、あまり歷々と見えたもんですから、天窓の上を越した處で、不意にひよいと立つて、見送る拍子に、腰を極め損なつてどんぶりと落ちて、したゝかに陷つたさうで。

ふるへ上つて其の話をすると、さあ、おもしろづくに氣が寄りました、我も我もと昨夜は揃つて、何でも一時から二時の間が刻限だといふので、臥待も居待も立待も一所に見張つて居ると、果して多見次のいふ如しで、それから、今日へかけての騷ぎであります。」

「しかし、多見次か、其の男は危險でしたな。」

「何、貴下、船手の奴ですから水心は十分あります。」

「ですが、もし其の杭が拔けて船が流れたら何處へ行くでせう。」

是は唐突な質問であつた、けれども答ふるに何の仔細はない。

「貴下、終には海でありませうが、しかし幾つにも流が分れて居るのですから。……」

「假にです、かりに誰か、まあ、私とする。私が其の小船に乘つて、水にまかせて、此の川を流れるとすると、何處へ着きませうか、」と深く思入つた語調で、重患の病人が、醫師に其の豫後を聞くやうなものの問ひやう。

天幕の前の姿黑く、工學士が其時の顏を見て、且つ心を讀まうとするには、蒼い火の小さな影は暗かつた。

屋島は返答にフト支へたが、

「地の理はよく御存じで在らつしやいます。此處に工事を起しますに就て、貴下は流の模樣から、手取は其の川床まで、掌に乘せておしらべになつたです、船は最も流の疾い方へ流れ下りはしませんか。」

「けれども、です。」

「けれども、とおつしやるのは？」

「私に聞かるれば、私だつて分りやしません。强ひて尋ねらるれば、貴下のいふ通です。しかし、そりや、あの雲を、唯、あんな雲と、思ふもののいふ處で、貴下は、もつと買つて、人の影だというたではありませんか。

ですから、もつと買つて、まあ、何の方角へ流れませう。」
「あゝ、それでは、それでは先づ、……」
としばらく考へ、
「ひとりでに出來た大な水溜でありますから、船はひとりでに、屹と芙蓉の湖へ落ち込みませうな。」
「芙蓉の湖？」
「獺潟です、巨山の別莊のあります處。」
時に身動きもしない、工學士の態度が、激しく鋭く我を襲つた如く、屋島は何となく感じた。

四十九

「あの別莊には、いつも住んで居るものがあるんですか。」
と工學士は少時して又聞いた。
「主人巨山は一寸々々參るさうでございますな、其夫人は大抵別莊の方だといふ事を申します。」
「其夫人？」
「はあ、巨山夫人、縣の門閥家で、大な製絲場を建てて居る、堅川といふ財産家の令嬢、美樹子

といつて、有名な美人で、才學、淑德兼備した御方であります。」
再び何となく工學士の動かない姿から、一氣逆しつて暗中に屋島の胸を打つ感じがあつた。
故と話頭を轉じた樣子で、
「あゝ、屋島君、多見次が船の中で見つけ出して、風説が事實になつた、今の、貴下は人の影と見たし、私は唯あんな雲と思つた出來事に對して、一般の工夫はどんな考へを持つて居ます、騒ぎといふのは何ですか。」
屋島はこゝで長官に對する時の一禮を施した。
「實は其の事について、一寸伺ひに出ましたわけで。工夫どもは最初から、あれを空でない、形あり生あるものと思つて、多分は通り魔の類だらうと信じて居ました。中には又自分たちのために出現した神、正直の頭でなければ宿らないとしますれば、工夫どもには、神、佛ではありませんな。何しろ靈あるもので、鬼にしろ、魔にしろ、信仰すべき本尊の姿だといふのであつたのですが、果して、彼の形によく似た人物が、しかも男女で、一統の前へ、正に顯れましたのでございます。」
「突然？」
「然やう、雲が消えて間もなかつたさうであります。

其處で工夫どもの、歡喜と尊敬は一方なりませんで。どうぞ、此のあらゆる人夫の、守本尊として置きたいといふ望ですが、貴下のお許がなければ不可ませんから、其の事を、私から一寸お伺ひ申しますので、いかがなものでございませうか。」

「佛者のいふ本尊、工夫仲間の宗教です。詰り大導師といふのでせう、語は違つても。」

「然やうでございます。」

「なるほど、ちら〳〵風説を聞くんですが、工夫どもの亂暴狼藉、極る處がないに就いては、いづれ、然ういふのがなければなりますまい、位牌といふ言さへ知らない奴等も、遂には何か、精神を支配するものが必要になる數です。」

「お差支へはありませんか。」

「仕事の邪魔にさへならなければ、私は一向構はんです。」

「否、其は決して、私が致させません。」と屋島は誓ふが如くいつたのである。

「それなら寧ろ結構です。」

「私も、わきから、われ〳〵を見ますのに、目印があつて可からうと考へまして。」

「私は是を燒點といひます。」

「私は又、工夫どもの惡氣の凝つて形に顯れたものと思ふのであります。」

「同一事です、社會的にいへば代表者、寫眞屋ならば其にピントを合せます。

といつて工學士は呵々と笑つた。

「では工事の御支配は貴下なさいます、精神の指圖は其の人が、いたしませう。然して此の邪氣凝つて神を顯すやうな工夫どもが寄つて造ります。出來上りましたら、鐵道は活きて、靈を保つて、石炭を焚かないで汽車は動きませう、線路は夜も光りませう、實に愉快であります。」

といひかけて、

「えゝ、それから、どうぞ貴下、其の本尊といふのにお逢ひ下さるやうに願ひます。御承諾下さいますれば、直ぐに此方へ參るつもりで、彼に、皆、私の暗號を待つて居ります。」

五十

屋島が軍服の膝に隱れた、蒼い色の瓦斯燈は其の中指にかゝつて、腕長く衝と空に翳された。

是は工學士が面會を許した、報知の光で。

直に薄赤い焚火を擁して、墓石の如くすら〳〵と立つたのが遙に見える汀に近き一群の工夫の中から、一點松明の火が高く燐火の飛ぶやうに相應じた。

空なる雲にも映らんず、陰に籠つた夜更の宙を、件の松明尾を曳く下に、ずら〳〵と仄暗く、

軀十四五、脚を交へて連つて、やがて近くとともに波狀を暗がりに描ける火の、此方の瓦斯の蒼い光と、冷く一ツになつた時、村岡不二太の異樣の姿は、天幕の前に來たのである。

ト目迎へて屹と見た、工學士と、一名の工夫が捧げた松明の明に、互に顏を見合せたが、凝と瞻つて、雙方ぶる〳〵と肩で震へた。

途端に、屋島はポカリと長靴の音を沈めて、胸を斜めに身を開いて、二人の間を一足遠退く。

其の時、瓦斯燈の影が映つたか、寥れ果てた不二太の顏は、兩眼のみ輝き活きて、死せるが如く蒼白かつた。

「幽靈？」と凡そ世に、此の人、恁る場合にあらでは、發し得べからずと思はるゝ、變つた調で呟いて、工學士は眼前に襲ひ至れる、恐しき影を拭ひ消さんと欲するやう、腕を伸べつつ、だらだらとあとへ退る。

「呀！水上。」

と叫んで、幽靈の不二太は、却つて兎の躍るかと、烈しく飛縋つて、水上が差伸べた腕の下を、搔潛ると齊しく、丁と兩の手で工學士の肩を抱へた。

村岡の其の背を、水上も其の腕でしつかと抱いたが、

「むゝ、村岡。」

「……」

「活きて居たか、村岡。」といつた聲は冷靜に復したのである。

村岡は手を拱いて茫然として立つた。

こゝに手を拱いたのは、不二太ばかりではない。同一姿で捨吉が居たのである、力松も居るのである、お龍は携へて來た娘お露の手を放して、面を背けて差控へた。

「村岡、活きて居たか、村岡、き樣死ななかつたか。」

「……」

「死ななかつたな、馬、馬鹿な奴だ、賴母しくない奴だ、羨しくない奴だ。

おい、僕の祕密と、き樣の祕密を、お互に知つて居るのは、世に唯二人ばかりだといふことを覺えて居るか。

覺えちや居らんか。

僕の祕密といふのは、知つて居よう、堅川の娘の事だ、美樹子の事だ、巨山夫人の事だ。」

工學士は溜息を吐いて、

「意中の人の事だ、欺かれた事だ、不叶戀の事だ。

僕が迷つた事だ、迷の覺めない事だ、斷念られない事だ、如何ともし難い事だ、他人の女房の

事だ、人の嫣の事だ、恐るべき事だ、罰せらるべき事だ、誅せらるべき事だ。

が、き様の祕密といふのは、華嚴の瀑の事だ。いや、其の遺書の事だ、其、其處に居るお龍さんの事だ。

き様が、華嚴の瀑で死んだと聞いた、僕は信じたよ、其の死を信じたよ。けれども哲學のために殉ずるといふ、其の遺書は疑つた、何、斷じて信じなかつた、世を欺くと思つた、虛名を賣ると思つた、可い加減なことをと思つた、卑怯な奴だと思つた、未練な奴だと思つた、悟られない人間だと思つた、浮ばれない亡者だなと思つた、馬鹿な奴だと思つた、不埒な怪しからん、途方もない奴だと思つた。

何故なら、僕はお龍さんの事を、其の祕密を知つて居たから……けれども。」

五十一

「けれども敢て疑はなかつた、遺書は嘘にもしろ、死んだのは事實と信じて、僕は羨しかつた、實にあやかりたかつたぞ、村岡。

同一死ぬならば、僕が死ぬのだ、僕が活きちや居らん筈だ。き様の方は、唯女との中を妨げられたといふに過ぎない、其でも死ぬのに。

僕は何うか、思ふ人は既に他に結緣いて了つて居る。村岡、獨身の水上規矩夫が、悶ゆればといつて、泣けばといつて、怨めばといつて、憤ればといつて、巨山夫人美樹子を何うする、萬事休矣、もし活きて堪へられんければ死あるのみだ。

けれども僕は死なんのだ。いや、死に得ないのだ、死ねないから、死んだき様が羨しかつた。あゝ、羨しい、たとひ遺書はいつはりにもしろ、身を投げたのは實である、最期の際に世を欺く、卑怯な見得をした事は、共に齡すべからずであるけれども、一死萬罪を償ふに足る、其も可し、羨しい。

渠は思想界に遊んで哲學を修めた、卽ち想ひを幽冥の間に走せて、戀のために死ぬことが出來た、自分は徒に土方の親方たるべき修業をして、蟻の塔、蜘蛛の網にも及ばない仕事にあくせくするから、死なれないのは情ないと、き様のために、村岡、き様の死のために、少くとも水上一個人專門の術として、此の神聖なるべき工學を恥ぢて、巢を造る蜂の營にも不如とした。

何うだ、水上が設計して、かく夥多の工夫が、經營慘憺、火の中に石を伐り、水の中に油を煮て、加賀、越前の、形を變じて、二條の鐵線を敷くにつけ、日夜叫喚の聲を上げ、朝夕山河を震動した處で、出來上つて、汽車を辷らして見い、黑煙を吹いて、烈風の如く駈けた處が、村岡、き様の學んだ、印度哲學の參考書の一ペイジ、否、其の一行、眼鏡がなくては見えないやうな、

目蓮といふ二文字にさへ及ばないことを知つて、羨しくつて堪らなかつた。
既に今しがたの雲の如き、僕は我が事業の上に於て、單に、あんな形と見たけれども、堅川の女美樹子に對して、迷の晴れない心ぢや、不思議千萬、いつも忘れん、互の祕密を知り合ふまで、世に唯一人の信友だつた、亡き村岡の影であらう、靈であらうと思ふにつけ、嘸、我を憐み、我を嘲つて居るだらうと、悵然として、仰いで、且つ謝し、且つ恥ぢ、君が羨しくつて、羨しくつて、常に自ら押抑へて居る、自殺の望がむら〳〵と起つて居たのだ。」
工學士は次第に言弱く、聲沈んで、愁然として、やがて又爽に、
「然るに村岡、活きて居たな。」と屹と見た。
「……
こゝにあるものは皆默した。
「馬鹿な奴だ、羨しくない奴だ、が、決して死ぬなよ、僕も死なん。」
といひ果てて、フト四邊を、屋島をはじめお龍をはじめ、多人數の其處に彳んだのに心着いて、
――あはれ言ふまじき事をいつた――工學士はものに激して、別に人あるを忘れたのである。巨山夫人美樹子の名は、世に唯一人の信友の他に、口にすべき事ではなかつた。工學士は、思はず悚然と寒氣立つやうに肩を竦め、突立つたる足は其まゝに、忙しく身體を搖つたが、眼鏡の光き

ら〳〵と、然も狼狽へたらしく八方を覗いた、穴あらば消えなんと思ふ、天幕を見るより、衝と向直つて、天窓から被つて隱れようとした。
「水上！」
最う一度、
「水上！」
「何だ。」
不二太はつか〳〵と進み寄つて、
「成敗してくれ、水上、僕を罰してくれ、殺してくれ。
然して、又朋友になつてくれ、水上。」

五十二

「なんだ、成敗、罪を罰しろといふのか、村岡、そりやき樣、人違ひだ。
天ならばき樣を罰する、地ならばき樣を成敗する、人ならばき樣を殺す。しかし水上は天でない、地でない、又人間でもない。」
「人間でない？」

「いかにも人間でない、既に他人の女房になつた婦人を、思ひ切れないやうなものが、人間か。
僕は人らしい人ではない、が鬼でもない。
美樹子はたとひ巨山夫人でも、斟酌しないで、踏込むやうな事を爲し得るなら、そりや、鬼だ。
待て、村岡、天でなく地でなく、人でなくも、鬼ならばき樣を捕へて、罪することが立派に出來る、僕は鬼でもない。
唯水上規矩夫といふ、北陸鐵道の技師だ。」
といつて、冷々然として、半ば、天幕に隱るゝ處を、不二太は兩手に力を籠めて、工學士の左の手首を緊乎と握つて
「水上、君は天でない、地でない、」
靜に、
「然うとも、」
「人でない、鬼でもない。」
「應、」
「君は唯水上工學士だ。」
「土方の親方さ。」

「それでは土方の親方だ。」
「人の女房を戀する馬鹿だ。」
「……馬鹿でも可い、」
「き樣の死を羨んだ、あはれなものだ。」
「あゝ、あはれなものだ。」
「其の水上に何の用がある。」
村岡は戰きながら、
「水上、君は、天でない、地でない、」
「然うとも。」
「人でない、鬼でもない。」
「應、」
「君は唯水上工學士だ。」
「土方の親方さ、」
「それでは土方の親方だ。」
「人の女房を戀する馬鹿だ。」

「……馬鹿でも可い、」
「き様の死を羨んだ、あはれなものだ。」
「あゝ、あはれなものだ。」
「其の水上に何の用がある。」
不二太は蒼くなつて、
「水上、君は、天でない、地でない、」
「然うとも。」
「人でない鬼でもない、」
「應。」
「君は唯水上工學士だ。待ち給へ！君は唯水上工學士だ。けれども僕の朋友だ、村岡は、君の。
と……も……だ……ち……だ。」
といふ〳〵、額は思はず其の兩手で押へた工學士の冷い、カフスに垂れて、
「天でない、地でない、人でない、鬼でない、工學士は、此の朋友を何うするか。」
工學士、
「屋島君、此の方だちの寢床は何うです。」

「は、」と肩を引いて藤五郎はガチヤリと瓦斯燈を下に提げて、
「私が計らひます。」
天に二つの太陽はないけれど、
なぜか一人ぢや寐られない。
船で唄うたものがある、彼處に人影。
聞澄して、捨吉が、
「多見次の奴、」
「何か、いつて居やあがら。」と力松が聲を合せて、顏を見て二人で高笑。

田舍酒

五十三

手取川の流が岐れて、芙蓉の湖へ灌がうとする、川口の一漁村、今入といふのに、船着の堤防を前に見て、小柳亭、誰が附けたか、しをらしい名の一寸とした飲食店がある。
名代の鯉こくを腰障子に、畫で蜆をあしらつたが、描方が大いから蛤かと怪しまるゝ、別看板

蒲燒の、鰌はすぐに取れさうな、軒下の小溝、廂の柳。料理は店蔭で拵へて奥が一間、あとは土間の腰かけで客をして、川魚一式といふのだけれども、海が近いからお望ならばあるでござる。蛸殿の脚も、綠艶かな枝にしだれて、水の垂るほど新しいが、照り梅雨で雨のないため、此の邊でも店前へ水を打つた三時すぎ、俵から直接に掴み出したほど、仰山に、鹽花を盛澄して、亭主兼帶の板前が、澁團扇でパッ〳〵パッ。

白く堆い料理場の七輪の尉を、三ツばかり煽ぐ處へ、門口から旅の客。

「入らつしやいまし、奥が開いて居ります、お上りなさりまし。」

柳を潛つて、づいと入り、腰かけを、ト見たが、ずらりと眴して、

「御免よ、」と日和下駄を脱いで、取着の、其處ばかり。突當を開けッ放した緣の外は青田といふ小座敷に上らうとして懷中から出した切立の手拭で、はた〳〵と足袋の塵埃を拂いて通る。

此の男、久留米の絣の、些とござつた單衣に兵兒帶をしたが、突然平胡坐で壁を背負つた、脚には紺の脚絆がけ、扇子を手にして、荷物は大形中古の提革鞄。

色こそ白いが目つき、口許、擧動、正に腹掛、三尺帶、振分の荷物、道中笠、懷に短刀でなければならぬに、足袋の白いのと、扇子と革鞄と、殊に麥藁の帽は相應はない。

仔細あるべきものなれども、しばらく差置いて勘定の時を待たう。

「お客樣だアよ。」と亭主が聲をかけると、納戸から、前垂と絲屑をつけたまゝ、ちよろりと出て來て手をついて、客の前を通拔けて、土間へ下りて、

「お誂は、」

招きの娘、晝は閑だから絲車でもまはして居たらう、夜になると、若いものが押かける、近邊の女どもも入交りに盛るので。

遠くで機の音がする。

「姐さん、何が出來る。」と扇子を措いて、革鞄の紐をわがねながら聞いた。

「鯉こく、蒲燒、鰌汁でございます、鰡の照燒、鮒のそろばんもございます。」

「鮒のそろばんといふのは何だね。」

「はい、膾にしまして、大根おろしの中へ入れますのでございます。」

「それが鮒の算盤か、まづ勘定の時にしよう。恁う、姐さん、そんなものより、彼處にぶら下つた肴がある、あれを酢で食はして呉んな。それから、鯉こく、まあ、持つて來るさ、蒲燒も可しさ、それから酒だ、二合ばかり、こいつは奮發んでおくれ、極佳いのを賴むぜ、急ぎだよ。」

娘より先へ、亭主が、

「唯々。」

さて、膳が出て飲みはじめると、客は娘に祝儀をした。
「姐さん、些とばかりだ。」
小柳亭、開闢以來の珍事である。
「まあ、お客様、」
「滅相な、」と亭主も滅相な顔をして、板前から立つて來る。
「あゝ、御亭主、つかん事を聞くが、」
聞かれたさうに、
「へい〳〵、へい。」
「此の前に芙蓉の湖といふのがあるッてな。」
「えゝ、ございますとも、つい其處でございます。船では棹の尖が屆くくらゐでございますが、陸を行らつしやると、一里ばかり、それも内端でございます、はい。」
「其處に、何だつけ、別莊があるといふね。」
亭主大な聲で、
「はあ、如來様の御別莊。」

五十四

客人妙な顔をして、
「何だ、寺か。私は財産家の別業のやうに聞いたね。」
「へゝゝゝ、これはお客様、手前が如來様の別莊ぢやと申したのを、お間違へなさりました。いえもし、巨山様といふお方のお邸でございますが、諸人助けを遊ばします、廣大なお方で在らつしやいますに因つて、活如來様々々と申しますのでございまして、へい。何でございますか、お客様は、其へお越しなさりますか。」
「實は行きたいと思ふんだ。」と一口干して猪口を取つてツイとさし、
「一ッ何うだね、」
「私に、へい、これは。」と亭主、田舍人の人珍らしげに、座敷の隅へ土間に居て腰をかける。
「姐さん、酌をしてお上げ。時にどうだらう、知らない者が行つちや不可からうか。」
「はッはッ、」といつたがぐいと遣つた處、急に聞かれたので咽喉に支へ、掌で口を壓へて咽る。
娘が赤い顔をして、横目で客を見ながら、
「お父様、彼處は見物は出來ませんか。」

亭主はやう〳〵、ぺろりと唇をなめて納まり、知らぬ顔で、
「然やうでござりまして。隨分人出入もござります、御城下からお歴々のお方も澤山見えられますが、御見物とあつては、如何なものでござりませうか。」
「其處へ行つちや、寺か堂だと世話がない。」
「へい？」
と問返して、ニヤリと笑ひ、
「大きに、もし、お客様、失禮ながら、貴下は何方でお在なさります。」
「私は東京だよ。」
「でござりませう。どうも此の邊や、京阪地ではおありなさりませんやうにお見受け申しました。大層御遠方から、」
「諸國を歩行くのさ、私は畫師だよ。」
「畫の先生。」
「まあ、然うで在らつしやいますか。」と二人とも讀めた顔色。
「なか〳〵、先生などといふのぢやない、修行に歩行いて居るので、景色だの、何かね、住い處を見て稽古のために寫すんだが、山中の溫泉で、其の芙蓉の湖にある別莊といふのは、是非一度

見て置く可きだと、人がいふに就いて出向いた譯だよ。」
突然行つて賴んだ日にや、斷られりや其ッ切だ。何うだらう、其の別莊に此家で知つたものはなからうか。
上になけりや又下々で、仲働とか小間使とかいふやうなものでも可い、それとも用を聞く八百屋、魚屋などでも可いね。恁ういふ商賣をして居なさるから、隨分人の出入も多からうと思つて、賴むんだが、何とか工夫はあるまいか。まあ、其の杯を貰はうぢやないか。」
「これ、お松や、杯洗を持つて來い。然やうでいらつしやいますか。えゝ、一寸お待ちなさりまし。
これが、お庭ぐらゐ御覽じます思召なら、私がお隨伴をいたしても濟むやうに存じまするが、づッとお奥までござりませう。」
「出來るものなら、然ういふ大家だ、古い處の佳い軸物などもあらうから、何とかを得て何とかを望むとやらだが、實は願ひだ。」
「成程。お松や、お酌をして差上げんかい。何うだなうお松や、彼の方は、」
「然うですねえ。」
「誰か居なさるか。」

「いえ、もし、其のお邸においでなさいます劍術の先生でございますが。」
「劍術の、」といつて電の如く眉を寄せた。
些とも氣がつかず、
「塚原傳内様とおつしやるのが、始終手前どもへ召上りにおいでなさりまして、能くお顔は存じて居ります、其の方とも存じますが、ついお住居へ伺ひましたこともございませんで、何うかなう、お松や。」
「一寸、お父様。」
堤防の方で、えへん、えへん！
「ね、あの咳拂、」
「ほんに、」
「塚原様でございますよ。」
「噂をすればでござります、へゝゝへゝ。」

五十五

「お別莊の旦那、もし〳〵、」

「何だ、旦那は此にあるが錢はないぞ、どうだ、姐え。」
お松に呼ばれて門口に歩を留めた半白の老壯士、角ばつた赭ら顔、鼻も腰もどツしりと、身の丈高く、肩の幅の廣いのが、白絣を裾短に一着して、麥藁の海水帽を猪首に被なし、自然木握太な杖を撞とついて、それまで振つて來た大手を、門の柳に靜めたのである。
「御串戲おつしやりまし。」
「串戲ではないが錢もないわ、き樣が呼留めた塚原傳内、卽ちこれにありぢやが、其者には用事あるまい、盆まで待て、大分の借ぢやが節季には些少な間ぢや。な、松。
傳内面は猪の熊ぢやが、今日は此の前を通るに、帽子を傾げた、可愛かろ、と、亭主に然う謂へ、可いかい。ヤ然らば、」と行きさうにする。
「まあ、旦那、そんなことを申すのではございません、一寸お寄りなさいましよ、しばらくでございますねえ。」
「實に多日、はゝあ、其では飲ませるか。」
「差上げますとも。」
傳内据眼で娘を視め、
「はて、心得ぬ。此の方が香を嗅いで、腸に染込まするだけ、き樣たちは鼻撮みの豪傑ぢや、門

口へ出て呼ぶなどはつひぞ無い事。むう、扨は、き様が青大將に魅込まれたか、亭主が鰌の亡靈にでも取着かれて、此の方退治役といふのかい、イヤ案じるな。」

ぬつと入ると、新に肴を通されたか、又板前を働く亭主。

「さあ〳〵、お上りなさりまし。旦那、御機嫌宜しう。」

「一別以來ぢや、はゝゝはゝゝ、面も借金も久しいなう。」と忍の緒を解いてかなぐり取つたが、兜を腰かけへポンと投げると、輕くて大いから、くるりと廻る。

娘が初菊といふ身で取つて、小座敷の、先客が飲んで居る對面の壁の處へ持つて行く、と機會に旅の客、居座を直して、

「さあ、どうぞ此方へ。」

「やあ、お妨をいたす、此方此處で構はん。」

「旦那、そんなことをおつしやりませんで、折角あゝやつて、お膳を傍へおやりなさりましたものですから。」

「恐縮千萬、然らば。」

と傳内さしむかひに座を構へて、

「此の恐縮さ加減御覽じろ、此方、當酒亭には借があるで、はゝゝはゝ。」

「飛んだことを伺ひます。」

「あんなことばッかり、」と娘は兩方の顏を見競べながら、一寸嬌態をやつて、其まゝ板前へ行つたが、豫て心得たらしく、膳を其へ。

傳内じろりと見ると、コップが乘つたり。

「松、我儘をいふべきでないが、ビイルは不可ぞ。此方、似たものは麥湯もあやまる。」

「否、まあ、大いのでお引掛けなさいましな。」

「珍事々々、空恐しい事だ。」と傳内、他流仕合にまるつた體。

亭主皿を持つて出て、小腰を屈め、

「へい、旦那、御好物の、そろばんでございます、唯今に蒲燒も出來ますで、おゆつくり召上りまし。」

「愈々奇ぢや、これ、盆が近くとも此分な胸算用にも入れて置かぬぞ、此方酒さへあれば、香のもので澤山だて。」

「えゝ、先生、先生。」

「私かな、はい、はい。」

「失禮ながら、其の今日の處は、私がほんのお知己のしるしまでに差上げますから、御心配下さ

いませんやうに。」と旅客は丁寧に手を支いて一禮した。
「き公はえ。」
「唐突に御無禮ですが、お名前は、當家から承つて承知いたしました。手前旅のものでございますが、實は其の、畫を修業いたします、多見……多見、」
といひかけて、やゝあつて、
「多見五郎と申しますものでございまして。」

五十六

「實は其の、後學のために、先生が入らつしやいます、湖の別莊の中を拜見したいのですが、何とか、特別を持ちまして、お計ひ下さるわけには參りますまいか。」
「何、城が見たいな。」
「お城え？」と自ら多見五郎と名告つた男は、持つた猪口を、卜顋の下に張肱で持つて片手を疊について傳内蟹のやうに身構へて、
「城ぢや、浮城ぢや、此方が守護する彼の巨山家を、別莊などといふ奴は、武邊の片端も存ぜぬ、

今時の町人どもだての。
き公も志のある仁なら、然るべく心得られたい、何處から視めても立派な城だわ。聞かつせえ、此處を五里放れた處に、小松があつてな、名代の丹羽長秀が籠つた浮城がある、それに倣うた繩張ぢや。又此の傳内、老いたりと雖も武士だ、別莊などいふ、腰の拔けた隱居所の番はせぬ、天晴一城を預ると心得て、酒は飲んでもちやんと守護する。此方と附合ふなら、向後洒落にも別莊などいふまいぞ。女小兒は何と申しをつても取合ぬが、き公、酒は振舞はつしやる、いかにも話せさうぢやに因つて、心づけをいたすで。諸國まはらるゝなら加州手取川のほとりには、巨山氏の浮城があると物語らつしやい。當城承りの大將は、塚原芙蓉守平傳内、といふぢやがな、此方芙蓉守といふ面でない。美名はの、巨山氏の御内室、これが又古今の美婦だから、其の方へ奉つて、芙蓉夫人ぢや。湖に今一ツ名がある、卽此方頂戴に及んで、塚原獺之守は何うだ、はゝゝはゝ。」と笑を下腹から天井に搖上げた、久しぶりの狂水に獺之守機嫌不斜。
多見五郎畫伯はなか〳〵の眞面目にて、
「お城ですか、は、成程。然う承りますと一層執心になりますが、どうぞ先生、まあ、お一ツ、
否、先づ獻上。
獺之守様、へゝゝゝゝへゝ。」

「はゝゝはゝ、發奮む、發奮む。いや、御懸念無用ぢや、浮城拜見の儀な此方屹と引受けた、仔細ない。」

「へい〳〵、難有う存じます。」と嬉しさうに、ぴた〳〵と頭を下げたが、フト心着いたと見えて、急に片附けた風をする。

獺之守委細構はず、

「然しな、主人は不在ぢや。好な道の、謠に可い對手があつて、何時にない長逗留をされたが、此の城下金澤に假名倶樂部と言ふのがあつて、文武の百官、在野の有志、何も歴々が集會をさるるぢや、此方主人是に參會のために、然も何と、今日歸られたで、折が悪い。實は此方それを送つての歸りぢやての。」

「おや、大旦那樣がお通り遊ばしたのでございますか。」と娘が一寸口を入れる。

「今しがたよ、何が、送迎はさせぬ仁ぢやが、此方好い假託に伸出いたて。いや、二人連の處を き樣に呼ばれんが僥倖よの。何さ、き公、主人不在でも夫人は、觀音のやうに優しい人ぢや、其に此方引受けたれば、拜見の儀な念に及ばぬが、ソレ又一枚も賣つて、旅銀の處だての。」

「飛んでもない、決して松竹梅を持つて出て、草鞋錢を強請りますやうなのではございません。そりや、お情ない。唯好い景色を寫さして頂きますので、お席料は差出しましても宜いのです。」

と故とらしいが少し憤氣。

「こりや、悪かつた、獺之守目違ひぢや、しかし見上げたの、畫も定めて旨からう。何は、何はやらつしやるか、別嬪は。」

「別嬪ですツて？　出來ない事もございません、未熟ですが。」

「はゝあ、そりや惜しい、主人別嬪の畫が大好でな、金澤に居る上手なのに頼まれたが、いや、半年の餘にもなつて未だ描かぬさうで、あせつて居られた、在城なら一段であつたがな。」

「まあ、お一ツ。」とついと獻す。手つきから、目のくばり、身のこなしを、傳内、とろりと見て、

「き公、小取まはしで、恐しく氣が利くぞ、風雅人のやうでない、敵方の間諜か、敵討の大願でもありさうぢや。傳内醉はされたかも知れぬてな。」

「え。」

「何さ、それなら尙の事だ、たとひ盜賊でも、傳内が守護する浮城、自分で連込んで自分で生捉る、望む處だ、はゝゝはゝ。串戲だ、大失禮、盛に頂く、ゲエー。」

綾の鼓

五十七

戀草の露も思も亂れつつ、心狂氣に馴衣の、巳の日の祓やゆふしでの、神のたすけも浪の上、哀に消えしうき身なり。あはれ古を思ひ出づれば懷しや、行平の中納言、三歳は爰に須磨の浦、都へ上り給ひしが、此程のかたみとて、御立烏帽子狩衣を殘し置き給へども、是を見るたびにいやましの思ひ草、葉末に結ぶ露の間も忘らればこそあぢきなや。筐こそ今はあだなれ是なくば、忘るゝ隙もあるものをと、讀みしも理りや、猶思ひこそ深けれ、宵々にぬぎて我寐るかり衣、かけてぞ賴むおなじ世に、住むかひあらばこそ、忘れ筐もよしなしと、捨ても置かれず、取れば面影に立まさり、起ふしわかで枕より、跡より戀のせめくれば、せむ方涙に伏沈む事ぞかなしき。……

「松風だ。」

と梢に聲ある、枝に背を凭せたのが、其の謠と、鼓の調を聞き澄まして、姿も幽に聲も低く、傍なる、同一洋服扮裝の、より多く痩せたのに囁いていつた。

微妙なる一調は、水に響いて、浮城の門の、松の葉越に、明き高樓から聞ゆるのである。こゝに此の湖上の邸宅と、芙蓉の水と、夢見るやうな、白砂の眇たる中に、小松原とを存して、人は唯兩個の他に、似たるは獺の影もあらず。

さら〳〵と寄る波や、風が渡つて、やがて目に見ゆる限りの、夜の外へ吹き去ると、再び中空

に高く、此のあたり遮るものなき白山から、別に一陣颯と送るまでは、ものの戰ぐとも覺えず。寂寞とした、二ツの人影も、暗を遊ぶ木精の、松の姿に立戻つたかと思ふやう、唯木の枯れて立つ風情。

また謠ひ出した、此度は女性であつた。

松に吹來る風も狂じて、須磨の高浪烈しき夜すがら、妄執の夢に見ゆるなり、我あと弔ひてたび給へ、暇申して歸る浪の音の、須磨の浦かけて、吹くやうしろの山おろし、關路の鳥も聲々に、夢も跡なく夜もあけて、むらさめと聞きしも今朝見れば、松風ばかりや殘る

痩せた方が、

「今のは、」

「舞。」

やゝあつて男の聲音、トン――トンと鼓に合せて、

忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思ひなれ。然るに世の中は、

「綾の鼓だな。」と脊の高い方が呟いた。

今一人の痩せた方は脊も心ばかり低かつた。

「謠ふのは巨山か。」
「否、別人。」
「鼓は夫人……？」
「叱、」と抑へたが其ま、默した。
風がまた音づれて、白砂に描ける一幅の松原は、湖水をかけてざわと漾ふやうになつたが、得もいはれぬ優しい聲、ヤオと懸かると寂となる、トントンと鼓の音。
……つひに行くべき道芝の、露の命のかぎりをば、誰に問はましあぢきなや。などされば是程に、知らば然のみに迷ふらむ、驚けとてや東雲の、眠を覺す時守の、擊や鼓の數しげく、ねにたゝば待つ人の面影もしやみけしの、綾の鼓とは知らずして。
「私は欺かれた、あの通り、」と思はざる狀していふと、フト謠が止んで、すぐに鼓ばかり二挺になつて調が揃つた。
打つたり矣、一調、あはれ、天女、樂譜の風に身を任せて、月の都に行く道の、羽衣の袖のゆらぐにつれ、瓔珞の珠星に觸れて、乳房を撫づる音ならむ、折からの雲のたゝずまひ、花降りかかる氣勢して、ばら〳〵と松葉がこぼれた。

五十八

はら〳〵と松葉がこぼれた。
「非常に巧いぢやないか、感極る。」といつて輕くコト〳〵と靴の足踏をした。
脊のやゝ高いのが答へて、
「むゝ、上手に打つ、然も此の一調は鼓の祕曲だ。」
「なか〳〵委しいな。」
「父親は鼓打だつたよ。」
「然う、然う、然うだつた。而して、君の戀人は其の弟子だつけな、忘れて居た。知らずに聞く僕でさへ膚が粟立つ、君は感慨無量だらう。」
と顏を差覗くやうにしたが、肩を震はして、眞直にすツくと立つと、上衣の下に隱して持つた、蒼い燈の瓦斯燈を、別莊の門の方へは背後向けにして砂に置いたが、二ツ三ツ松葉が見えて、脊の高い方は幽に蒼然として照らされた。
些も猶豫はず衣兜に手首を突込んだ、脊の低いのが、衝と拔き出して高く片手を指伸ぶるや、手中に陰々として五寸の黑影、驚破、短銃を構へたのである。

「何をする、」と愼重な音調で留めていつた。
「餘りの事だ、此の神境を攪さないでは、君は氣絶して倒れよう。」
「待て、待て、其は以前の事、私は今、もつと神經が遲鈍になつて居る。」
「寧ろ過敏かも分らん。」といつたが、ゆるやかに手を引くと、殺氣は其の懷中に納まつた。しばらくして、
「大膽になつたぢやないか。」
「臆病の結果です。」
二人とも更に耳を傾けた、鼓の音は愈々澄んで湖の底なる小石にも、染入るばかり冴ゆるのである。
「あゝ、また同一やうなのを繰返す、別なのか。」
「同一處だ、綾の鼓……彼處に言句がある、謠がある。」
「何といふのかね。」
「明を。」
聲に應じて、一人が瓦斯燈を取つて宙に釣ると、他は其の下へ手帳を開いた、鉛筆の青い色と、白紙との上へ、齊しく四ツの目を注いだ顏は、村岡と水上であつたことは謂ふまでもない。

工學士は、打進む鼓とともに、しなやかな指で、すら〳〵と手帳の面へ、
綾の鼓とは知らずして、老の衣手力そへて、打てども聞えぬは、もしも老耳の故やらむと、
聞けども〳〵、池の波、窓の雨、いづれも打つ音はすれども、音せぬものは此の鼓の、
と記しかけて手が戰いて、仰いで、高樓を屹と見たが、
「失敬な！」
不二太は單に文字を讀み迚つて目も放さず。
「村岡、」
「應、」
工學士は口早く、鋭く疾く、
「此の謠を知つて居るか。下司下郎の老人が、生命をかけて、女御を慕つたと思へ。其の女御がだな、綾で造つた鼓を渡して、さあ、打て、もしも此の鼓が鳴つたら思を叶へよう、妄執を晴して遣らうといつた。鳴るものか、鳴るものか、綾薦にも、太薦にも、細薦にも、燈心草の鼓が鳴るか！　鳴らぬ鼓を打つて〳〵、老人は遂に池の水に溺れて死んだ。
村岡、君ならば華嚴の瀑だ。
何うせ出來ない相談だから、鳴らぬ鼓を打ては可いが、たとひ向うぢや忘れても、水上といふ

ものが、世にあるのに、憚つて然るべき謠ぢやないか。
一調に佳なるものは、三井寺もある、花筐といふのもあるのに、それも構はん。村岡、人は彼を、湖の女王と稱へるといふではないか。」
不二太は默つて打頷く。
「むゝ、思ひ上つたな、怪しからん、失禮だ。」といふうちに、びりゝ手帳を裂いて取つて、殆ど無意識に丸けて落すと、靜なる砂は靴の先にほろ〳〵と崩れた、鼓は地にも響いたのである。
酒の香が芬として、大喝一聲。
「誰だ！」
唐突に背後から、聲とともに手にかけて、工學士の上衣を、ぐい。

妖靈星

五十九

「面を見せろ、怪しい奴だ。さあ、此の方承りの城に對して、土塀の高さに見當をつけるやうな奇怪至極な事をする、强盜屋尻切の斥候と睨んだ、汝何者ぢやい。」と引捕へた上衣を掴んで、

身體をぐるりと松の樹を廻つて出て、工學士に詰寄せたは、今更めて謂はずとも、塚原獺之守傳内なるわ。此の豪傑、今入村の小柳亭に、饗應酒の悅に入つて、對手の旅畫師を怪しまず、よし又戒心すべきにせよ、腕に覺えの古强兵、筋が動く、腕が鳴る、事あらば尙一興と、性根を据ゑて飲むほどに、けるほどに、とつぷりと日が暮れて、漸々に御腰を上げた。田圃道、湖づたひ、高咄に噯を交へて、やゝ別莊に近くと、醉顏を吹く風冷かに、大な嘘一ツして、駭然とする耳許に、丁と響いたのは鼓の音。
己が稱へ奉る芙蓉夫人のすさみぞと思ふと齊しく、門を守る者は別にあつても、留守を預る大役に心着いて、一番魂を据ゑ直すと、おや〳〵自分のが拔けて出たか、砂地の小松の枝にかゝつて、茫乎とした蒼い灯。
宵闇の水は暗く、地は却つて湖の面の如き中に、大魚の鱗の光かと見えて、恰も龍燈といふものめいたり。
螢に遲いわたりなり、見渡す限り圓な砂地、小松はあれど人は見えず。
恁る勇士の性として、傳内事を好む癖なるに、醉心地なり、腹は出來たり、這奴、曲者ござんなれ、件の怪火掴んで呉りよ。大人氣ないぞと袖を控へて、畫師の留めるも聞かばこそ、燐火を捉ふるに靜なるべし、謀は密なるを可しとすで、傳内其の場で下駄を脫ぎ、件の杖を小脇に搔込